

二度目の韓国訪問②

2011/12/31 12:00:00 [社会福祉](#)



9月6日は、ソウル市の最北西部に位置する恩平区（ウンピョン区）のリハビリテーション病院の視察に伺いました。韓国国外でも著名な、社会福祉法人恩平天使園の系列の病院です。私達がここ数日間でお伺いした法人は、国内外ともに著名な施設であり、見学者が非常に多く、その受け入れ態勢や仕組みの様なものが確立しているように見受けられました。

まずは、責任者や担当者の方から施設概要の説明を受けます。流石は、IT 大国。どの法人でも恐らく専用のパワーポイントを用いて説明をされていました。1時間程お時間を頂けた中で、私が留意した点は以下の5点です。

- ①法人の理念や、ビジョン、ミッションのお話が冒頭にあって、しかも丁寧に時間をかけて説明がなされていること。
- ②家族による利用者支援の重要性を認識し、専門職としても家族支援を念頭に置いた実践を行っている点。
- ③在宅支援に焦点化した実践が多い点。
- ④グリーンリハビリテーション（親環境リハビリ）という概念と親穏感というコンセプト。
- ⑤病院内で、多職種間連携が意図されていること。

当然のことかも知れませんが、法人理念についての説明が非常に長かったと記憶しております。「当然のこと」と言いながら、なぜに留意したのか。それは日本の福祉施設に見学の際、これほど長時間にわたって懇切丁寧な説明を受けたことが無いと記憶しているからです。どちらかと言えば、どのような方法で何をしているのか、利用者の利用負担金額は幾らか、どのような設備があるのか、と言った方法論の説明が専らですし、見学者の関心にもそれと整合性があるようです。それでも敢えて、「当然のこと」と書いたのは、本来は

やはり、そこを理解せずしてその施設の実践は理解できないだろうと再認識したためです。伝える側も、そして見学側もその法人・施設の理念や方針をしっかりと理解することがまずは求められるのでしょう。そのことが出来ていない現状を自戒の念をもって振り返ることが出来ました。

日本と文化圏が近いこともあって、家族による利用者支援の視点はやはり強く認識されていました。障がい児のデイホスピタルでは、25 名の子どもが通院していました。毎日 6 時間治療を行い、その他は自宅で日常生活を送っています。その際も、「母親の愛」を子どもの支援に活用することが謳われていました。子どもの支援にとって、「母親の愛」が最善の支援であると担当者も説明されています。であるからこそ、家族支援も我々専門職の大事な仕事であると。

捻くれ者の私は、母親がいない子どものことはどの様に考えるのかと、質問したい思いを押さえながら説明を聞いていました。

この度ご一緒させて頂いた日本の医師によれば、韓国はリハビリテーション病院の床数が、日本に比べて極端に少ないそうです。そのような社会環境と、如上の家族による支援を重要視する文化が相まって、在宅重視の支援体制が取られているようです。

親環境リハビリでは、デザインによる治療を意図しているとのこと。家庭環境を髣髴させる物理的環境の中でのリハビリテーションを重要視していると説明がありました。それに合わせて、運営コンセプトとして、親穏感を標榜していると説明されます。親穏感とは、コンクリートや鉄筋の剥き出しになった設えではなく、木目をふんだんに使った親環境のハードを作ることによって成されると教えて下さいました。後の見学で気が付いたのですが、火災通報装置や熱帯魚の入った水槽の台、エレベーター、自動販売機の全てに木目のシートが貼付されていました。日本でもこだわりを持った施設は存在しますが、その徹底ぶりには驚くばかりでした。また、空間が狭い中で長らく生活するとストレスを感じるので、それを緩和するために建物を広く、より広く作っているのだそうです。この点は、日本の認知症ケアとは真逆の発想であると認識しました。感情等の感覚に敏感でいらっしやることが多い認知症の方が、だだっ広い空間よりは寧ろより仕切りが多く空間的に狭く感じられる場所を好まれることは日本では定説となっています。また昨今の日本の施設の場合、朝から晩まで 365 日施設内で過ごすことが前提ではなくなっています。当たり前のように日常的な外出があり、外部との交流が推奨されているわけですから、ストレスを意図して施設内を広く設える必要が無くなっているのも事実でしょう。

今年に入ってお付き合いさせて頂いている同業者の先輩に物理的環境が利用者のケアと、

職員の仕事にどのような影響を与えているのかを研究されている方がいらっしゃいます。また、一昨年前訪れたスウェーデンにおいても、施設の内装は非常に瀟洒な作りになっていたのを思い出しました。私の組織運営に対する基本は、ハードよりソフト重視です。どちらかと言えば、ハードはどうしてもよい位に思っていました。しかしながら、特にこれからは、サービス付高齢者向け住宅が主流になることが予想されます。住宅であれば、なおのことハードの重要性を認識せざるを得なくなるところです。ソフト重視の路線を変える必要はありませんが、ハードにも一定の効果と効力があることを認識した運営が求められているのかも知れません。

その他留意したのは、物理療法室と作業療法室が隣同士にあり、自由に往来が出来る設えになっていたことです。これは、患者同士が話し合い支え合うことが大事であると同時に、専門職同士も話し合って自由に意見交換ができるようにしているためだと説明がありました。日本で言うところの多職種間連携が重要視されていることは言うまでもありません。

その後実際に施設内を案内いただいて感じたことは、如上の説明の通りであろう実践が成されていたことです。疑似家庭環境を作って、そこでリハビリテーションを実施する親環境リハビリテーションや在宅支援を念頭に置いた実践。子どもの支援に「母親の愛」を重要視しており、家族がゆっくりと過ごせる空間を設けている点。小児科病棟では、間接照明や非常に可愛らしいデザインの設えになっていることなどが目に留まりました。

見学終了後には、質疑応答の時間を 30 分ほど設けて頂くことができ非常に有意義な訪問でした。質疑応答における要旨は以下の通りです。

①対象者像はどのような方が多いのか？

⇒富裕層ばかりではない。ここは社会福祉病院なので、治療費は安い。低所得者層も治療が出来る。

問題なのは、待機者が多いこと。1 年から 2 年待っている人がいる。デイケアは特に希望者が多いので、2・3 年間待たされるのが普通である。リハビリテーションプログラムの基礎を作ったのが当病院であり、それは現在全国の病院で広まっている。言わば、国内でも先駆けの存在で人気も高い。

②入院可能な期間はどのくらいか？

⇒最大が 3 ヶ月の入院が可能で、それを過ぎれば一般病院へ移行する。

③職員の中でクリスチャンはどの位いるのか？

⇒韓国の総人口は約 4800 万人で、その国民の 5 分の 2 ぐらいがクリスチャン。職員の 70% がクリスチャンである。

④ボランティアの受け入れはどのくらいあるのか？

⇒ここは病院であるため、短期ボランティアの受入は行っていない。1年ごとの長期ボランティアを受け入れている。現在108人が登録している。また、法人で3つのセクションがあり、リハビリチーム・医療チーム・社会福祉チームそれらが連携の上ボランティアの受入調整を行っている。

⑤職員の労働時間数について

⇒1日8時間が基本である。8:30~17:30が基本時間。月曜日から金曜日まで働ける。病院では労働時間が守られており、残業は少ない。毎週木曜日のケースカンファレンスや勉強会等は勤務時間外で行われている。

⑥人材の確保について

⇒韓国には社会福祉学科がある大学が50校ある。そのうち150人の学生を選抜して、実習してもらってその中から良い人を選抜している。

⑦人材育成の取り組みについて

⇒全職員がテーマごとに勉強をして、一年に一回発表会がある。その他、開国医療研修（海外の事情を学習）がある。大学在学中採用予定者を2ヶ月間研修。入職後また研修がある。法人の中に教育センターがある。

⑧リハビリ病院のソーシャルワーカーの配置数と業務内容について

⇒MSWは2人だったのが今は1名。法的にMSWの配置基準は無い。業務内容は、低所得層の方々の経済的な相談。子ども用の教育プログラム等のプランニング。

⇒ボランティアの方々が、教育プログラムの一部を担っている。例えば、料理プログラム。インドカレー等の変った作業の場合は、そのボランティアに依頼する。多様なボランティアが登録しているので、その特技に応じた活動をお願いしている。ボランティアコーディネーターのような仕事を担っている。

⑨人権教育について

⇒経営者も管理者、職員も金銭的報酬だけに価値を求めている。慈善の精神をもってやっている。

⑤については、系列の児童養育施設天使園のことが手元の文献で次のように書かれています。「天使園は小舎制をとっていて、（中略）男女別に10~16人の子どもたちを二人の生活指導員が担当する体制である。（中略）生活指導員は午前10時から次の日の午前10時までの出勤で、二人で交代するという勤務体制となっている。これはかなりハードな体制だ。ただ、補助金の関係でこういう体制にせざるを得ないという。事務局長は、国の定めた職員数では、労働基準法で規定されている労働時間を守ることさえできないし、サービスの質も当然落ちざるを得ない。国が労働基準法を制定しておきながら、国の定める最低基準では労基法さえも守るのがむずかしい現行施策を批判していた」※1。

例えば、日本においても小規模多機能型居宅介護の解釈通知には、次の様に基本方針が定められています。「指定小規模多機能型居宅介護は、通いを中心として、利用者の様態や希望に応じて、随時訪問や宿泊を組み合わせサービスを提供することにより、利用者の居宅における生活の継続を支援するものである」。ここで言う「利用者の様態や希望に応じて」サービスの提供を行うこと自体が、実は、休日出勤や時間外労働を推奨していることになります。その手当を十分に支給できる、それに耐え得る報酬設定になっているかと言えばそうではないところに問題があるのでしょう。4月からの介護保険制度改正の指針の一つとして、「労働法規の遵守の徹底」が掲げられていると聞きます。であれば、遵守できるだけの十分な人員配置と報酬設定が成されなければならないのは自明の理です。どこの法人も、遵守を図りたいのは山々ではないでしょうか、その中で、利用者のニーズに応えるために何処まですべきか、ギリギリの経営判断を強いられながら運営をしているところが殆どであると認識しております。また、そうであって欲しいと思っています。韓国の実情は知りませんが、日本の場合、いみじくも厚生労働省という一つの部局で、介護保険法と労働基準法が動いている訳ですから、その辺りを是非ともご協議いただきたく思います。机上の空論による整合性ではなく、実務レベルにおける整合性のとれた介護保険制度の在り方を是非ご検討いただきたいものです。

⑦人材育成について感じたことですが、人材育成には、OJT や、Off-Jt、SDS など多様な実践があると思われますが、人材育成＝単なる研修と位置付けておられるように自身は受け止めました。つまり、人材育成に関する多様な方法論が確立していないのではないかと類推しながら話を聞きました。

病院が掲げる「中心となる価値」の中で、「高い専門性」と、「価値の覚醒」として「新しい治療の領域を開発する」というお話がありました。私たち地域の絆が実践の中で大切にしていることの一つとして、「他者が取り組んでいない新しいことに取り組む時、容易に実現し得ない夢や理想に近づく実践時に、人の行動はより尊いものになる」というものがあります。今作成中の新しい法人パンフレットには、「地域の絆 経営ビジョン」として記載される予定です。

国内津々浦々、何処の法人や施設に行っても、福祉専門職として同様の視点で頑張っている仲間がいると強く思って仕事をしてきましたが、どうやら国外においても、また同様の仲間がいるようです。

グリーンリハビリテーション（親環境リハビリ）という概念と親穏感①



病院なのですが、家庭的な設えがされています。

グリーンリハビリテーション（親環境リハビリ）という概念と親穏感②



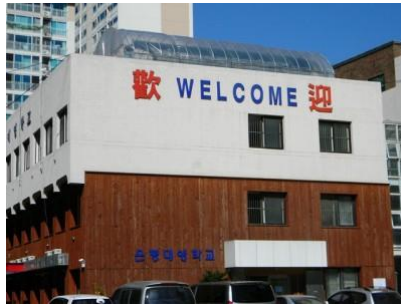
病院内ですが、木目調に対するこだわりがありますね。

グリーンリハビリテーション（親環境リハビリ）という概念と親穏感③



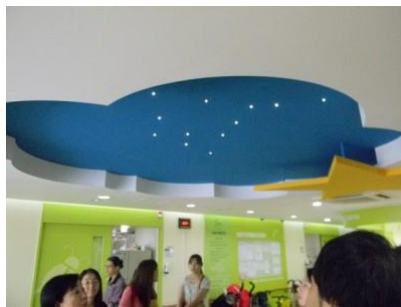
ここまでこだわるか〜、と思いました。

グリーンリハビリテーション（親環境リハビリ）という概念と親穏感④



外観もちろん木材を使用。日本の施設や病院でも見られる光景です。

小児科病棟は可愛い設えで…。



日本の小児病棟でも、同様の設えは見られますが…。

韓国の焼き肉①



牛肉の焼き肉です。お肉はまあまあですが、たれや味付けが素晴らしい。昼からビールを飲んでましたよね！？懐かしいです。

韓国の焼肉②



京都ノートルダム女子大学の三好先生お勧めの焼肉屋さんを訪れました。この焼肉のお肉は、何と、鶏肉なんです。もっとも、韓国では一般的だそうです。

しかも、とてつもなく美味しいのです。岡本榮一先生ともご一緒させて頂きました。本当にお世話になりました。

紛失防止のためチェーンキーで車いすを固定



こちらは日本ではお目にかかれない光景。深読みして、利用者が車いすを持ちながら伝い歩きをされる際、車いすが転倒して危険なので、固定しているのかと思って、そうではないかと聞いてみましたが、単なる紛失防止だそうです。

手すり本来の目的ではない形で使われています。当法人の各センターにも手すりは基本的にはありませんが、このような使い方もあるものだと感慨深く見させていただきました。

日本人間関係学会の皆様



大変お世話になりました。多くのご示唆と学びの機会に感謝です。

[この記事にコメントする](#)

[コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

経済指標の限界証明

2011/12/07 12:00:00

[社会福祉](#)



最近結構忙しく本ブログの更新も等閑の状況です。そのような状況下においても、ブログの更新を迫られる事態が発生しました。日本経済新聞はあまり読む機会がありませんが、出張先のホテルでたまたま目にした記事が原因です。

12月4日付のその社説によれば、「審議会（社会保障審議会介護保険部会）は両論併記ではあるが、介護サービスの必要性が低い人の自己負担を増やすことや介護計画作成の有料化などは先送りし、大企業とその従業員に負担増を求める方向だ。（中略）働く人の処遇改善は大切だが、事実上、赤字国債で手当てしている現状は改めるべきだ。介護施設などの

収益は改善している。介護報酬の引き上げよりも、事業者の経営努力で対処すべきではないか。

介護保険制度改革は、来年の通常国会へ提出する法案に何を盛り込むかが焦点になる。自己負担も含めた介護保険の総費用は 2000 年度の 3.6 兆円から 11 年度当初予算では 8.3 兆円になった。こんな状態では消費税を上げても制度を持続させられない。まずは徹底した効率化が必要だ。

軽度者の利用が多い生活援助サービスは、掃除や買い物の手伝いなどが大半だ。こうしたサービスは保険の対象からはずすべきだ。すぐに無理なら将来の廃止を前提に、軽度者の自己負担を 1 割から 2 割に上げ利用の抑制を図る必要がある。一定の所得がある人の利用料も上げていい。介護計画作成も有料にして、利用者にコスト意識を持ってもらう必要がある」※。

社説、つまりこの新聞が、誰の側に立ってジャーナリズムの実践を展開しているのかは明白です。

2007 年度の有効求人倍率は全職業では、0.97 でしたが、介護業界は 2.10 を標しています。同じく 2007 年度のデータでは、全労働者の平均給与額は、男性が 5, 118, 800 円で女性が 3, 276, 800 円でした。それに比べ、福祉施設介護職の男性の平均給与額は 3, 077, 400 円、女性は 2, 771, 200 円です。またホームヘルパーの男性は 2, 782, 700 円であり、女性は 2, 632, 800 円でした。これらは厚生労働省のホームページからシロウトでも抽出できるデータです。経済は数字が命だと認識しておりますが、この事実をどう捉えれば如上の論調になるのか理解に苦しみます。産業界も不景気で給与額が下がっているのに、介護職の給与額はそれに比べて然程悪くは無いとの意見も聞きますが、事実誤認も甚だしく、感情論で数字を見てない方々の迷言でしょう。

現場を担っている私にとってみれば、介護保険制度そのものが万能ではなく、利用者の生活支援に十分対応できていないと痛切に感じている毎日です。介護保険制度の限界を、インフォーマルな社会資源を発掘・創出しながら、それを利用者の支援に繋げて行くことで補っているのが関の山で、福祉専門職は少ない社会資源の中で日々もがき苦しんでいます。

人の生活は質的にも時間的にも幅広く、介護だけで守れるものではありません。家事等の生活支援を介護保険制度から外すことは看過できたとしても、では誰がそれを支えるのか、その受け皿論も無いまま切り捨てるのであれば、これは弱者切り捨ての批判を逃れることが出来ない行為となります。この社説はそのような論調に拠っているのです。

当然にして日本は福祉国家ではありませんが、北欧を代表する福祉国家の特徴は、経済状況が悪化しても社会保障費を担保する姿勢にこそ存在します。事実、一昨年 3 月に訪問したスウェーデンのソレンチューナ市の行政職は、はっきりと私たちにその姿勢を示されていました。医療や福祉、年金と言ったものは、人が生きていく上で、空気や水と同様に重要なものです。その空気や水を捨て去れば、やがて社会はどうなるのか、推して知るのは子どもにでも出来るはずです。なぜそれができないのか、私は不思議でなりませんでしたが、本社説を拝見して少しわかった気がします。その意味において、本社説は丁度良い“教材”と言えるでしょう。

それは経済指標のみで社会を捉えることによる限界です。経済指標に焦点化して社会を捉えてもそれは、一部であって全てを捉えたことにはなりません。自明の理ですが、そのことに気付いていないことが病理であり、不幸を招いているのではないのでしょうか。

現在の私の経営哲学の要諦は、「情けは人のためならず」です。自分一人が良くなればと思って行動すればするほど、“利益”は遠のいて行くものです。過日訪れた東北の被災地で、集落の中で軒だけ奇跡的に無傷であったご自宅があり、その住民とお話をしたことがあります。私がつい「御無事で良かったですね」と配慮に欠ける発言をしてしまった際、「自分の家だけが無事で、何一つ良いことなんてない」と涙を浮かべておっしゃられたのが今でも脳裏に焼き付いています。同じ社会を構成している以上、自分の幸福と他人の幸福は常に何処かで繋がっているのです。

一部の“不幸”な人たちのためではなく、今は“不幸”ではない私たちのために社会保障は存在します。そして、その存在をうまく活用することこそ、経済の活性化を見出すことが出来ると考えるのが私の持論です。日本の介護技術は世界に誇れるレベルに到達しつつあります。これを“輸出”し、福祉後進国の援助を積極的に展開することをもって、経済活性化の“武器”にすることも可能でしょう。経済にとって、社会保障は足枷ではなく、ピンチをチャンスに変える起爆剤の要素をもっていると私は認識しています。

社会構造や、社会政策等、そのマクロの視点で社会を捉え、その上で、数々のミクロな事象を分析することがジャーナリズムには求められています。経済という指標一本でのみ捉えた視点は脆弱と言わざるを得ません。今求められているのは、マクロの視点で社会を捉える力なのかも知れません。そして、それはそのままソーシャルワークに今求められている視点でもあるのです。

※『日本経済新聞』「社説 介護保険は給付抑制と効率化に切り込め」2011 年 12 月 4 日

福祉・介護人材育成考②

2011/12/05 12:00:00

[地域密着型サービス](#)

やる気を引き出す指導法～福祉専門職育成における要諦



職員の仕事に対する動機づけを維持・強化し、職場定着率を高め、更にそれが育成にも連動するといった少し“高尚”なお話をさせていただきます。福祉・介護業界では職員の定着率の低さが問題として取り沙汰されています。厚労省の調査結果を大略で見えますと、主な入職の理由は、「働きがいのある仕事だと思ったから」及び「自分の能力・個性・資格が活かせると思ったから」が大半であり、主な退職・転職の理由としては、「給与等の労働条件が悪いため」や、「仕事の内容がきついため」、「仕事にやりがいがない」、「職員間の人間関係が良くないため」が挙げられているようです※1。これは、「働きがい」のある職場であると認識して入職したが、実際に働いてみると「働きやすさ」と「働きがい」の無い職場であるとの認識に至り退職した事例が数多あることを物語っています。

まずは少し「働きやすさ」と「働きがい」について考えてみたいと思います。このことを思い起こすと「ハーズバーグの動機づけ・衛生理論」が私の脳裏に浮かんできます。この理論では、「行動の動因は2つの欲求にもとづく」ことを前提としています。2つの欲求では、「第1の要因【衛生要因】」として「賃金や労働条件、人間関係、作業条件等の内容」に対する欲求を指し、「第2の要因【動機づけ要因】」として「やりがいのある仕事、自己成長、目標の達成、達成の承認、責任の増大など」に対する欲求を指すと言われています※2。私は端的に、「働きやすさ」が「衛生要因」、「働きがい」が「動機づけ要因」に其々関係することであると認識しているところです。

であるならば「働きやすさ」の充足は、例えば、給与水準の向上や、残業時間の削減、有給休暇の取得のしやすさ、手厚い人員配置、福利厚生の実充実といったものが挙げられる

のではないのでしょうか。また、「働きがい」の実感においては、人材育成システムの充実や、法人理念の明確化、所属意識の醸成、適切な権限移譲、福祉専門職としての矜持を持った実践が出来ること等がそれに該当すると思われます。

ここで注目をしておきたいのは、むしろ「働きがい」の方です。「働きやすさ」を充実するためには法人や事業所独自の努力において、若干は対応できる部分がありますが、その全てにおいては範疇ではないと私は考えております。介護報酬にて、収入の大半はどの法人も同列の状況にありますので、このことに対する取り組みは、一法人・事業所では解決し得ない問題でしょう。だからといって、無論何もしないわけではありません。ただ、いくら努力を重ねても限界があると申し上げたいのです。では、「働きがい」の方はどうでしょうか。その多くは組織的・体系的な問題であり、こちらは法人・事業所努力で多くは対応出来るものと考えています。「地域の絆」では、「働きやすさ」はもちろんですが、「働きがい」に最も焦点化した人材マネジメントを行っております。法人努力でどうにもならない要素が強い「働きやすさ」よりも、努力によって改善の余地の広い「働きがい」へのアプローチに力を入れているのです。

多くの職員が求める「働きがい」の中核は、福祉専門職として社会性（社会に貢献すること）の高い実践ができることにあと私は考えています。利用者や家族、地域住民に喜んで頂ける実践がしたいと多くの職員は思っています。そのためにも、自身の専門性をより高めていきたいと。そのような社会的責任や使命感の高い仕事であるからこそ、給与水準が低くとも、労働条件が多少悪くとも、この仕事を選ばれているのだと私は認識しております。

先ほど挙げた厚労省の調査結果を見ても、そのような動機で就職先を決めていることが読み取れます。また、退職の理由としては、給与等の労働条件の悪さや、人間関係の不味さ等が挙がってはいるものの、やはり仕事にやりがいが無いと言った声も多くある様ですし、一番気になるのは、どの項目にも該当しないその他の項目が一番高率であるということです。かてて加えて、仕事に対するやりがいや矜持が減退すると、金銭的価値を人は求めるのではないかと私は考えておりますので、入職時は「働きがい」を求めて、退職時は「働きやすさ」を求めて辞める構図には、当初の期待の裏切られた感覚が影響を与えているものと推察されます。つまり、多くの職員は、仕事に対する夢や誇りも持てないのなら、せめて、賃金等の処遇で補填してもらいたいという気持ちになるのではないかと考えるのです。

2000年に介護保険制度が導入され、営利法人も非営利法人も同じ土俵で相撲を取ることが強要されました。その際、社会福祉法人等の非営利法人も、事業性（事業の継続・発展

を求めるため収益を上げること)の強化を図ってきたように伺えます。利用者が何人利用して、いくら収入が入ると言った現実的な話が現場の中でも飛び交うようになったのは介護保険制度が導入されてからではないでしょうか。しかし、それは管理職と言われる人たちがしっかりと認識して舵を取ればよい話で、現場で利用者の直接ケアに携わっている職員には伝えるべき話ではないと私は思っています。それを多くの経営者は、現場の職員に求め出したのではないかと。

先ほど申し上げましたように、現場の職員の多くは、専門職としての社会性の高い実践を行い、利用者・家族・地域住民に喜んでもらいたいと思って必死に働いています。経営陣が出来ることは、その思いを大切にすることではないでしょうか。であるにも拘らず、多くの経営陣は現場に社会性ではなく事業性を求め過ぎているのではないかと考えます。それが、職員のモチベーションを下げ、離職率の上昇へと繋がる大きな要因としてあるものと認識しております。

求人票を見る限り、この業界の給与水準が低いことは一目瞭然です。それでもこの業界の求人に応募し、入職する職員の動機は、給与等の処遇にはないはずです。処遇は良くないが、社会性の高い業務内容に魅力を感じ入職しているのです。であるのに、職場では社会性の高い取り組みが推奨されず、事業性のことばかりを追求される。そのことで、モチベーションを下げた離職する人が多いのではないかと仮説を立てているのです。要するに、給与も安く、夢や希望も感じられないのなら辞めた方が良いと判断されるのでしょうか。福祉専門職としての夢や理想、希望を見ることが出来ないのなら、この仕事には何のメリットも見出すことが出来ないのではないのでしょうか。

では、社会性の高さを感じる仕事はどの様になされるのでしょうか。その要諦は、ビジョンを明示することです。目の前の認知症高齢者へのケアが、ご本人はもとより、ご家族や地域にどのような幸福をもたらしているのか、そのことを見せていくことが求められています。また地域住民の理解や協力を促進することが、目の前の利用者の幸福に如何に繋がるのかを見せるのも然りです。

過日拝読した姜尚中氏の著書においても次のように記されています。

——「経営者は、これまでのような金融工学的なマネーゲームでは、企業活動の意味を語れなくなったのです。

こうした風潮にともなって、いま、アメリカのビジネススクールなどでは、従来型に代わるテーゼを見つけようと必死になっている気配が見えます。その彼らも、まだ『これだ!』というストーリーは見つけきれていないようですが、こう言いはじめたことだけは確かです。

『なぜ、何のために働くのかという意味づけを、社員にきちんと示せないリーダーは失格である』と。たとえば、『いま、ここでこうやって作っている製品が、十年後の豊かな森林を作るのですよ』とか、『いま、この労働で流している汗が、病気のおじいちゃん、おばあちゃんの心の支えになるのですよ』とか、そのようなビジョンを、フォロワーが納得できるかたちで示せなければならないのです」※3。経済における成長戦略に陰りが見え始めた昨今、産業界においても処遇の向上ではなく、ビジョンを見せることで社員のモチベーションを高める手法が受け入れられつつあるのです。

目の前の利用者への具体的支援が、どのような社会貢献に繋がっているのか、この仕事が如何に社会的使命や責任を全うできる素晴らしい仕事であるのか、そのビジョンを示すことなくして福祉専門職の育成は出来ないと自身は考えます。

また、福祉専門職の育成では、原理原則論や理想・理念を伝えることが不可欠です。人員配置等の多くの制約ある中、理想の福祉実践が出来ず悩んでいる職員が多い中、敢えて、原理原則論と理想を語る必要があるのではないかと私は考えています。「出来ていない」現在を基準に、理想を諦めるのではなく、今「出来ていなくとも」いつかは実現させるための前向きな実践を後押しすることが重要です。恥ずかしいのは、今「出来ていない」ことではありません。今「出来ていない」ことに開き直ったり、居直ったりすることが、専門職として最も恥ずかしい行為であると言えるのではないのでしょうか。「出来ていない」現実から、僅かであっても日々改善を図り、前に向かって取り組んでいく姿勢が必要です。それを強化するためにも、経営陣や人材育成担当者には、信念を持って、弛み無く理想を語り続け、その実践を後押しする姿勢が求められています。専門職としての価値・理念や法人理念を、しっかりと理解した上で、それを現場の職員に分かりやすく理解できるよう再言語化することが求められているのです。

他者が取り組んでいない新しいことに取り組む時、容易には実現し得ない夢や理想に近づく実践時に、人の行動はより尊いものになると認識しています。斯くの如き職場風土でこそ、人は育つし、その職場に誇りを持って留まり続けるものであると認識しているところではあります。

※1 厚生労働省

「福祉・介護人材確保関係主管課長会議 資料」

(参考資料「介護福祉士等現況把握調査の結果について」)

平成 20 年 12 月 25 日

福祉・介護分野で働こうと決めた理由

福祉・介護分野の仕事を辞めた理由について見ると、社会福祉士・介護福祉士・精神保健

福祉士のいずれも「給与等の労働条件が悪いため」の割合が最も高かった。この他、社会福祉士・介護福祉士については「仕事の内容がきついため」、精神保健福祉士については「職員間の人間関係が良くないため」の割合も多い。

厚生労働省

「福祉・介護人材確保関係主管課長会議 資料」（参考資料「福祉・介護サービス従事者の現状（データ集）」「介護職員の定着の状況等」）

平成 20 年 12 月 25 日

介護職員の現在の仕事や勤務先を選んだ理由

働きがいのある仕事だと思ったから 64.6%・自分の能力・個性・資格が生かせると思ったから 36.8%・通勤が便利だから 35.2%

介護職員の現在の仕事や勤務先を選んだ理由は、「働きがいのある仕事だと思ったから」、「自分の能

力・個性・資格が生かせると思ったから」が多くなっており、「給与」や「労働条件」の割合よりも、本人の仕事内容に対する意欲の割合が高くなっている。

介護福祉士の転職理由

仕事にやりがいがない 20.5%・職場の人間関係 17.1%・給与が低い 15.0%・その他 30.2%
介護福祉士の転職理由は「仕事にやりがいがない」、「職場の人間関係」、「給与が低い」の順で多くなっている。

※2 田中久夫氏『改訂福祉職員研修テキスト 管理者編』全国社会福祉協議会 P.82 2008 年 5 月

※3 姜尚中氏『リーダーは半歩前を歩け』集英社新書 P. 56-57 2009 年 9 月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

福祉・介護人材育成考①

2011/11/18 12:00:00

[地域密着型サービス](#)

人材マネジメントに必要な基本的な考え方

人材マネジメントの目的は育成にある!?



今回より、5回に渡って人材マネジメントについて叙述させていただきます。今から継続してお話しすることは、ある一つの考え方に過ぎません。産業界においても、また福祉業界においても人材マネジメントには多様な考え方があります。私の考え方は、ソーシャルワークという専門性と、産業界における組織性を足して二で割った視点であると自己分析を行っているところです。私の考え方が全て正しいと認識しているものではありませんし、それを押し付ける思いも皆無です。あくまで一つの考え方として、捉えて頂き、取捨選択いただければ幸甚に思います。

まず、第一回目は、人材マネジメントの概要と基本的な考え方、そしてその目的について共通理解を図りたいと考えます。福祉業界における人材マネジメントの構成要素と大まかな流れは、①求人②採用③配置④育成⑤評価⑥処遇と捉える事が出来ます。人材マネジメントと言えば、直ぐに管理・育成といった言葉がイメージされるかも知れませんが、これら6つのカテゴリーに対して、どのような方針を持って、実際に何を行うのかを認識する必要がありますし、全体の流れをしっかりと理解する必要があります。①「求人」においては、社会に対してどのようなメッセージを発信すれば繋がりたい人材と接点を持つことが出来るのか。②「採用」では、法人が求める人材の採用基準は何か。③「配置」では、どのような基準で人を配置し、異動させるのか。④「育成」では、その目的は何か、それをどのような方法で達成するのか。⑤「評価」では、どのような項目や指標を用いて行うのか。⑥「処遇」では、給与・賞与の体系と福利厚生をどのような視点で配分するのか。6つの視点で、その方針と実践内容をまず明らかにする必要があるでしょう。これは組織的に実践する必要があると私は考えます。因みに、「地域の絆」における方針と実践内容は当HPに示す通りです。

全体の流れを捉えて頂いたところで、人材マネジメントの目的について考えてみたいと思います。実は、これが不明瞭であれば、如上の6つのカテゴリーの内容が定まりません。何のために私たちは人材マネジメントに労力を割く必要があるのでしょうか。

一つは、産業界的な考え方になりますが、私たちの業種は、原材料を仕入れて、それを加工したり付加価値を付与して販売するという単純な経営内容ではありません。この経営活動においては、仕入先から原材料や商材を仕入れるという発想は無く、“販売”する“商品”は職員が提供する専門性と組織性に裏打ちされたケアやサービスそのものとなります。つまり、職員の皮膚の内にある専門性と組織性こそが“製品（product）”に当たるのです。この質を高めることが出来るか否かが経営の要諦である業態です。であるにも拘らず、我々の業界はあまりこの分野に熱心に力を注いで来なかったのではないかと思いますし、またそれが社会的評価の停滞を招いているとも分析しています。私たちの業界は、人材マネジメントに労力と時間、資源を投入しなければならない所であり、そのことが組織の発展と継続に欠かせない要諦であることをしっかりと認識することから行動しましょう。

さて、私たちは何のために人材マネジメントを行うのでしょうか。私は大きな 2 つの目的があると考えています。一つは、福祉専門職を育成するため、二つ目は、法人職員を育成するためです。私たち福祉や介護の分野には、数百年に渡って裏打ちされた専門性が存在します。その専門性は、法人によって大きく異なるものではないはずです。専門職である以上、どの職場であっても共通する価値・知識・技術が存在します。これが専門性に当たるのです。人材マネジメントを実践するに当たっては、この専門性を組織が理解していなければその管理や指導が出来ません。例えば、厚生労働省は、「求められる介護福祉士像」※1 を示していますし、日本社会福祉士会は倫理綱領を明示しています。この様な内容が頭に入らずして、福祉・介護専門職の育成は出来ません。組織の人材マネジメントを担う方々はしっかりとこのことを認識しておく必要があります。

二つ目の法人職員としての育成については、専門性の中でも何を重点的に実践し得る人材を育成するのか、また法人組織人としてどのような組織性を求めるのかを理解する必要があります。この際最も重要視されるのは、法人理念です。法人理念は、組織の存在意義を示すものであり、職員の考え方の基準や拠り所を示すものです。組織は法人理念を遂行するためにあり、法人が求める人材は、法人理念を遂行するために必要な人材であると言えます。「地域の絆」では、「求められる職員像」を役職や職種ごとに可視化（文書化）して、各事務所内に掲示を行っていますが、その元になる考えは、「法人理念遂行のために必要な職員像」から構築されたものです。法人職員としての育成では、①専門性の中の何処を重点的に実践するべきなのか、②法人組織の運営方針・機能を鑑みて、どのような組織性を求めるのか、をそれぞれ考えていく必要があると私は認識します。特に、組織性の考え方は重要です。私たちは個人で実践しているわけではありません。同僚・上司・部下、更には他職種としっかりと連携を図って、チームで対人援助活動を行っています。認知症ケアは一人で出来るわけではありません。私たちは労働者ですから、決められた労働時間しか利用者に接することは出来ませんので、公休や夜勤、早出、遅出といった変則業務の

中で互いに情報共有を図って、利用者に接することが基本的なこととして求められています。しかし、その組織性を理解せずに多くの職員が業務に入れば、夜勤帯の出来事を記録に残さず報告しない、家族からの苦情を上司に報告しない、ミーティングで決まったことを守らない、記録に記載されている内容に目を通さないと言った状況が発生します。このような組織性の不備は、ケアやサービスの低下を強く招くことになります。また、ケアやサービス場面においては、日々様々な課題が発生しているはずです。例えば、送迎のミスや、服薬管理のミス等の決して許されない失敗を職員がした際、それを個人の責任として処理するのではなく、組織全体の問題であると認識し、組織的に解決することが求められますし、その組織力を高めることが良質なケアやサービスには不可欠であると認識できるはずです。このような、組織性の教育を行うことも、人材マネジメントの要諦であると私は考えています。

人材マネジメントの目的は、①専門職としての育成と、②法人職員としての育成の視点があり、それは、専門性と組織性の二つの指標でなされるべきであるというのが私の考え方です。専門性と組織性の一般的定義としては以下のような事が言われているようです。「福祉職場においては、個々の職員がそれぞれ固有の専門性をもって活動し、業務を遂行することによって日常的な福祉サービス機能を高度化し（専門性の向上）、もう一方では、一個の組織体として目的に沿った意思統一が図られ、効果的に円滑化する仕組みにもとづいて相乗効果の発揮（組織性の充実）が図られている」※2。

人材マネジメント自体は、6つのカテゴリーから構成されている旨前述しました。しかし、6つのカテゴリーの中心は「育成」であると私たちは考えています※3。社会構造を鑑みれば、2025年の労働力人口は、2005年比で5～12%減少すると言われている一方、必要な介護職員数は同90%～130%増の人員確保が必要であると言われています。これを基に考えても、経験豊富で有能な人材を外から確保するには限界が生まれます。組織の継続・発展のためには、外部産業や新卒者等の未経験者に対する新規開拓も厭わず実践する必要があります。つまり、これらの方々を採用し、自法人で育成する仕組みが不可欠となることが明白です。その様に考えても、「育成」は人材マネジメントの第一義として位置づけられるべきでしょう。

介護保険事業等の社会福祉事業を担う組織は、社会的企業であると私は考えています。社会的企業とは、社会性の高い理念を持ってその遂行のために、ビジネスの手法を取り入れる組織であると考えますが、最も重要なのは社会性の高い理念を持っているということです。社会性とは、社会や地域に貢献すること、他者の役に立つことを重視する性質のことを指します。他の産業界の事業と社会福祉事業が大きく異なる点は、この社会性の高さであると自身は認識しています。人材マネジメントを実践するに当たっては、この社会性

の担保も大事な視点となるようです。自法人の職員だけが育てば良いという視点ではなく、地域におけるあらゆる福祉専門職が育っていかなければ利用者は安心してその地域で生活することが出来ません。また、収益を上げる事業性の事ばかりを、職員に教育してもそのモチベーションは高まりません。職員の定着率やモチベーションを高め、福祉専門職の社会的地位を高めるためには、高い社会性の実践が出来る組織風土も必要なのです。

目の前の利用者への具体的支援が、どのような社会貢献に繋がっているのか、この仕事が如何に社会的使命や責任を全うできる素晴らしい仕事であるのか、そのビジョンを示すことなくして福祉専門職の育成は出来ないと自身は考えます。「教育とは理想を語ることである・・・」。私の周囲にいる古参者の教えです。

※1 厚生労働省「介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」

※2 朝川哲一氏『改訂福祉職員研修テキスト 指導者編』全国社会福祉協議会 P.98 2009年1月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

二度目の韓国訪問①

2011/11/09 12:00:00 [社会福祉](#)



初めて韓国に訪問したのは1990年であったと記憶しています。1988年にソウルオリンピックが開催され、その好景気がやや後退した頃に訪問したことを今でもよく覚えています。早いものです。もう、20年の歳月が流れたのですね。私にとっては、まだ新しい記憶

の感があるのですが....。

この度は、日本人間関係学会が主催する「韓国 福祉・医療事情視察」に参加させて頂きました。全日程は、9月5日～11日まで計6泊7日の旅です。因みに私は、10日の午後から東京で会議が有りました故、10日の午前中一人で引き揚げて羽田に降り立ちました。よって、私だけが5泊6日の視察となりました。「初めての訪中」同様に、今回も複数回に渡って以下思うところを叙述したいと思います。これまた訪中の際と同様、本報告は、韓国の内在的理論を理解していない若輩が、わずか数日間における体感を述べるに過ぎないことを強く付言しておきます。

9月5日の初日は、ソウル駅周辺のバリアフリーの状況等を視察しました。非常に有能な現地ガイドが、韓国の社会・文化について詳しく説明してくださいましたので、短時間で色んなことが意図して見えるようになりました。

ソウル駅に着いたのは現地時間の15時前後でした。駅の周辺には50代後半から60代のホームレスの方々が沢山おられました。若い人が多いと、参加者からは声が上がっていましたが、日本のホームレスの平均年齢を鑑みれば同じぐらいではないかと思って歩いていました。ただし、彼らは皆、日本のホームレスよりも胸を張って歩いている様には伺えますので、その分若く見えたのかも知れません。私たちが視察をさせて頂いている間、何度か幾人かの方が、私たちに所謂「物乞い」をされました。有能な現地ガイドが、お金を当たり前のように渡されたのが心証的でした。これらは日本では見られない光景ではないでしょうか。日本よりも寄付文化が発達している韓国では、「物乞い」に応じる民衆を多く見かけました。このように応じてくれる民衆がいるからこそ、韓国のホームレスは「物乞い」をされるのでしょう。日本の場合は、最近特に応じる民衆がいなくなったように見受けられます。その帰結として、日本のホームレスは「物乞い」をされなくなったのかも知れません。日本のホームレスは、民衆を当てにすることを諦めているのかも知れません。この人たちは何も助けてはくれないと。

最近読んだ暉峻淑子氏の著書から、次の行が頭を過りました。「私はイラクの救援活動をしたときに、エジプト人の通訳を頼みました。エジプト人は一人あたりの所得がかなり低く、経済的にはとても貧しい国です。いっしょにイラクに行ってもらったのですが、イラクでは死にかけている子どもを抱えている人達や、飢えたりケガをした悲惨な人々にぶつかりました。エジプト人の通訳は私に、エジプトのカイロからイラクまでの往復の航空運賃、ホテル代を除き、通訳料として『一日六〇〇〇円欲しい』と言うのです。普通、通訳料はもっと高いです。

ところが、そのエジプト人の通訳は貧しい人達に会うと、その六〇〇〇円の通訳料をポ

ケットから出して、惜しげもなくその人たちに渡すのです。そのとき、私のほかにも日本人の学者が二人行ったのですが、私達は、いざという時のために何万円か持っていました。ところが私達は、その通訳の取ったような行動を、まず反射的にとることができないのです。聞いてみると、その通訳の生家も金持ちではないようです。それで私は、『どうしてそんなことするんですか。あなたはカイロに帰って、何か必要なことがあるからこの仕事（通訳）をしてお金を稼いでいるんでしょう』と尋ねると、『喜捨する（喜んで捨てる）ことが、私の喜びだ』と言うのです。確かに、日本人はいつも収支を計算して、損がないように堅実にやっています。私はエジプト人のその姿を見て、私達のそういう考え方が何かすごく貧しく思われました」※。続いて、暉峻氏は以下の様に説明します。「人のことを慮るということは豊かさのひとつです。豊かな気持ちというのは、やはり人のことが思えるということです。貧しいということは、自分のことしか考えられないということです」※。

韓国の寄付文化は、日本よりも醸成されているようです。サムスン電子等の大企業は、挙って売り上げを寄付するのだとか。トヨタ自動車のリコール問題で、韓国でもレクサスが大打撃を受けた年に、現代自動車は売り上げを大きく伸ばしたといいます。しかし、その利益幅の殆どを寄付金に充てたと現地ガイドはおっしゃられていました。それが事実とすれば、これは、日本企業にも是非見習っていただきたい営みと言えます。

先月訪れた中国に比べ、街は比較的綺麗でした。道路や公共機関の室内の床・壁・天井すべてに渡って汚れが目立たず清潔に保たれた印象です。公衆トイレなどは、比較にならない程綺麗な場所が多かったと認識しています。しかしながら、例えば、清潔に保たれた歩道の端にある溝内などは、タバコの吸い殻が積み上げられ綺麗であるとはとても言えない状況にありました。トイレにしても、日本に比べて、行き届いているとは言えない状況です。

黄砂の影響があるとはいえ中国の車は、外観及び内装ともに汚れが目立ちましたが、韓国の車はその点綺麗に磨かれていました。日本程ではありませんが、それほど差異を感じないレベルと言えます。日本人が、トイレや車も綺麗に磨きすぎているとも言えますが....。

ご多分に漏れずソウル駅構内も清掃が行き届き、多くの人で賑わっていました。夜になるとホームレスの方々が構内に入って休まれるそうです。トイレ等の水を使って体を毎日清拭されているホームレスの方もいらっしゃるとか。日本の場合、間違いなくホームレスの方々は夜間構外へ締め出されることでしょう。韓国では今のところそうではないらしい。但し、韓国においても昨今は、そのような対応に対する賛否は丁度半々になっていると現地ガイドはおっしゃられています。しかし、半分であっても、韓国においてはホームレス

の方々に対する“寛容さ”があるようです。日本においても10年ほど前まではそのような考えが残っていたのですが、現在は皆無となっています。私の記憶によれば東京都知事が、新宿区のホームレスを強制退去させてしまった辺りから、国民意識の変遷と同時に、ホームレス支援の力が衰退し始めたと認識しております。日本の民度よりも、この点、韓国の民度の方が高そうだと、ソウル駅構内を歩きながら考えました。

そうそう、バリアフリーの状況を視察に来たのでした。いつも与えられたテーマから外れたことに目が行ってしまう性格です。ご宥恕ください。

階段の横に、階段傾斜に沿ったスロープがありました。これは中国でもよく見かけた設えです。無いよりはあった方が良いと思いますが、これを利用して重たいキャリーバックを転がすと場合によっては怪我をします。一度中国で試してみたのですが、大男の私ですら転がり落ちる荷物を制御するのがやっとでした。日本の建築基準法上ではまず認められない造りだと、同行していた建築会社の役員はおっしゃられていました。それでいて、階段の傾斜は普遍的に日本のそれより急勾配です。地下道への階段も大変急で目視でその違いが認識できるほどです。

その他特筆すべきは、注意喚起や標識が多様で、分かりやすいことではないでしょうか。人を表わす標識も子どもや妊婦、高齢者などが一目でわかる標識となっています。駐車禁止区域の標識も、車がレッカー車で運ばれる絵が描かれていました。若者のファッションも日本の若者と大差なく、ファッションやデザインはアジア諸国の中でも洗練されている心証です。

ソウル駅の周辺に拘わらず、韓国の市街地では、ガムやチョコレートといった小さなお菓子を売って歩かれている女性と男性が沢山いらっしゃいました。私たちにも売りに来られたのですが、どうしてよいかわからず対応はしませんでした。後々、夜の街等でもこのような場面に何度も遭遇しました。例えば、夜お店で食事をしていると、店内まで入ってきてガムを売りに来られた女性もいました。営業権等の考え方が浸透している日本では中々考えられない光景ではないでしょうか。

バスの車中から、高級百貨店を多く見かけることができました。例えば、日本の三越百貨店の跡地に、サムソン電子が経営している百貨店があります。外観からしか伺えなかったのですが、日本のものと比べて遜色ない煌びやかさを感じました。実は、韓国においても生活格差の拡大が顕著らしい。高級住宅街では、高級車が行きかっていますし、駐車場にも殆ど全て高級車が並んでいました。その地域のレストランで食事をしたのですが、楽器の演奏や舞踊を生で見ながら食事をとることが出来るお店です。車は全て新車で高級車

ばかり、さらにどれも綺麗に磨かれたものばかりです。高級住宅街の中には、住民の寄付等の支援を受けながらハード・ソフトともに高品質な体制が整った学校があります。そのような恵まれた環境にある子どもと、そうでない子どもとの間で、生活格差の世代間連鎖が巻き起こっている様です。

韓国では一日に約 45 名の方が自殺していると現地ガイドの説明。説明を聞いて自身も、そして、参加者一同驚きの反応を示していましたが、冷静に電卓を弾いて計算すれば、人口比で考えれば日本と然程変わらないか、少し多い程度であることが理解されました。日本や韓国のように効率優先の社会はストレスを醸成するのではないのでしょうか？

そう言えば、韓国人は歩くのが速い。何かに急ぎながら忙しく生活している感じを受けました。日本の大阪と少し似ているところがあるようです。中国においても、自己主張がはっきりしている点が大阪に類似していると思いましたし、以前インドネシアに伺った際も、車の運転が大阪と酷似していたのを思い出しました。大阪のせっかちは、アジアーかも知れませんね。しかし、性急な社会はストレスを増殖するので注意が必要です。次回の大阪市長選では、一福祉専門職として、冷静なる投票を要請したいと思っている昨今です。

※暉峻淑子氏『豊かさへもう一つの道』かもがわ出版 P.45-46 2009 年 4 月

ソウル駅外観



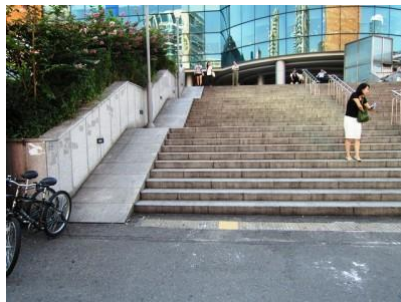
時間帯にもよるのでしょうか。思ったよりも人は疎らでした。

ソウル駅外観



ミニ東京駅のような建物が...

階段の傾斜に沿うようなスロープ



中国でも、同様の設えを見かけました。重たいキャリーバックを抱えて昇降するよりは楽なのですが、傾斜が急で、荷物のコントロールが難しいといったところでしょうか。

ソウル駅構内



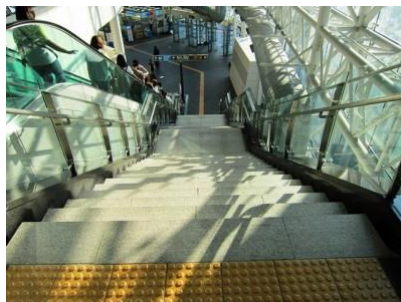
ホームレスの方々は夜間も構内で休むことが出来るのだとか。トイレ洗面台のお水等で、清拭されているそうです。日本とは、違いますね。

ソウル駅構内のエスカレーター



注意喚起がわかりやすい設えです。表示物の掲示角度や、位置の高さ等配慮がなされていました。

ソウル駅構内の階段



階段の勾配は、日本よりも急ですね。

ソウル駅構内のエレベーター



標識の種類が豊富で、わかりやすいと思いました。

ソウル駅周辺の道路標識



駐車禁止！よく分かりますよね。

側溝には煙草の吸殻が...



路面は日本と変わらぬぐらい綺麗でしたが...

小姑のようなブログですね。いけません。

三越百貨店の跡地にサムソン電子のデパート



煌びやかな建物は珍しくはありませんね。

いわゆる「高級住宅街」にある「高級料理店」で食事



この度最高級の食事を一番最初に頂きました。経済格差を噛みしめながらの食事でした。

「ちじみ」です。



見た目もお上品。お味もお上品でしたね。

多くの車は綺麗に磨かれていました。



各ドアに緩衝用の「スポンジ」が貼付されていますね。これは車を大切にしている証拠だと思ってシャッターを押させていただきました。

[この記事にコメントする](#)

[コメント\(0\)](#)

他者への想像力を喪失した社会

2011/10/31 12:00:00

[社会全般](#)



2011年10月26日～30日まで、宮城県石巻市にある地域包括支援センターの活動支援に伺わせて頂きました。3月11日から8カ月が経とうとする時期。遅すぎる訪問でした。宮城県には認知症介護研究・研修仙台センターがあり、認知症介護指導者として大変お世話になっている方々の多い地域です。その他平素よりお世話になっている方々が暮らしています。一刻も早くお伺いしなければならなかったのですが、若輩の段取り不足から今日に至りました。

この度は、仮設住宅にお住まいの方々への戸別訪問とそのコミュニティの調査に携わらせて頂きました。「活動支援」と表現するには烏滸がましいばかりか、却って、現地の職員さんの手を煩わせてしまったのではないかと恐縮しているところです。それでも、現地の職員さんが根気強くお付き合いくださったのは、この教訓を他の地域でも生かしてもらいたいとの思いからではないかと推察しています。自らが被災し、それでも、他の地域を慮る姿勢に敬意を表したいと思います。

他者の思いを察して知ること。人の痛みを想像し、共感しようとする姿勢。今市井にはこの大切な営みが減退しているのではないかと再認識した5日間でした。他人の気持ちは、100%を理解することなど不可能です。しかしながら、私たち人間には想像する力や疑似体験をする力が備わっているわけですから、その力を用いて、他者の気持ちの60%や70%を理解していくことが可能です。これは、その力を用いて知ろうとしなければ、いつまでた

っても理解することはできませんし、強い気持ちで知ろうと思ったところで100%には至らない代物でしょう。ここで私が強く感じていることは、現下の社会では、この「知ろうとしない」人々が多くなっているのではないかと言うことです。

いくつか例を挙げて、振り返り考えてみたいと思います。写真にあるように、街中には「がんばろう！」「がんばれ！」なる看板や垂れ幕が到る所に掲げられていました。8ヶ月が経とうとしているにも拘らずその被災状況は想像を絶する状況にありました。惨憺たるありさまとは、まさにこのことを言うのでしょうか。そこに来て、「がんばろう！」なるメッセージの発信は、受け手の想像力を欠いたものではなかろうかと感じて掲示物を眺めていました。メッセージと言うのは、受け手の状況やその捉え方にまで想像力を巡らせて発しなければ、受け手には届きません。つまり、そのメッセージは不毛となるばかりではなく、時に受け手を傷つけることもあるのでしょうか。

同じ被災地においても、災害に対する受け止め方は様々だと認識しました。前を向いて歩こうとされている方、家族を失い未だ「自分だけが生きていて良いものだろうか」と苛まれていらっしゃる方。傍で受け止め支えてくれる他者がいるか否かによって、その状況は大きく変わって来るであろうことは用意に察しがつきます。また、それは、被災時の喪失体験とも密接な関係性があるようにも感じました。築数百年の大切な家が目の前で津波に流されていくことを目視した方。押し寄せる波から命しながら逃げ延びた体験を持つ方。津波は全く目にしておらず、地震のみを体験された方。それぞれの、被災体験によってもその捉え方が随分異なると感じました。しかし、そのような多様な経験と思いを持つ方々がいらっしゃることを私たちはしっかりと共通理解しておく必要があるでしょう。「被災者」は、一言で語れるものではありません。そこには、ひとり一人の異なる体験と思いがあることを知る必要があります。

生活課題を持っている方々にとっては、仮設住宅は住居の体を成してはいません。両股関節人工骨頭置換の高齢者にとってみれば、足が思うように上がらないことで、浴槽の出入りが出来ない状況にありました。浴室に十分な空間が無いことと、浴槽が深いこと、手すりの位置が無造作であることが原因でした。動作が緩慢である高齢者にとってみれば、玄関の出入りに時間がかかり、結果として、風除室が無いことで風雨の吹き曝しを被ることにもなります。仮設住宅内における全ての通路がアスファルト舗装されている訳ではなく、砂利を敷いただけの設えの所もあり、その際地表の形状は凹凸が顕著で歩行不安定な住民にとっては転倒のリスクが高まります。外灯が整備されている箇所と、非整備の箇所があり、日没時間の早い東北では、夕方以降転倒のリスクが高まるであろう箇所も存在しました。ここにも、提供者と、使用者の二つの視点に乖離があることが伺えます。とにかく、増設して増やせばよいと設置した側と、実際にそこで生活をしている側との思いの乖

離が認知できます。これも、立場や視点が変われば物の見え方が変わる代表例かも知れません。本件に関しては、当初は各自が 30, 000 円程度の自己負担を行って、風除室の設置と改修を行っていました。現在では、今後の寒さ対策から、風除室を自治体負担にて設置することが決まっています。その際に、すでに改修した箇所も全て撤去し、画一的に再改修するのだそうです。既設を行った住民にとってみれば、自身の生活にあった設え、例えば便利な棚の設置等、が撤去され画一的なものが取り付けられることに不満を持たれている方もいらっしゃいました。提供者と使用者の乖離がここにも垣間見られます。

本日地元のあるブロック紙を手に取りました。紙面の内容は、中国地方のブロック紙である中国新聞とは随分様相を異にしています。やはり、原発や震災関連の記事が色濃く打ち出されていました。ここにも、被災当事者と被災非経験者の立場や視点の乖離が見受けられます。

他者の思いや痛みを察して知る力を、もう少し私たちは培っていかなければなりません。そう言う自身も、当事者に対する聞き取りの際、経験していない被災状況に対する想像力が足りないと反省しました。もっと、想像力が高ければ、もっと共感して話をお伺いすることが出来たのではないかと自問自答を繰り返しました。

その他活動全体を通して感じたことは、復興の遅さにあります。そして、その遅さの原因は、総体的なビジョンを示し切れていない政府、そして、埒の明かない政府の政策決定をいつまでも待っている地方自治体のビジョン提示力の弱さにあると感じましたし、数名の住民もそのように語られていました。

その人の環境におけるストレングスの視点で鑑みれば、やはり、地域性を担保した状況での移住が総体的には正の機能を起こしていたように思われます。地域性の担保されている仮設住宅と、そうでない住宅とでは、地域住民の互助・共助機能に主観的ではありますが有意差が見受けられました。地域性が担保されていない住宅では、隣に若い男性が住んでいるにも拘らず、高齢のため換気扇の蓋がはまらないまま放置されているケースもありました。私がその蓋をセットしながら、「お隣の方に頼んだりは出来ないのですか？」とお伺いすると、「知らない人ばかりなので、そこまでは出来ません」とお答えになりました。人は皆、環境におけるストレングスを有しています。その強みを度外視した処遇・対応を行うことは、その後、そのことに対する何らかの（おそらくはフォーマルなものによる）支援が必要になることを意味します。現地のフォーマルな社会資源には限界が来ています。何度も同じ場所へ繰り返し訪問することなど不可能な状況です。であれば、ひとり一人の環境のストレングスたる地域性・共同性を担保した対応が強く求められることが再確認されました。

この活動を通して、他者の思いや気持ちに思いを馳せること、そのことの重要性を再認識させて頂きました。若輩を受け入れて下さった地域包括支援センターの職員様、調査にご協力いただきました現地の皆様、そして、寝食を共にさせて頂きました全国の社会福祉士会のお仲間、この手配をして下さった事務局の皆様、最後に、私を自由に送り出して下さった特定非営利活動法人 地域の絆 全職員さんに対し深くお礼を申し上げます。

視点や立場が変われば物の見え方、捉え方が異なることは自明の理です。であればこそ、私たちはそこに異なるもう一つの考えや思いがあることを絶えず認識して生きていく必要があります。特に私たち福祉専門職は、生活課題を抱えていらっしゃる方々の視点で、社会を捉え、その変革へのアプローチを行う職種です。そのことに対する想像力の欠ける人はこの仕事は向いていないと自身は認識します。

如上の地元ブロック紙を読んでいると、以下の文面に目が留まりました。

「とりわけ、障害のある人たちは環境の変化が苦手だ。不自由な暮らしの中でさまざまな困難に遭い、つらい思いをしているに違いない▼再生に向かう地域社会は、障害のある人にも生きやすいものにしなければならない。彼、彼女たちのアート（「障害者アート」）が見せてくれる多様な世界観を尊重できる私たちでありたい」※括弧内は中島が挿入。

如上のお話が理解できる読者であれば、何も説明の必要はないでしょう。当事者の思いに対する想像力、それこそが私たち福祉専門職の生命線です。では、ジャーナリズムの生命線はどこにあるのでしょうか。

お世話になった石巻市渡波地域包括支援センター外観



職員さんの前向きさと、ご熱心さに感服致しました。センター長は、私と同級生で、地域福祉に対する思いのとってもお熱い方でした。イケメンです！

同じセンターを担当させていただいたお仲間



ペアのお仲間 静岡県社会福祉士会の小出拓治さん



息の合うお仲間で、とってもやり易かったです。感謝・感謝。

私は頭がボッサボッサ。ちなみに早朝です。

3つの地域包括支援センターにて2人1組で活動



宿泊施設をお借りして、皆さんで寝食を共にさせていただきました。全国から様々な立場の方が集まり、大変勉強になりました。

これは、朝の食事風景ですね。

深夜にまで及ぶ勉強会



こちらは、夜の勉強会。

机の上にあるのは・・・、全て教材ですね。

元小学校の校舎で宿泊



今は、社会福祉法人ふれあいの里 ラボラーレ登米という障害者の支援施設になっております。長い期間、大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。

牡鹿半島の一集落



初日に被害状況を見て回り、想像力を高めました。

言葉にならない状況



それでも、想像力を駆り立てました。少しでも、ちょっとでも、皆様の思いに近づけるように...

そのような気持ちで訪問させて頂きました。



[この記事にコメントする](#)

[コメント\(1\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 22 / 57

facebook 始めました

2011/10/25 12:00:00

[日常](#)



<http://www.facebook.com/yasuharu.nakasima>

まだよく使い方が分かっていませんが、お友達を募集しております。ご応募お願い致します。

[この記事にコメントする](#)

[コメント\(0\)](#)

論理的に破綻している自己責任論

2011/10/24 12:00:00

[社会全般](#)



「自己責任論」について社会で最も脚光を浴びせたのは、小泉純一郎元首相でしょう。アメリカがこれも論理的に破綻した戦争を仕掛けた帰結として、国際社会への貢献度の高い日本人数人がテロ活動に巻き込まれた際、元首相が発せられたのがそれでした。

当時から思っていたのですが、敢えて強く今以下のように認識しています。「自己責任論」は論理的に成立するのか？

若者が仕事に就けないこと、耐震力の低いマンションに住んでいること、多重多額債務に陥っていること、福島的第一原発の周辺に住んでいたこと、東日本大震災の被災地に住んでいたこと、ホームレス状態におかれていること、これらは全て個人の責任で解決しなければならない問題なのではないでしょうか。

では自己責任論を全うして生きている人は、世の中に存在するのでしょうか。元首相は自己責任論の体現者なのではないでしょうか。誰が考えても分かるはずです。無人島で一人生活をしていらっしゃる方を除いて、誰ひとりとしてその体現者は存在しません。無人島のお一人暮らしでさえ、実は様々な文明の力を用いていることが多くこれも厳密に言えば自己責任論の体現者とは言えないようです。

問題は大きく二つあります。一つは、論理的に破綻している言葉がよく用いられていること、二つ目に、それを政府の側がよく口にされることです。国や、民族、地域と言った社会の中で生きている以上、自己責任論は何処にも存在しません。その言葉が多用されていること自体、残念ながら我が国の民度の低さを国際社会に示すことになりやしないかと危惧しております。政府がこの言葉を用いることは、政府自身はその「自己責任」を放棄しているという意味においても、二重の論理的破綻を招いています。

資本主義社会の力学的必然として、社会から排他・排斥される方々が次々と生み出されます。その方々を、しっかりと公的に支援をしていくことで、社会のある種“公平性”が担保されるのだと私は理解しております。人間には得手不得手がありますし、その能力や特性を生かせることは社会構造や時勢と強い因果関係があります。その意味において、時代に応じてその波に乗れた人は勝ち組になりますが、その波にのまれた人は負け組となるのです。

運動会の競走等で、皆一緒に同着するといったことをやっている学校が多く存在しましたが、これは平等の発想からは逸脱していると私は考えています。人の能力を測る物差しは、何千・何万通りもあって得手不得手があって良いのだと思っていますし、むしろ、それぞれの能力が発揮できる社会を構築するべきであるとも考えます。

しかし、経済至上主義社会においては、時勢の中心的な偏った能力が求められており、その能力を有したものが“勝つ”社会であると言えます。逆にその能力を備えていない人間は“敗者”となる様です。その時々为中心的な能力を備えている者が“勝ち”、その能力を備えていない者が“負ける”のです。

その様な本社会において、“平等性”や“公平性”を担保するために必要な発想が、累進課税であり、社会保障なのでしょう。つまり、“勝った”側は時代の趨勢に乗って利益を得たのだから、その時代の構成員たる“負けた”側に対して、何らかの負担をする必要があるのだと。大手企業の役員等がその人個人の能力だけで、それだけの収入を得ているとは考え難いと私は思います。それを支える社会や、構成員の存在があって初めて高額所得者となっているはずで。であれば、そこに対して還元することは普遍的なことであると私は認識します。

つまり、政治はその再分配を適切に行う機関であり、“負けた”側に手を差し伸べる機能を担わなければならないはずです。そのことが機能して初めて、この社会は“平等”であると言えるのかも知れません。その機関の筆頭が、自己責任論を唱えることはやはり、おかしいと言わざるを得ません。自己責任という言葉自体が論理的に破綻していると私は思いますが、百歩譲ってそれを度外視して考えても、自己責任で“負けた”方々を救済するのが政治であるはずで。それをしない政治は、そもそもその「自己責任」を果たしていないことになります。

斯くの如き「自己責任論」なる言葉は、今後更に注意を重ねて使わぬようにしようと考えている昨今です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(2\)](#)

季節外れの「先輩から新入生へのメッセージ」

2011/10/20 12:00:00 [社会全般](#)

2年前に母校の新入生に寄せた文書です。



「おめでとうございます」。入学の際によくいいますよね。でも、一体「何がめでたいのだろう?」。「新年明けましておめでとうございます」。これもよく聞きますが、めでたい意味が私にはよく分かりません。私はこんなことをよく考えていた学生でした。いわゆる「変

わり者」です。そして、私は「変わり者」であることに誇りを感じていた学生でした。

それが、今現在の私の実践（仕事）における重要な要素となっていることについて、新入生であられる皆様方にお伝えしたいと思います。その視点こそが、これからの大学生活で気づいて頂きたい要諦であると考えているからです。私は「先輩」面出来るほど、「できた」人間ではありません。「正しいこと」を話すつもりもありません。ある一つの考え方として、自分の意見を述べているに過ぎません。それを聞いてどのように捉えるかは、みなさん次第です。

大学を卒業すると私は、高齢者デイサービスセンターの生活相談員の仕事に就きました。今地域では、高齢者のお一人暮らし、高齢者の夫婦のみの世帯が急増しています。高齢者を地域の中で支えるためには、専門職以外の地域住民の高齢者に対する理解や協力が不可欠です。皆さんの地域はどうでしょうか？地域住民同士がお互いのことをよく知り合い、助け合って生活されていますか？私の知っている地域は、地域住民同士、互いに関心もなければ、助け合いも全くない所ばかりでした。

このままではいけない。福祉専門職が、高齢者が安心して暮らせるまちづくりに関与していかなければならないと思い、福祉専門職として「高齢者のケア」と「まちづくり」の双方に取り組みました。独立に至るまでの間、何度か職場を変ったものの、私の実践は組織の中で認めてもらえませんでした。組織の中で足掻いてみることで、少しは自分の理想とする実践が出来はしましたが、自身にとっては、誠に不満足でした。

私が冒頭に述べた「変わり者」であることと、今の実践の成果には、実は大きな関連があると思っています。「変人」の対義語は、「普通の人」となるかと思われませんが、「普通」って一体なんでしょう？大学生活において私は多くの本に出会いました。それも、全てノンフィクションの論文や、ルポルタージュばかりで、小説は一冊も読んでいません。「事実は小説よりも奇なり」という言葉がありますが、私は今ここにある現実に興味がありました。自分が、友人が、知人が抱えるあらゆる悩みや課題を克服する方法を知りたかったのです。ですから、おとぎ話の世界ではなく、現実問題をテーマに取り上げた本を好んで読みました。

100 人いれば 100 通りの「普通」がある。その時に気づかされました。普通、なんてこの世に存在しないことを。であるにもかかわらず、なぜ、皆は「普通」であろうとするのか。「普通」であることに安心感を覚えるのか。「実に面白い」と思いませんか。

そして、「普通」とは、誰にとっての普通かも学びました。障害者にとっての「普通」で

は断じてなく、健常者にとっての「普通」です。それは、在日外国人の「普通」でしょうか？そうではなく、日本人の「普通」ですね。認知症高齢者の「普通」でも、子どもの「普通」でもないのです。

つまり、多数派と言われるもしくは、大きな声を出すことのできる、大きな力を持っている人たちにとっての「普通」であって、小さな声、声なき声の少数派の人たちの「普通」では断じてありません。そのことをこの大学で学びました。

だからこそ、「普通」に捕らわれない先駆的な実践が私には出来るのです。「普通」でないことに恐怖心はありませんので、平気で「普通」や「常識」を破ります。いわゆる偏差値教育に飼いなされたエリート諸氏は、記憶をインプットし、アウトプットする能力には長けていますが、独創性には、全く劣っている傾向が見られます。4つある選択肢の内、適切な選択肢を選ぶことは得意です。しかし、私は違います。4つの選択肢全てが適切でないので、答えはありません。もしくは、無ければ、もう1つ5つ目の選択肢を作ってしまうと思います。

大学は、「自分の考えを確立する場」と考えています。他者の考えを参考に、自分はどう考えているのか、自分の声に耳を傾ける勉強です。

それは、高校まで学んできた偽勉強ではなく、真なる勉強です。なぜなら、勉強は全ての人が幸せになるためにするものです。勝ち負けを競い、誰かを蹴落としたり、蹴落とされたりするものでは断じてありません。全ての人が幸せになることは、非常に困難な課題ですが、それを成すために考えるのが勉強であり、学問であると私は考えています。多少の犠牲はやむを得ないのではなく、多少の犠牲も許さない、そんな生き方をするための勉強です。

そのために大切なこと、それは「普通」や「常識」にとらわれず、自身が、自分の考えや、思いに耳を傾けること。そして、自分の考えや思いを人に伝えることだと私は思っています。

「正しいこと」を話すつもりはないと私は言いましたが、「正しいこと」を言わなければならないと思ったとたん、何も話せなくなりませんか？自分の意見を何重ものフィルターを通して、発することで、何の変哲もない「普通」の言葉になってしまいませんか？正しいか、間違っているかを一体誰が決めるのでしょうか？そうやって、皆自分の考えや思いを殺して生きています。それは、社会にとっての損失ではないでしょうか？

「普通」や「常識」から思いっきりはみ出して、自分の言葉で書きましょう、話しましょう。そして、その言葉に責任を持ちましょう。この実践こそが、真に強靱なる社会人へと皆様を誘います。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『まちづくりとしての小規模多機能ケア』

2011/09/30 12:00:00 [地域密着型サービス](#)

『小規模多機能ケアの可能性』



今まで連載してきた『まちづくりとしての小規模多機能ケア』ですが、この度はその総括のお話をさせていただきます。

地域密着型サービスの運営目的を一言で言い表せば、それは地域ケアの実践となるかと思えます。2012年の介護保険制度改正を意識すれば、それを地域包括ケアと言い換えても良いかも知れません。地域包括ケアは一般に、「地域住民が住み慣れた地域で安心して尊厳あるその人らしい生活を継続することができるように、介護保険制度による公的サービスのみならず、その他のフォーマルやインフォーマルな多様な社会資源を本人が活用できるように、包括的および継続的に支援すること」※1と定義されているものであり、利用者の生活支援を専門職のみで行う視点ではなく、地域の企業・商店・住民をも巻き込んだ形で展開されていくべきものであると明示されています。そのことを通じて、地域住民の理解や協力を促進し、その意識の変革をも試みる実践です。

生活支援における「生活」は本来非常に幅広いものであり、福祉や介護の専門職だけでは到底守れるものではありません。そのことの限界をしっかりと認識した上で、他分野における専門職及び地域住民との連携をもって利用者の支援を行う視点が今まさに求められているのでしょう。

連載中お示しさせていただきました様に小規模多機能型居宅介護（以下「小規模」）のケアマ

ネジメントには、見守りや軽微な家事支援等を地域住民に依頼することで、利用者の生活の質向上と事業所運営の安定化を図る事が出来る素地があります。地域の絆においても、独居世帯・高齢者のみの夫婦世帯・多くの問題を抱えた世帯に属される利用者の支援に際しては、なるべく多くの地域住民の協力を要請した上で行うことにしています。

また、地域ケアの視点で事業所の運営を鑑みれば、「徘徊」時見守りや、災害時の協力等を住民から得る事ができ、事業所運営の安定化にもそれが寄与することに繋がります。私たちの事業所では、お一人で外出された利用者を事業所までお連れ下さる住民や、職員に知らせに来て下さる住民は決して珍しくはありません。

かてて加えて、地域ケアは対象者を限定しない共生ケアの視点も有しており、高齢者に限定しない支援機能を保持することによって、地域の多様なニーズに可能な範囲で対応できる様になり、やがてそれが地域住民との信頼関係の構築へと繋がっていくことでしょう。地域の絆各事業所においても、不登校・発達障害・触法といった課題を抱えている児童の受け入れや、障害を持たれた方の就労訓練の場として、「小規模」が地域に機能している姿を報告させて頂きました。

如上の体験的学習を通じて地域住民に意識の変革を促進する可能性も地域ケアは秘めており、地域ケアの実践を突き詰めるとそこには、誰もが自分らしく安心して暮らせるまちづくりに行き着くことも理解されます。利用者の日常生活圏域内で、その居宅での生活に対し、「通い」「訪問」「宿泊」「ケアマネジメント」の機能を臨機応変に組み合わせて支援を行う「小規模」には、この地域ケア実践の素地があると確信しております。

地域の絆の実践の中で、その推進力となる姿勢は、「とにかくやってみる」というものでした。地域の要援護者を地域住民の協力のもと支え合っていく実践は、口で言うほど簡単なことではありません。そのためには、日々の地域住民との交流が欠かせません。悩むべきは、何を手掛かりに交流すれば良いのかにあるのではないのでしょうか。よく地域住民のニーズに応じた実践が取り沙汰されますが、そんなものは端から知る由もありません。ましてや、コミュニティアセスメントという実践的概念が確立されている様子もないのです。その中であって、一人の住民のニーズからでもいい、まずは暫定的にニーズを捉えて、とにかくやってみるという姿勢が欠かせないのではないのでしょうか。

地域の絆では、事業所ごとに年3回のイベントの運営を行っていますが、活動する中で、①住民同士の交流が出来ていない、②世代間の交流が出来ていない、③子どもの育成に必要な地域活動がない、といった形で捉えるニーズが変遷しております。対人援助におけるニーズも同様、大切なのは初期のアセスメントではなく、実践の中での関わりとしてのモ

ニタリングや再アセスメントにあるのではないのでしょうか。ニーズは常に流動的で可変的なものなのですから。

であればこそ、捉える事の出来ないニーズの把握に紆余曲折する前に、地域に実践を「投げかけていく」ことから始めるべきでしょう。できない理由を考えて何もしないのではなく、気軽な気持ちで仕掛けてみるのが地域交流の第一歩なのだと私たちは理解しております。

それが、連載でもご紹介したペットボトルのキャップ回収であったり、子どもを対象にした書道・茶道等の教室、子ども会の会議場としての事業所の提供、広報誌作成における住民の参画等の実践に該当します。何でも結構です。地域に投げかけて、その反応を見ながら次に投げるものやタイミングを計りながら、また次を投げかける。その様な実践が求められているのではないのでしょうか。

もちろん志なく、無造作に投げかけてもそれは決して響くものではないでしょう。私たちがどのような姿勢や思いで地域住民と向き合っているのか。そのことは絶えず問いかけられていることでしょう。「小規模」には素晴らしい「素地」があることを2年6か月の連載を通じてお伝えしてきたつもりです。しかしながら、その「素地」を生かすも殺すもそれは、私たち実践者の姿勢や取り組みに依るものと言えます。

※1 財団法人 長寿社会開発センター『地域包括支援センター業務マニュアル』P.9 2010年3月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

日常的な努力と準備が開花する秋(とき)

2011/09/18 12:00:00 [社会全般](#)



物事の顛末には、必ず因果関係があるとの認識を永らく持って生きてきました。つまり、

成功や失敗の背景には必ずその要因・原因があると。偶然に成功したり、失敗することは原則的にはあり得ないとの考えを重要視していますので、例えば見えない世界のオカルト的なお話には全く興味がありません。特に、失敗を体験した際はその要因分析を非常に大切にしています。地域の絆の苦情処理票（当法人内では「さわやか処理票」と呼んでいます）や、インシデントレポートの全てに目を通してはその要因分析を行う毎日です。そこに地域の絆の弱点や盲点、課題が見えてきますので、そこを修正することでこそ、法人の成長が図られるのです。いや、それを真摯に受け止め対応策を講じることでしか、法人の発展はあり得ないとさえ考えます。まさに、「失敗は成功の母」であり、「ピンチはチャンス」であるのです。

日清食品と言う会社は、親戚が勤めているということもあって、個人的には身近に感じている会社です。今日の新聞では、世界初のカップラーメンが発売されて 40 年が経つ旨が書かれていました。そこには以下の様に、日清食品の創業者故安藤百福氏の仕事に対する姿勢が描かれています。

「丼と箸で食べるという常識をどう覆すか。寝ている間も枕元に紙と赤鉛筆を置き、ひらめきを書き留めた。『一心不乱に考える』が発明の原点だったという。即席という言葉の裏の、壮絶な努力と試行錯誤の積み重ねを思う ▲敗戦後の冬空の下、湯気が上がるラーメン屋台にできた人ばかり。人々の満たされた笑顔に胸打たれ、安藤氏の挑戦は始まった。『いつ眠るのか不思議だった』。実験小屋での父を息子の宏基氏は振り返る」※1。

いみじくも今日の中国新聞。日本銀行広島支店長の米谷達哉氏のコメントに次のような件があります。

「科学における偉大な発見や発明も、ダイナマイト、ペニシリン、エックス線など最初のきっかけは、ちょっとした偶然から始まっているものが多いという。

こうした『偶然に幸運な予想外の発見をする才能』をセレンディピティー (serendipity) というが、それは決して単純な偶然ではない。『幸運は常に用意された人にもみ訪れる』とはフランスの細菌学者パスツールの言葉である。つまり、1 回しかない偶然の中に普遍的な意味を読み取るためには、読み取る側の意識の中にそのための準備ができていなくてはならないのである。(中略) 偶然訪れた機会をチャンスとして捉え、ものにしてやろうという鋭い観察力と強い目的意識があったからこそと考えられる」※2。

「一心不乱に」日常的な努力と準備を貫徹した安藤氏の発明を、偶然の産物から生まれたと考える人とは私は馬が合いそうにありません。「日常的な努力と準備」と抽象的な表現で書きましたが、それは自身の夢や希望、目的を達成するために毎日熟慮することではな

いかと若輩浅学ながら考えているところです。より深く、深く掘り下げて物事を考え抜くこと、苦悩から逃れることなくそれと真摯に向き合って悩み抜くことにこそ、そのヒントが隠されているような気がしています。

福島原発事故において、除染作業が遅々と進みません。除染における費用の総額は、数十兆円から百兆円は下らないと一部メディアからは報じられています。森林や河川を一体どのように除染すればよいのか、課題は山積している様です。この失敗は、偶然の帰結でありますまい。ましてや、偶然で片づけられる状況でも断じてありません。

失敗の因果関係を深く掘り下げて考え抜き、批難から逃れることなく、その声に真摯に向き合い悩み抜く姿勢が求められています。でなければ、いつかはやって来るであろう「偶然に幸福な予想外の発見」の機を私たちは逸してしまうことになります。

※1 「天風録」『中国新聞』2011年9月18日

※2 米谷達哉氏「今を読む」『中国新聞』2011年9月18日

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 23 / 57

9・11 から 10 年

2011/09/11 12:00:00 [社会全般](#)



10 年毎に区切りをつける発想は、十進法を選定しているからに過ぎない。よって、十進法を選定していない民族にとってみれば、10 年とは然程大した意味を成さない。あるジャ

ーナリストが確かその様な事をおっしゃっていました。それを今思い起こすと言うことは、その発想に自身も賛意を持っていることになります。しかしながら、マスコミが数多取り上げている「9・11 から 10 年」の今についてここでは少し触れておきたいと思います。

私が最も着目するのは、ブッシュ氏の言う「正義の戦争」の「正義」にあります。「正義」とは一体何でしょうか？「普通」や「常識」においても同様のことが言えますが、それは「誰にとっての」ものなのかによって、その内実が大きく変化するの自明の理でしょう。ブッシュ氏にとっては正義であっても、アメリカのある市民にとってはそうでは無いかも知れませんが、私たち日本国民にとっての正義も異なっていたはずで、中東の国々にとっては、どうであったのでしょうか。この辺りの検証は、この「10 年の節目」にて清算しておく必要があるでしょう。

よく政治家が「国民のために」と言いますが、その際も、“どの層”の“何処に所属している”国民のためであるのかをしっかりと見据える必要があるのではないのでしょうか。どこに負担を求め、どこを優遇しようとしているのか、私たち市民は矯めつ眇めつ見ていかなければなりません。

抽象的で、耳触りの良い言葉に流されることなく、それを具体的に再言語化していくことがジャーナリズムの使命であると認識していますし、延いてはそれは国民の責務であるとも認識しています。

社会福祉の現場においても、「利用者本位」や、「その人らしさの支援」、「権利擁護」、「尊厳の保持」、「自立支援」等の言葉が飛び交っています。クライアントを目の前に、どのような具体的な実践が如上の実践に繋がるのかが理解できなければ、その実践は画餅に帰してしまうことになります。

私たち日本人は、特に、耳触りの良い抽象言語を、具体的な言語へと再定義をする習慣を持たなければなりません。そのようなことを省みながら今「10 年目」を迎えます。

我々人類は バカ

過去・現在・未来 バカ

正義はあったのか バカ

正義は勝ったのか バカ

くり返し くり返し くり返し 歌う ※

※1 「皆殺しのメロディ」 THE BLUE HEARTS 作詞・作曲 甲本 ヒロト氏

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

子どもの姿勢から学ぶこと

2011/09/02 12:00:00 [社会福祉](#)



当法人では、職員さんはお子さんと一緒に出勤することが可能です。専門の託児所があるわけではありません。利用者の生活空間で利用者と職員と共に過ごすのです。なぜ、そのようなことをしているのか？目的は4つあります。

- ①親としての職員さんが、自身の仕事を子どもに見せることができ、子どもと関わりながら仕事出来ることで、子どもに対する教育的効果が見込めかつ安心して働くことができる。
- ②核家族化が進む中、高齢者と接点を持たない子どもが多く、経験を積み上げられた人生の先輩としてのご利用者に接することで、宇宙の摂理や人間関係の多様性を無意識に理解することができる。
- ③子育ての経験及び能力が高いご利用者が多く、ご利用者の居場所と役割が創出できる。
- ④高齢者以外の誰であっても、気軽に立ち寄れる場所であることを地域住民に理解していただくことに繋がる。

要するに、①職員にとって、②子どもにとって、③利用者にとって、④地域住民にとって良いという認識で実践しているわけです。

その子どもたちの対応を聞くに見るに、私たち専門職が忘れていた大切なことに気づかされることが今日ありました。ある職員はいいます。少しだけ咽せた利用者の背中をさするし、少し気になる表情を利用者がされたら「大丈夫ですか？」と気配りを見せる。当た

り前のことを子どもたちはしてくれると。

私たち専門職は、少しだけ咽せた利用者の背中をさするでしょうか？もちろんそのような実践を大切にされている方を私は多く知っています。しかし、そうでない方もいらっしゃるのではないかと振り返って考えました。専門職であるがゆえに、あの程度の咽せは“タッピング”に値しないと、見守るだけであったり、取るに足らないと看過してしまっていることがあるように思われます。利用者の表情が気になっても、いちいち問い掛けなくとも、その思いは分かっていることを前提に、見守るだけの対応に終始していることは無いでしょうか。

私たちの生活は、その行為が必要か必要でないのかをいちいち専門的観点から考えてなど営まれておりますまい。気になるから声をかける。大丈夫だよと、安心感を与えるために体をさする。これらは、生活の中における極自然な営みなのでしょう。

中途半端な専門性を身に着けてしまった私たちは、その至極当たり前の営みを何処かに置いてきてしまっているのではないか。そのようなことを考えさせられた、ある職員さんからの発言でした。

「ビオラ」の皆様によるフォークダンス



盛り上げていただきとっても感謝しております。華やかでとっても可愛い衣装で、会場の雰囲気がとても和やかになりました。

有難うございました。

息のぴったりと合った踊り



おそらく練習を積み重ねておられるのでしょう。とっても息が合っていました。俄仕込みで一緒に踊れるレベルではありません。

ところでここは…。道路??



そうです。空間がなくとも地域交流は出来るのです！！



よく、コミュニティスペース（空間）が無いので、地域交流が出来ないとのぼやきを耳にします。確かに、無いよりは断然に有った方が良いと認識しています。ですので、地域の絆各センターには余分な空間を必ず設けているのです。

でも、空間がなければ交流が出来ないのかと言えば、そうではありません。やはり、最後には、そこにいる人々の意識と志が無ければ、交流促進は成されることが無いのでしょ

う。

そういう志ある、地域住民、そして職員に、感謝・感謝の毎日です。

毎年恒例のビンゴゲーム



地域福祉センター仁伍の職員さんが、応援に駆け付けてくれ、司会進行を行いました。

昨年よりも上手な進行です。

来年も皆様是非ご参加ください。よろしくお願い申し上げます。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

子どもの目線で社会を構築する

2011/08/26 12:00:00 [社会福祉](#)



私の職業はソーシャルワーカーであり、ジャーナリストでありたいと思う昨今です。主には、高齢者の社会福祉分野で仕事をしていますが、専門性の共通基盤を用いて、子どもたちの支援へも関わりを持っています。多くの子どもと出逢ったわけではなく、その数は少ないのですが、子どもと触れる中でこの社会の課題が色濃く見えてくることがあります。

その国の政治や社会が上手くいっているかを見るには、子どもや、障害者、高齢者、少数民族といった社会的に弱い立場にある人々の生活が上手くいっているかを見ればよく分かると、著名な社会学者やジャーナリストは言います。競争原理社会では、その時勢によって社会からはじき出された人々の生活は、構造的・意図的に守らなければ守れるものではないからです。それが守られている社会は、その構成員の多くがそのことの重要性を理解しているとも測れます。よって、その国の国民の民度は高いと判断するのでしょうか。

如上の観点はまさに自明の理であり、子どもたちの権利擁護はこの社会の構造に依拠しています。いや、より弱い立場にある子どもたちの生活は、この社会のしわ寄せを一手に引き受けている感も伺えるのです。

開発・発展という名の自然破壊を繰り返し、子どもたちから生のリアリティある自然環境を奪い、代わりにインターネットや電子ゲームといったバーチャルな生を与えそれを商業化する。私が子どもの頃は、川や池、山々に身近な小動物や昆虫が生きていましたし、それを飼って遊んでいました。もちろん、飼育籠の中で何匹も生き物を殺してしまったこともあります。そしてその腐敗した死骸を、近くの畑や公園で土葬をしていたものです。しかしながら、この様な営みの中で生きることや死ぬことを学んできたのだと思われますし、宇宙や自然の摂理も学べたような気がしています。しかし、今の社会は、子どもたちからこの様な重要な局面を奪ってしまっているのではないのでしょうか。

ネットを介して、リアルな経験・体験の無い情報を子どもたちは安易に仕入れることが出来ます。つまり、判断能力のない状況で大人たちの陥穽に嵌る子どももいるでしょうし、リアルな友人ではなくバーチャルな友人を持つ子もあるでしょう。ある程度成熟した大人にとっては便利な“道具”でも、子どもにとってはそれが“凶器”になることもあります。

高齢分野で働きながらこの様な事を述べるのもおかしいと思われるかもしれませんが、子どもの目線で社会を見直す必要性が今強く求められています。子どもの目で社会を点検し、社会構築を考える。その営みこそが、実は大人も安心して暮らせる社会構築に繋がるはずです。

子どもの視点で社会を捉えることにはもう一つ重要な意味があります。世代間の共通理解の促進です。社会のグローバル化が進み、先のインターネットの普及も相まって、地域・圏域間の共通理解は徐々に進みつつあります。しかしながら、今最も等閑に付されているのは、世代間の共通理解であると認識しています。子どもや、孫の生活に私たちが責任を持つことが出来るのか。その視点が重要であると認識するのです。人類が少しでも末永

くこの地球上で生きながらえるために、私たちはどの様な選択をしなければならないのか。これは恐らく沢山の選択肢の中から選べる状況ではありませんまい。むしろ、消去法の中から数少ない選択肢を取らなければならないでしょうし、その選択肢はもう既に見えているものだと私は思います。それに気づかないふりをしているのか、それとも本当に気づいていないのか。私にはオトナの考えていることが分かりません。

「小学校のころ、作家の山田詠美さんは教師を『良い先生』と『悪い先生』に分けていたそう。子どもは大人と同じように悩み苦しむ、大人以上に羞恥心を持っている。そのことを知っているのが良い先生だったと随筆に書いている（中略）福島では、検診をした子の 45%に甲状腺の被爆が確認されたという。専門家は『問題となる値ではない』と説くが、そうであっても心の重荷はつきまとう。事故以来、この手の言葉の信頼性は暴落している（中略）英詩人ワーズワースに『子供は大人の父なり』という一節があった。俗にまみれず神に近いからだが、打算や保身でがんじがらめの大人には耳が痛い。父から教わる必要が、ありはしないか」※。

「直ちに、問題となる値ではない」。この説明も私のような戯け者には理解ができません。

※『朝日新聞』「天声人語」2011 年 8 月 19 日

第一回 地域福祉センター鹿川 夏祭り（2011 年 8 月 6 日）



夏祭りの準備風景。準備をしていると、通りすがりの地域住民が「これから何が始まるのか？」と問いかけてこられます。

それに、ひとつ一つ丁寧にお答えします。交流促進の絶好のチャンスですから！！

これから何が始まるの??



地域住民に尋ねられ、丁寧に答える職員の鍵井さん。

準備こそが交流促進の要諦です。

食生活改善推進員さんや女性会、近隣幼稚園との連携も…



食生活改善推進委員さんが、炊き込みご飯を作ってくださいましたし、女性会の皆様が出店を担当下さいました。幼稚園の園児は、踊りをご披露くださいましたよ。

紅白幕と舞台



地域住民の皆様が舞台と紅白幕、そして提灯を設置して下さいました。様々な地域で同様の活動をしていますが、ここまで立派な舞台を設置したのは初めてです。 感謝・感謝。

そうめん流しは大好評



子どもからお年寄りまで、至極好評でした。

総勢 200～300 名の参加



初めてのお祭りでしたが、大勢の方にお集まりいただき心よりお礼申し上げます。

じゃんけん大会及びその後のアンケートのご記入



景品は何でしょう？いつもお世話になっている方が映っていますが…。

地域の絆では、各センター共通の住民アンケートを作成しています。地域福祉活動は、モニタリングと再アセスメントが重要だと認識しているからです。

とっても美味しい！！ 鹿川マッカ



祭りの後は、地域住民のご自宅へお招きいただきました。何から何まで恐れ入ります。

そこで食した「鹿川マッカ」。メロン味で、触感はリンゴを彷彿させられます。あっさりしていて、何個でも食べることができます。

飲んだ後には、特に最高です。

最終の高速艇で宇品港へ



管理者の小田さんに、中町港まで送っていただき、22時30分の最終便で宇品港へ戻りました。

なぜ、江田島に泊まらなかったのか？？

8月6日は広島には多くの方が訪れます。江田島市内のホテルは全て満室。広島市内も私が知る限りでは、一部屋しか空いていませんでした。だから、広島市内に宿を取ったのです。

翌日 8 月 7 日は広島空港⇒羽田空港へ



日本社会福祉士会 全国支部長会議に出席するため東京へ移動しました。

海と空の航路を使つての移動。広島市内から広島空港までは高速で車移動。

移動距離が漸次増えている今日この頃です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

“強い”子どもを育てる方法

2011/08/17 12:00:00 [社会福祉](#)



今朝の通勤中に TBS の「はなまるマーケット」※を目にすると、私の好きな尾木ママこと、教育評論家の尾木直樹氏が出演されていました。尾木氏に対しては、水流の如き柳腰な立ち振る舞いをしながらも、子どもの側にその立ち位置を据えた信念のある知識人であると認識しております。相手を油断、かつ安心させる口調で語りながらも、自身の信念を持って時にはズバッと“敵”を斬る印象を持っています。

通勤中のほんの短い時間でしたので、全てを見たわけではありませんが、子どもたちの現状報告についてのお話でした。子どもたちが今望んでいることの調査結果が示されたのですが、分かってはいたもののやはり衝撃を受けました。第一位は睡眠時間の確保であり、

第三位はのんびり過ごしたい。これは元来大人の欲求であって、子どもの欲求ではありませんまい。

当番組では、学習塾をはじめ水泳教室等の習い事で忙殺されている子ども達の姿が取り上げられていましたが、ビジネスの手法と教育は違うのだと改めて実感しました。

いい大学に行くといった非常に近視眼的な勉強方法では、真に“強い”子どもの育成はできないことは、多くのオトナ達は知っているのではないのでしょうか。それでも、記憶をインプットし、アウトプットするだけの詰め込み式似非勉強が蔓延しているのはなぜでしょう。

子どもたちに今一番必要なことは、①自然環境に触れる中で宇宙の摂理を学ぶこと、②人との違いを認め合える価値の醸成、③共に生かし生かされている人との絆、④自分の思いや意見を大切に自信等であると常々考えている毎日です。

少なくとも自身の子どもはそうように育てるつもりです。周囲にいる大人や親が子を守らずして、誰が守ってやることができるのでしょうか。

※『はなまるマーケット』TBS 2011年8月17日放送

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

状況に応じたモデルの取捨選択

2011/08/16 12:00:00 [社会全般](#)



「ロンドン北部のトットナムで6日夜、警官が市民を射殺したことに抗議するデモが一部暴徒化し、車や建物などが放火されたほか、銀行や商店、自治体の建物などが襲われた」
※1 事態に世界中が注目を寄せています。主な理由としては、「キャメロン政権発足後、財

政赤字削減に向けた緊縮財政と増税が進められているが、失業率が非常に高いトットナムでは、住民の不満が増大している」※1 と言ったものが取り沙汰されているようです。ロンドンオリンピックを1年後に控えたイギリスにとっては、早期に終息を図りたい所の様で、「キャメロン首相は10日に開いた緊急の治安対策会議で『われわれは反撃しなければならない』と述べ、暴動の参加者に厳しく対処する方針を改めて打ち出」※2 す始末。但し、「この暴動で、これまでロンドンで805人が逮捕されるなど、英国全土の逮捕者は1000人以上に上って」※2 いるそうです。

遠く離れた日本としては、「他者の“失敗”から学ぶ」視点でこのことを鑑みる必要性を感じています。日本の若者はある程度、従順に制御されている感がありますので同様の事態が起こることは想定しづらいまでも、同じ事態に陥ってしまう素地があるように考えるからです。

この暴動の発端は、国民のストレスフルな感情にあるようですが、そのストレスの背景は大きく次のようなことがあるようです。①高い若者の失業率、②格差の拡大、③大学の学費の高騰等。赤字財政を立て直すため緊縮政策を打ち出した結果であると報じられていますが、これらは社会を不安定にさせるには十分な要素として機能することでしょう。

①若者が働けない理由は、社会構造に起因していることが殆どではないでしょうか。少なくとも個人的な要因ではないところで、就職が決まっていないのは自明の理でしょう。そこを是正する社会変革及び政策誘導が不可欠であると認識しています。

サッカーの南アフリカ大会を思い出しますが、治安の悪さから日本人は夜の外出が禁じられていました。中国でもスリが多いと聞きました。貧富の格差は治安の悪化を招きます。これは至極単純で分かりやすいことだと思います。一生懸命働いていても、同様に働いている別の人間の方が裕福な生活を送っているとしたら、平然としていられる人間の方が少ないのは想像に難しくないことでしょう。先進諸国は、その発展過程において格差が治安の悪化を招き発展を妨げるとして、セフティネットの整備としての社会保障の充足を図りました。格差の拡大は、必ずや全国民を不幸に導きます。

③1998年までイギリスの大学は公費で運営されており、授業料は無料であったと聞きます。それが、日本に近いまでの授業料の徴収を行う法案が通っているそうです。日本のように端から、高額な費用を負担しなければ高等教育を受けることができない国家体制とは異なり、高等教育を受ける条件に貧富の差が反映されない様配慮された理想的な政策が、一転して、日本型に陥った理由は若輩には分かりませんが、これは若者にとっては暴動に値する出来事だったのかも知れません。

赤字財政を立て直すことは確かに重要ですが、そのための手法は分野に応じて講じる必要性を感じています。かつては、学校の会社化を進めた著名な経営者がいると耳にしたことがあります。学校は会社では断じてありません。教育はもちろん、福祉や医療、環境、芸術、文化などもビジネスモデルで語られるべきものではないと私は考えています。もちろん、効率と効果の観点からそのモデルの一部を的確に導入することは否定するものではありませんが、全てをビジネスモデルで考えるものでは全くありません。つまり、人の生命や人生を左右させる人権の根幹をなす分野においては、近視眼的な効率と効果を指標に持つビジネスモデルでは対応できないのだと若輩は理解しています。

近頃保育の分野でも、ビジネスモデルの導入が図られているようですが、専門性をはき違えたものも多く散見します。砂場を塩素消毒し、動物を飼育しない、怪我を極力させないよう安全な活動に焦点化したものが多く目につきます。それに代わって、楽器の演奏や、イギリス語会話の教室を導入している所もあるようですね。

ビジネスモデルの主要な活動は、顧客を獲得することにあります。そのために、顧客満足度の高いサービスを提供するわけですが、この場合の顧客満足は、社会福祉で言うところのニーズの充足ではないと自身は解釈しています。つまり、福祉サービス利用者のニーズではなく、市場サービス消費者の欲求に対応するのがビジネスモデルの実践であるとの認識です。社会福祉分野で言うところの、**demand** や **felt needs** に近いものが該当すると考えます。

また、社会福祉サービスにおいて最も重要視されるべき点は、クライアント中心主義の視点です。クライアントの問題はクライアントにしか解決できない自明の理に基づいて、クライアントの自己決定を尊重し、時にはクライアントの思いを代弁し、社会環境を調整していくことが求められているのです。しかしながら、ビジネスモデルにおいては、顧客を獲得することが第一義となってしまいますので、顧客になることを決定する権利を持っている方（家族や親族、養護者等）の意向を優先させて、顧客当事者の意向を軽視する活動も顕著となってしまいます。

事実、如上の保育サービスの実践はまさにこの陥穽に嵌っていると云わざるを得ません。クライアントである子どものニーズを中心に置いた活動としては不適切と云わざるを得ないからです。おそらくこれは、「危ないことはさせないでもらいたい」「他者に胸を張れる保育をしてもらいたい」といった顧客になる決定権を有している両親のニーズを中心に据えたものではないでしょうか。「危ない」のは誰にとってのそれなのか、少し考えれば容易に理解できるものです。近視眼的な“危険”を避けて育てることが、その子の長い将来に

において大きな“危険”を背負わすことに繋がることなど想像に難しくはありません。如上の例で言えば、両親にとって「危ない」ことを避けることが、子どもにとっては将来のリスクをさらに高めることに繋がるのです。無菌室でしか育たない、自然の摂理を教えない、人の限界や痛みを学ばない保育をさせて、果たしてそれがクライアント中心主義のサービスと言えるのでしょうか。

財政赤字を是正するためとは言え、近視眼的な効率と効果で推し測って進めるビジネスモデルで全てを進めることは非常に危険だと自身は認識しております。対象分野や状況、時勢に応じて、使うモデルは本来変えるべきものでしょう。特に、人が生きていく上で重要なもの、医療・福祉・教育・環境・文化・芸術等は、ビジネスモデルの適応外の分野と言えそうです。社会的コスト上赤字になるからと言って、病院や介護施設はもちろん、警察や消防署を無くしても良いという人間はまずいないでしょう。

この度のイギリスにおける暴動。暴動という行為そのものは愚劣だと言えますが、その行為の背景をみるのも私たち福祉専門職の面目躍如たるものがあるはずです。その“問題”行動の背景には、必ずや複数の要因が絡んでいるからです。このイギリス暴動の背景をみることにこそ、私たち日本人がこれからの社会構築に当たって進むべき里程標が見えてくるのかも知れません。

※1 『朝日新聞』2011年8月8日

※2 『朝日新聞』2011年8月11日

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 24 / 57

初めての訪中③

2011/07/18 12:00:00 [社会福祉](#)

相関性のある一般民衆の生活と施設利用者の生活



今回の訪中の目的の第一義は、現地の介護施設の視察であり、そこでの交流でした。訪中の期間で、2カ所の介護施設に訪問することが出来ました。

両者は共に民間主体の介護施設でしたが、規模や財政状況の異なる施設に見受けられました。その様な異なる2つの施設にお伺いさせて頂いたのですが、共通して感じたことが3つ御座います。その3つの思いをここでは叙述させていただきます。

第一に同じ専門職としてとても嬉しかったことがあります。それは、介護職の方が非常に明るくお仕事をされていたことです。日本の介護職の仕事ぶりを見てみると、忙しさのあまり眉間にしわを寄せてしまっている職員や、悲壮感を漂わせている職員をよく見かけます。私が訪れた中国の介護施設では、そのような職員さんを見ることが無かったと記憶しております。殆どの職員が笑顔で仕事をされているのです。私も一応は専門職ですから、言葉が通じなくとも、それが作り笑いなのか否かは察しがつきます。そう、明らかに自然な笑顔がここにありました。そして、利用者を見る眼差しに無垢感と優しさを感じました。専門性の如何に拘わらず、純粋に高齢者が好きなのだと察して見ていました。

以前、古参の福祉職が、児童養護施設の職員は昔の方が皆笑顔で仕事をしていた旨のお話をされていたことをふと思い起こしました。今より人員配置も、収入も少なかった昔の職員の方が笑顔で仕事をしていた。話を聞いた際若輩には直ぐに理解が出来なかったもので、このお話をよく覚えていたのだと認識しています。氏曰く、今は記録を残すことが強要され、書類仕事が半端なく増加した。だから、人員配置が増えても職員はデスクワークに駆られ、多忙化し、クライアントとも関わる事が出来ず、眉間にしわを寄せて仕事をしていると。

確かに人員配置が増えたとしても、その分書類管理や、リスクマネジメント・コンプライアンス・プライバシーポリシーを守るために多様な業務が増加しているのは否めない事実であり、職員の業務量は減少どころか増加の一途を辿っているようです。これは飽く迄

私の推察の範囲のお話ですが、古き日本のそんな良い側面がココにもあるのかも知れない
と思って彼女たちと接しておりました。

二つ目は、前述した一般民衆の生活水準と、介護施設内における利用者の生活水準の
関係性にあります。下記の写真にあるように、都市部は区画整備が公的に進められ、新居に
転居した住民の住環境は高水準にあるものの、大多数の民衆の住環境は決して高い水準に
あるとは言い難いのが現状です。例えば、首都北京の幹線道路を跨ぐ陸橋でさえ、所々に
穴が開いており、その隙間から自動車の往来が見える有様です。私たち日本人の感覚から
すれば、直ぐに手直しをしなければならない“欠陥”の状態にあるわけですが、こちらで
は欠陥どころか“普通”の存在としてあるようです。このような状態が普遍化している社
会において、介護施設内における住環境が日本のそれと同じ水準ではないことは自明の理
なのかも知れません。

私たちが訪れた施設は、富裕層の方々が多額の自己負担をもとに入所される施設ではな
く、民間が主体的に運営しているものの何らかの公的支援が担保されている施設でした。
ですので、おそらく社会保障の対象になる様な施設に該当するものと察しているところだ
す。公的支援を投入し、いわゆる社会保障や社会福祉サービスの対象としての介護施設の
在り方を考えると、やはり、一般民衆の生活水準や住環境と、その中にある生活の質は相
互作用の関係にあるべきとの考え方が主流であると認識しています。つまり、一般民衆の
生活水準が低いにも拘わらず、公的支援がなされている介護施設内の生活水準がそれ以上
に高い水準であることは、余程成熟した民度を持たない限り考えにくい。おそらく、北欧
の福祉国家ですら、社会サービスは一般民衆の生活水準と同レベルで提供されるべきとの
考えが主流なのだと理解しています。真に成熟した福祉国家では、社会的弱者こそ、一般
民衆よりも質の高い生活が保障されていなければならないと認識するのやも知れませんが、
未だその様な成熟した国家はこの世に存在しないと理解しています。

経済至上主義社会を標榜する日本や中国においては、未だ劣等処遇の原則、つまり、社
会サービス受給者の生活は、一般民衆のそれよりも、劣悪でなければならないという考え
が蔓延しているのが現状です。そのことを鑑みても、介護施設内の生活水準のみが今後飛
躍的に向上することはないでしょう。飽く迄も、一般民衆の生活水準が向上したその後を
着いていくことになりそうです。如上の観点から再認識し得ることは、福祉国家であれ、
経済至上主義国家であれ、共通するべき考え方は、一般民衆の生活水準と、社会サービス
利用者の生活水準は相互作用の関係にあるということです。私はそれに加えて、一般社会
の価値と社会サービス従事者の価値にも相互作用性が強く存在しており、結果として、社
会の価値が社会サービス利用者の価値や生活にも多大な影響を及ぼしていると認識してい
るところです。クライアントに対する社会福祉サービスの質を高める営みの行き着く先は、

社会の価値や構造を変革することにある。つまり、ここにソーシャルワークの存在意義があるのだと改めて認識しました。

最後の三つ目ですが、私が拝見させて頂いた施設に限って言えば、端的に 25～30 年ほど前の日本の施設が想起されるものでした。それだけの歳月の“遅れ”があると感じた次第です。それが仮に普遍的な事実であったとしても、中国が日本に追いつくために同様の期間が必要なわけではありません。例えば、ここではオムツをあまり用いていらっしゃいませんでした。実は、乳幼児にもオムツを用いる風習は無いようです。乳幼児のズボンの臀部には同様に割れ目があり、そこから排泄する場面を目にすることがありました。日本のようにオムツ文化が浸透していない模様です。

だからと言って、オムツを勧めることには若干躊躇をしました。日本の歴史を振り返ってみると、サービス提供者主体の時代から、どのような利用者に対しても一律・画一的にオムツの使用を強要してきた事実があります。その後、利用者本位のサービスが謳われ出し、尊厳の保持や個別ケアの実践が成される過程で、個別の排泄ケアが導入され、オムツ外しが盛んに行われた末現在があります。そのように考えると、日本が犯した“失敗”を中国の介護職が犯す必要はないと思いました。また、オムツという文化そのものが善なのかという単純な疑問もあります。例えば、保育場面においてもオムツがなければ、排泄時の子どもの反応を大人たちはもう少し必死で探ろうと観察するのもかも知れません。“失敗”してもらっては大変だからと、介護者や保育者はクライアントをもう少し意識をもって観察するようになりはしないでしょうか。

少し極端な例かも知れませんが、何が正しくて、何が間違っているのかを判断することはそれほど容易なことではありません。自身が信じてきたことが、違う角度から見れば大きく“間違っ”ていることも珍しいことではないでしょう。裏を返せば、日本文化の尺度で中国を見て“間違っ”いると捉えたところで、中国文化からは全く“間違っ”いないことになります。

私は時に、自身の信じて拠って立つその立ち位置を意図的に揺さぶってみることを大切にしています。上手くできているかは不明ですが、そのように努め立ち振る舞うようにしています。違う言い方をすれば、自己批判・自己否定をする時間を意図して設けているのです。自分の信じてきたもの、積み上げてきたことを一度批判的に見直してみること。これは大変な苦痛を伴いますが、それをせずして人は成長しないと考えるに至りました。このことを再確認できたことが、訪中の自身に対する最高の“お土産”だったのかも知れません。

私の尊敬するアーティストであるザ・ブルーハーツの甲本ヒロト氏も歌っています。

「永遠なのか 本当か時の流れはつづくのか
いつまで経っても変わらないそんな物あるだろうか
見てきた物や聞いた事いままで覚えた全部
でたらめだったら面白い
そんな気持ちわかるでしょう～」※

皆さんは、「そんな気持ち」分かりますか。

※ ザ・ブルーハーツ「情熱の薔薇」作詞・作曲 甲本 ヒロト氏

介護施設 A の外観



隣には診療所が併設されています。

介護施設 A の玄関



日本の感覚では派手やかな玄関です。

証書および勲章文化



玄関に立派なものがいくつか設置されています。その他、行政機関等の玄関にもたくさん掲げられていました。

パワーリハの器材！？



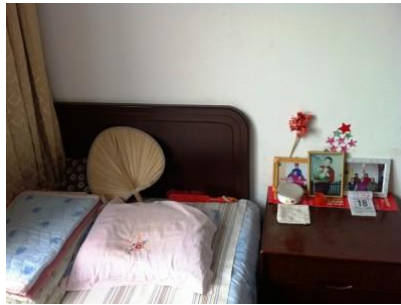
一通り揃っているようですが、使われた形跡があまり感じられませんでした。

ある居室（個室）での風景



娘さんかお孫さんが、面会に来られていました。

私物をある程度自由に持参



在宅生活により近い家庭的な雰囲気を感じました。

日本のトイレの清潔感は世界一



改めてその様に実感しました。

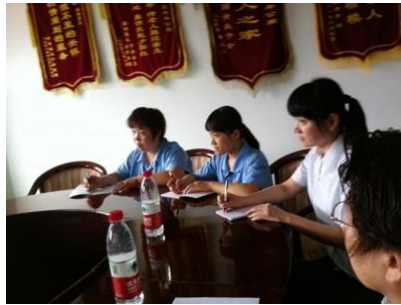
施設管理者および職員さんとの情報交換



気づいた点・思ったことを率直に話してみました。

管理者の方は、非常に熱心かつ前向きに私たちの話を聞いてくださいました。日本のケアの質が高いことはよくご存じで、興味があることが伝わってきます。

現場の職員さんとも情報交換



皆さん非常に明るく、自然と寄り添うケアが出来ていました。
とても前向きな姿勢で話を聞いて下さいました。

ちょっとした段差が彼方此方に



階段の滑り止めにも段差があり、少し危険を感じましたが…。

北京の幹線道路に架かる陸橋



首都の発展した地域でも、このような状況が散見されます。

北京の幹線道路に架かる陸橋



下が透けて見えます。

陸橋の下はこのような状況



石家荘市内は、クラクションの嵐でしたが、北京ではあまり聞かれませんでした。
ここ１年間で、クラクションの数が急激に減り、車線変更の際に方向指示器を出す車が増えたと現地の方が教えてくださいました。

介護施設Bの外観



先ほどのAよりも、財政状況および新しさにおいて、不利な状況に見受けられました。

高い塀と門に囲まれて…。



日本の介護施設では今や見られぬ設えです。

アクティビティの材料



高齢化が進行してまだ間もないためか、元気な高齢者が多いと認識しました。

日本の介護施設も 20 年ほど前は、元気な高齢者が入所され、朝はラジオ体操等をしていましたし、おむつ交換時等は職員のお手伝いをして下さる利用者もいらっしゃったと聞いています。

それと同じような状況が、ここ中国にもあるようです。

シャワー室



湯船につかる習慣は無い様で、シャワーが主流であると伺いました。

どうも床屋からもらった洗髪台をシャワーチェア代わりに活用しているようです。

介護施設B建物外観



二階建てですが、当然エレベーターはありません。

代わりに車いすでも昇れる階段が…



「昇れる」を「登れる」と表現したほうが適切かもしれません。とっても急な傾斜となっています。

居室にあるトイレと洗面台



共用のトイレ



このタイプのトイレが中国では主流の様です。間仕切りが無く、座ってするのですが、こちらに向かって座るそうです。

日本でも昔は介護施設には和式トイレがありました。生活習慣の変遷と共に無くなってしまいました…。

スローガンが多く掲示



「全てはお年寄りのために…」という意だとか。

人の意識は変遷します。

意識すれば出来る⇒意識しなくても出来る⇒忘れてしまう⇒意識すれば出来る⇒・・・
だからこそ、当たり前のことでも標榜する必要があるのです！！

台所か厨房か…



日本の衛生面が突出して秀でているのかは分かりませんが…。

スロープの傾斜



急な傾斜であるために、滑り止めの段差を設けています。

明るい介護職員さんたち



気さくで明るい方々でした。利用者に対してもフレンドリーな感覚です。

帰りは路線バスで



バスの車窓からコミュニティを発見



道端や公園の一角で、このような地域住民の集う場面を多く見かけました。地縁は強く存在するようです。

今夜は屋台で夕食を



観光客がまず行かない場所での食事です。
現地文化に触れる丁度良い機会です。

羊の子宮を誤って食べました



皆さん召し上がられたことがありますか？
串焼きになっていたのですが、注文と異なるものが混在しており誤って食したところ…。
流石の私も、飲み込むことが出来ませんでした。
少しトラウマになってしまいました。
文化の違いに触れることはできましたが…。

帰国前夜。



皆さんであるお店に行きました。

そうです。フットマッサージのお店です。



60 分 25 元



当時のレートで、1 元 13.5 円ですから、約 337 円となります。

コップも漆器も



レストランでは、プレートとシルバーはこの様に出されていました。

公園が活用され



コミュニティの形成がなされているように伺えます。日本の公園は、よく閑古鳥が鳴いていますね。

首都北京市街地の歩道



この様な設えを多く見かけました。

いざ日本へ…



実はこの後、惨劇が…。

危うく飛行機に乗り遅れそうになり、搭乗口まで3人でダッシュをしました。

その時の写真が示せないのが残念です。

[この記事にコメントする](#)

[コメント\(0\)](#)

初めての訪中②

2011/07/17 12:00:00

[社会福祉](#)

中国と日本の社会情勢の近似性



同じ東アジア諸国として、中国と日本は似ている側面が多くあるようです。特に、日本が歩んできた道を、中国は数十年遅れて同じ軌跡を辿るのではないかとされています。

若輩が知りうる限りでも、次の7つが挙げられるのではないのでしょうか。

- ①経済成長戦略路線を第一の道としている。
- ②核家族化が進み家族機能が低下の一途を辿る。
- ③在宅サービス・コミュニティサービスの充足が求められている。
- ④急速に高齢化が進展する。
- ⑤介護専門職の確保と人材育成が課題となる。
- ⑥家族介護者の負担が増大している。
- ⑦「老養小」（高齢者が子どもを扶養する）問題。

格差社会を織り成す源泉を辿れば、中国は福祉国家としてではなく、経済至上主義国家を目指していることが理解されます。つまり、大きな政策転換がなされない以上、中国は手厚い社会保障を施す道を取ることは無いでしょう。日本に等しく。それが①であると認識しています。

②については、やはり近代化した社会は分業制の中から、核家族化が促進される傾向があるように思われます。よって、中国においても核家族化が進んでおり、今まで強固にあった家族機能が低下傾向にあるようです。これは、かてて加えて、公助機能の減退と相まって自助機能が低下傾向にあることから、福祉サービスは施設から在宅へと方針転換を迫られることを示唆しています。つまり、日本の介護保険制度のように在宅サービスを基盤化する実践や、公助と自助を補う機能としての互助・共助を活用したコミュニティサービスの展開が求められる素地があることを強く物語ってもいるわけです③。

そして人口動態についても注視する必要があるのは、日本と同様に急速な高齢化が進む点にあります。しかも、割合が同様であるのみならず中国の場合はその分母が日本の10倍以上あることにも特筆すべき意味があります。高齢化社会の定義の範疇にある高齢化率7%から14%に到達する所要年数は、日本で24年（1970年-1994年）、中国で27年（2000年-2027年）と大差なく、中国の場合は現在進行形の真ただ中に存在しているようです※1。しかも、分母の数が多いことを鑑みると、現在の中国の高齢者数は日本の全人口よりも多いことが推察されます。日本と同様の要支援・要介護者の発生率を鑑みると、1億3千万人の（まだ高齢化が進行して間もないことを加味して）約10%と捉えたとしても、1,300万人の要支援・要介護高齢者が存在することになります④。

⑤であれば、今後は日本以上に福祉専門職の確保と育成が不可欠となるのは自明の断りです。来たるべき時に備え、今から十分な準備を施す必要があるのではないのでしょうか。そして、その専門職には、日本と同様、家族支援の機能が期待されることでしょう。一人っ子政策を長年推し進めてきた中国では、高齢化も相まって、「4：2：1 構成の家庭が激増して」※2 いると言われています。これは「中国の家族構成の典型的な 3 世代世帯」※2 を指し、「真ん中の 2 は夫婦 2 人を指し、4 は夫婦双方の親」※2 を指します。「1 は一人っ子」※2 を指すのは言うまでもないでしょう。文献では更に、「35%の家庭は 4 人の高齢者を扶養しなければなりません。都市部では 49%の家庭が 2～3 人の高齢者を扶養しなければなりません。もし 3 代目も一人っ子の場合、3 代目夫婦はもっとも多く 12 名の高齢者を扶養することになる可能性すらあります。一人っ子政策では将来的に労働人口の減少を意味するので、世代間扶養で成り立つ年金財源の提供者（現役労働者）が減り、家庭における老親扶養危機の到来が現実味を帯びてきます」※2 と記されています。であればこそ、今後中国においても、クライアントに焦点化した活動ではなく、家族関係や地域関係を視野に入れたソーシャルワークの展開が求められるやもしれません⑥。

一人っ子政策の影響下、大事に育てられた子どもたちが、親への依存心を払拭することができないまま大人になって、一種の社会現象を起こしていると同著書には書かれていました。「北京にある老齡科学研究センターと中国老齡科学研究センターの調査によると、65%以上の家庭で養老小の現象が存在します。約 3 割の人は生活費の一部または全部はその両親が負担しています。（中略）計画出産政策が実施されて以来、一人っ子グループの周辺には、おおよそ 6 人の大人、つまり、母と父、父方と母方の祖父母がいます。彼らは幼少の時から至れり尽くせりの保護を受けてきました。ある意味では溺愛されたと言っても過言ではない世代です。欲しい物はいつでも与えられますし、小遣いなどに困ったことはありません。親などから受けた過保護・甘えが度を過ぎて、いわゆる『小皇帝』的な存在になりました。

専門家は中国版パラサイトの発生原因を次のように指摘しました。

①これまで両親に頼り切ってきた若者は厳しい現実と直面することができず、結局、親のパラサイトになります。

②一人っ子のため、小さい時から親などの溺愛を受けて、他人に対する依存意識が強く、自立精神が欠けています」※2。

中国の失業率は、日本よりも若干良い程度だと伺いました。しかしながら、特に都市部の大学新卒者の就職先の確保が出来ていない状況があるようです。低賃金労働や不安定就労を余儀なくされている新卒者も多く、中には、日本における「引きこもり」の現地呼称として「蟻族」と呼ばれる過ごし方をしている方が急増しているとお聞きしました。つまり、単純なる一人っ子政策の影響のみならず、社会構造全体の問題として、「老養小」の間

題があるのではないかと認識した次第です。

家族システムや、社会システム全般を捉えながらの個別援助実践が、中国でも強く求められる日がいつかはやってきそうです。やがて、日本の社会福祉の専門性を中国に“輸出”する時が来るやもしれません。その時に、何らかの支援を我々が行うために重要なことは、自国でその手本となる実践を、まずはしっかりと積み上げて行くことではないでしょうか。自身の実践に一定の確信と確証が持てない専門性であれば、それは到底“輸出”するに値しません。なぜなら、“輸出”するに当たっては、相当量の現地状況の事前分析を行った上で、現地の利用者に最も利益ある方法論に再構成して行う必要があるからです。その際に重要なのは、“輸出”者が、自らの実践と理論について深々と理解していることが求められます。自身の“製品”を熟知していない者に、その“加工”はできないからです。

※1 包 敏氏『現代中国の社会と福祉』ミネルヴァ書房P.84 2008年3月

※2 包 敏氏『現代中国の社会と福祉』ミネルヴァ書房P.93・98 2008年3月

私たちのみが外国人



これだけ大勢の方が集まっているのに、日本人は私たちのみの様でした。

石の小物が沢山あり…



言葉も通じないまま、ついつい値段交渉を始めてしまいました。7つ買って500元。当時1元＝約13.5円。

結構高く買ってしまったと後に後悔しました。

毛沢東は大人気



毛沢東のバッジが彼方此方で売られていましたが、どれも高額でした。根強い人気があるそうです。

所場代は5元



各露店の隅には「5元」の所場代を収めた証が…。

高いのやら安いのやら…。

日本勢が値段交渉を開始



お二人で、長時間に渡っての交渉を始めました。どうやら、半額近くまで値切れたそうです。

そう考えると、私はやっぱり騙されたのかも。

お巡りさんも試使用



日本では考えられない光景に思わずシャッターを押しました。が、あまり興味本位で何でも撮らぬよう、後程ご指摘を頂戴しました。

物事の捉え方がことなりますから、気を付けて対応しなければと肝に銘じた次第です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(2\)](#)

初めての訪中①

2011/07/16 12:00:00 [社会福祉](#)

中国の社会保障と社会構造に対する“0.1”考察



広島の人との計らいで、中国のこれまた恩人をご紹介いただき、中国へ生まれて初めて伺うことが出来ました。北京から新幹線で約 2 時間の所にある石家荘市に 4 日滞在させて頂きました。最終日は北京市内にて観光をさせて頂きましたので総計 4 泊 5 日の旅です。以下私の個人的なメモ書きとしても、現地で感じたこと、学んだことを叙述させて頂きます。

世界第二位の経済大国となった中国。そのイメージと、マスメディアを通して知り得た情報とは少し異なる印象を受けました。一般的国民の生活水準がそれほど高くないことに驚きました。原因はどうやら大きな格差にあるようです。「1978 年、所得分配の不平等度を表すジニ係数は、都市住民で 0.16、農村住民で 0.21 しかなく、異常とも言えるほど小さいものでした。しかしその後、国の所得分配政策などの変化によって都市と農村における所得格差が急速に拡大しました。2001 年の時点で、中国のジニ係数はすでに 0.45 に達し、国

際社会で言っている警戒ラインの 0.40 をすでに突き破り、かなり危険なレベルに達しました。また総人口の 20%を占める最貧困層が所得・消費額に占める割合はわずか 4.7%にすぎない一方で、総人口の 20%にあたる最富裕層はなんと所得・消費額の 50%を占めました。(中略)中国はわずか 20 数年で、平等主義を標榜する国からこれだけ不平等な国に豹変し、貧富格差の拡大速度は世界的に見ても極めて稀です」※1。一部の富裕層による経済活動が大きく GDP を生み出しているようです。なので、一般の市民の生活水準は日本に比べて然程高くないどころか、随分低い心象を持ちました。

今回の旅では、現地の介護施設との情報交換を行うことが目的でした。ですので、この国の社会保障や社会福祉の考え方についても鑑みる必要があるでしょう。格差が進捗している現状を見れば、社会保障や社会福祉は機能していないことは安易に察しがつく話です。日本の現状を見てもよく理解ができるでしょう。

それでも、「例えば、日本の厚生労働省『所得再分配調査 (2002)』では、全世帯の当所得 (市場経済メカニズムを通じて確定した所得) のジニ係数が 0.4983 であるのに対して、再分配所得 (当所得から税・社会保険料を控除し、年金・医療費などの給付を加えたもの) のそれは 0.3812 となり、再分配によって所得格差が改善されてい」※2 ののだそうです。であったとしても、例えば子どもの貧困率では、「阿部さん (国立社会保障・人口問題研究所 国際関係部第 2 室長 阿部 彩氏) が着目するのは、政府が所得を再分配する税負担と社会保障の給付のバランスだ。低所得者の税負担を軽くし、社会保障を手厚くするほど、貧困の削減は期待できる。ところが、日本は、収入自体で計算した子どもの貧困率は 12.8%なのに、収入から直接税と社会保険料を引き、児童手当など社会保障の給付を加えた再分配後だと、13.7%に悪化する。OECD加盟国は軒並み再分配後に貧困率が下がり、悪化するの日本だけ」※3 だと言われており、決して社会保障の手厚い国であるとは言い難いのが現状です。

それと比べても中国の場合は、「中国においてこのような調査はまだ行われていませんが、都市と農村の二重構造をはじめ、社会保障制度の設計は所得格差の是正に寄与するどころか、むしろ所得格差を一層拡大させるような機能を持っています。(中略) 結果として、中国では社会保障給付はむしろ都市住民と農村住民の間の所得格差を一層拡大させています。つまり、この両者間の格差は当初所得の 3.47 倍から再分配所得の 5~6 倍まで拡大しているということです」※4。言うことは、中国も日本と同様、経済による成長戦略路線を最優先し、社会保障は経済成長の従属的な存在として認識していることが大よそ理解されます。

であるので、世界第二位の経済大国であるにも拘らず、多くの一般市民の生活水準は然

程高くはない現状があるのでしょう。訪中しての第一印象はまさにこのことにありました。経済大国と呼ばれても、一般市民の、社会的弱者の生活水準が劣悪であればそれは成熟した国家とは言えません。そのことを垣間見たことが今でも私に大きな心象を与えています。

これより数回に渡って、初めての訪中の中で触れたこと、学んだことについて記載させていただきます。人口約 13 億人を擁する巨大国家です。僅か数日間の断片的な情報で、全てを語ることは非常に危険であると認識しておりますので、そのような大それた意見ではありませんことをここで強く付言しておきます。数年中国に在住されている方ですら、中国のことが良く分からないとおっしゃられます。37 年在住している日本の国家でさえ、的確に物事を捉えられているのかも分からぬ若輩です。これは飽く迄も若輩による断片的な一見解であることをご理解いただき御読み頂ければ幸甚に存じます。表題の「“0.1” 考察」は、まさにそのことを表したものです。

※1 王 文亮氏『現代中国の社会と福祉』ミネルヴァ書房 P.1 2008 年 3 月

※2 王 文亮氏『現代中国の社会と福祉』ミネルヴァ書房 P.7 2008 年 3 月

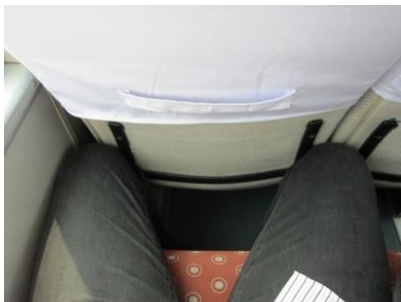
※3 『中国新聞』2009 年 11 月 6 日

※4 王 文亮氏『現代中国の社会と福祉』ミネルヴァ書房 P.8 2008 年 3 月

北京国際空港 華やかで綺麗な空港



高速バスで北京西駅まで移動



高速バスの車内は埃っぽく、くしゃみが止まりませんでした。

前後のシート幅が非常に狭く、足が収まりません。

バスが到着すると…



駅の入り口まで、バイクで乗せていくと売り込まれて、不安を抱えながら乗りました。

普段は超明るいファシリテーターの小田氏も若干不安げな表情ですね。

広島県介護福祉士会の廣山会長は余裕の表情



先頭を走りだした我が車輛は…



逆走！逆走！

危ない！危ない！

叫んでも日本語など通用しません。第一、こちらの国では珍しくない習慣のようです。

北京西駅の入りに到着



これから新幹線で2時間要して石家荘市に向かいます



沢山の人が縦横無尽に歩いています



例えば、日本では右側通行等の暗黙のルールが多数存在します。ここにはそのようなものは存在しないようで、みなさん我が道を行かれているように見受けられました。

衝突等を避けるためには、自己主張を積極的にする必要があります。なんか、大阪みたいなやな。

今噂の新幹線に乗って石家荘市へ



在来線と同じ線路とホームを共有



この点について、日本と異なるので、日々のメンテナンス等は十分なされているのか？安全性は担保されているのか？いみじくも、車中で話をしていたところです。

石家荘駅に到着



到着したのは日没前。移動だけで少し疲れた感覚です。

石家荘市の街並み



人口は約 924 万人。それでも中国においては、中堅及び地方都市に該当します。

多様な「タクシー」



三輪のタクシーや、自家用車にしか見えないものまで、多様なものがありました。現地生活の長い方のお話では、大きな企業の、しかも身分証明書を車中に掲示しているタクシーに乗るよう勧められました。

ホテルに到着後の夕食



今思い起こせば、これが、一番贅沢な食事だったのかも知れません。

中国でお世話になった恩人たち



感謝の気持ちを込めて。有難うございました。

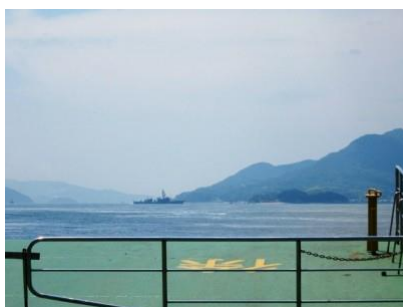
[この記事にコメントする](#)

[コメント\(0\)](#)

絆の力が生きる時

2011/07/15 12:00:00

[社会全般](#)



法人に「地域の絆」を名づけて早 5 年が経っている昨今です。絆を大切に、人と人との
怒りがりを大切に、ネットワークを大切に、日々実践をしてきたつもりです。「つもり」と
書いたのは、それが真になされていなかった猛省から来ています。過日お世話になった恩
人より、大変貴重なご助言を頂きその「猛省」が生まれたのです。

問題は、その絆の在り方にありました。地域の絆は、開設から現在に至るまで多くの理
解・協力者があってここまでやって来ることが出来ました。振り返ると、実に多くの理解

者のご支援を賜り、苦難を乗り越えても来れたものです。その時々にお世話になった方々には、心より深く感謝し、その思いをぶつけても参りました。しかし、平素になるとどうでしょうか？お中元やお歳暮等のやり取り等に終始し、足を運ぶことが少なくなっているのが事実です。

困った時だけ協力を要請し、平素になれば疎遠になる関係性に一体何の価値があるのでしょうか。自身の目先の利益のためだけに繋がる関係性に、その力が発揮される日が来るのでしょうか。そうではないと、恩人は示唆して下さいました。

公益と私益は繋がっている。これは自身の座右の銘にも成りつつある言葉ですが、そのことの意味を私は真に理解できていなかったようです。目先の利益が必要な際に、窮した際に、繋がり、それ以外は疎遠になるネットワークや絆に何の価値を見出すことができるのでしょうか。また、そのような相手に対して、連携先は協力的になれるのでしょうか。考えれば、当然のことなのですが、その当然の事すら若輩は理解していなかったようです。

困った時や、目先の利益を追求する際にのみ繋がるネットワークや絆は、何ら力を擁していないと見るべきです。自身が窮した時だけ、利益を求める時にだけ、連携を求めてくる相手を信用することが出来ますか。そうではなく、平素より、日常的な繋がりや絆こそが大切なのではないのでしょうか。そこで培われた信頼関係こそが財産や資源となるのでしょうか。公益と私益は繋がっているのですから、性急に見返りとしての私益を求めるのではなく、公益のために黙々と行動を取れば良いのでしょうか。そして、それが私益に繋がるのはずっとずっと後のことなのです。

今自身にそのように語りかけている最中です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

世界に向けた情報発信

2011/07/09 12:00:00 [社会福祉](#)



地域の絆は今年度より、国外へ目を向け情報の発信および収集に努めることと事業計画に定めています。

代表者である私は37歳です。この先まだまだ社会性の高い実践をやり遂げる責務を感じております。自身の地域さえ良ければ、自身の国さえ良ければ、そう思って実践すればするほど優れた実践からは遠ざかっていくのではないかと考えております。

私はお金儲けや、会社を大きくすること、そして現在の名声には興味がありません。100年先の人類に評価を受ける実践をしたいと思っていますだけです。それこそが、お金儲けや会社を大きくすること以上に貪欲なことであると認識しております。

飽く迄、長期ビジョンではありますが、未来に向けて情報発信をするためのツールも作成中です。法人のパンフレットとして中国語版・韓国語版・イギリス語版を現在作成中です。中国語版は、本日完成しましたので、近々当ホームページにもアップされる予定です。法人本部の有能なニューフェイスが現在準備をしてくださっています。

所詮人間はいつかは死にます。限られた人生の中で、福祉専門職として世の中のためにでき得ることを後悔することなく実践していきたいと思う昨今です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 25 / 57

地域の絆 代表理事 中島康晴

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

「ピンチはチャンス」における「チャンス」の有効期限

2011/07/03 12:00:00 [社会全般](#)



予てから私は、「ピンチはチャンス」という言葉を、座右の銘の一つとして大事にしてきました。前職で大変お世話になった師の口癖は、「失敗は成功の元」でしたし、「ピンチ」を乗り越えるために初めて人は深い思考展開を実践するのであり、結果としてそこに成長への「チャンス」が芽生えるのだと理解してきました。特に私の場合、元来はゆったりとしたマイペース型の人間ですので、追い込まれなければ中々行動に移らない側面があります。私のような人間にこそ、「ピンチ」の際はしっかりと頭を打って、自らを追い込み悩むことが何よりも必要な営みであると認識しているところです。

「失敗したとき、人間は、『もう同じ失敗はしたくない』と思います。そして、『どうして失敗したか』『失敗しないためにはどうすればいいのか』を自然と考え始めます。結論は簡単には出ません。答えを導き出すために、さまざまなことを体験し、時にはさらに失敗を重ねていくこともあるでしょう。しかし、その過程で一つずつ新しい知識を得て、いつしか、失敗しないやり方を見つけます。このとき、その人の頭の中には、そのやり方だけではなく、『どうしてそのやり方だと失敗しないのか』という因果関係がしっかりと刻み込まれているはずです。だから、もし予期せぬことが起きたとしても、『どうしてこんなことが起きたのか』を冷静に考え、対処することができるでしょう。だからこそ、真の科学的理解は、失敗を通じてしか得ることができないと言えるのです」※1。失敗学の提唱者である畑村洋太郎氏の言葉ですが、畑村氏は、失敗をした際の「体感実感」も重要な要素として取り上げられています。人は失敗をした際、そのことに対する実感や反省をまず行います。その「体感実感」によって、新たな「知識」「経験」「思考」を身に着けることができ、延いてはそれが「真の科学的理解」に繋がるのだとおっしゃっているわけです。

「ピンチはチャンス」で私が重要視しているのはこの「体感実感」にあります。例えば、今回の福島第一原発の事故において、現在はこの失敗に対する実感と反省が市井には溢れ返っています。その「体感実感」によって、なぜこのような事故が起こったのかを猛省し、新たな思考と行動の発展に繋げていくことが必須となるはずです。しかしながら、人間は脳科学的にも物事を忘れる動物でもあります。明確で具体的な事故の検証や、新たなエネルギー政策を打ち出す等の対応策に対する道筋を今しっかりと確立していかなければ、この「体感実感」は時間とともに希釈され、この度の失敗は「真の科学的理解」にも全く繋がらないばかりか、福島県民の被爆体験は全く不毛に生かされることなく終始してしまいかねません。

つまり、「チャンス」の源泉である「ピンチ」は、時間軸に応じて希釈されると考えるべきでしょう。「ピンチ」には、“賞味期限”があるのです。その期限を過ぎてしまえば、そ

れが「チャンス」に発展する確率がぐんと低下します。真摯に要因分析と対応策の検討を実践させる原動力としての「体感実感」が希薄化してしまうからです。

また今回の原発事故の要因分析としては、東京電力組織内部にばかり目を向けるのではなく、なぜ原発一辺倒のエネルギー政策が実施されてきたのか、そしてそれを傍観してきた多くのマスメディアの在り方や国民の意識に至るまで、広範に及ぶ検証が不可欠であると私は認識しております。畑村氏は、2005 年の 4 月に起きた「JR 福知山線脱線事故」の本質的な原因を「利便性を追求する社会にこそ責任はある」※2 と断じていらっしゃいます。原子力政策に偏向したエネルギー政策を取らざるを得なくしてきた数多ある要因を洗いざらい俎上に載せて、要因分析を行う必要性を実感しているところです。

如上のように、「ピンチ」は間違いなく「チャンス」に繋がる貴重な源泉であることは偽らざる事実です。しかし、「ピンチ」後直ぐに、要因分析と対応策の策定を実施しなければ、その「ピンチ」は「ピンチ」のまま流されていく可能性を秘めていると言えます。少なくとも「体感実感」の十分存在する期間に、要因分析と対応策の検討が求められるのでしょう。当法人でも、苦情や事故は法人の“宝”であると認識し、要因分析と対応策の検討を非常に丁寧に実施しているところです。が、どうやらその際の要諦は、その日に起こった苦情や事故はその日のうちに要因分析と対応策の検討を実施することにあるようです。

※1 畑村 洋太郎氏『だから失敗は起こる』NHK 出版 P.10-11 2006 年 8 月

※2 畑村 洋太郎氏『だから失敗は起こる』NHK 出版 P.80 2006 年 8 月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

新たな拠点そして仲間と

2011/06/24 12:00:00 [社会福祉](#)



4月1日に開設した地域福祉センター鹿川の懇親会に参加してきました。地域の絆では、一番新しいセンターで、勢いと活気の溢れる職員さんが揃っています。

思えば、2006年11月に地域福祉センター仁伍を開設して以来私は多くの仲間に恵まれてきました。当初は職員が一人でも集まるのか、クライアントに認められることが出来るのか、何も確信の無い状況で、理念と信念だけを信じて走り出したことを今でも鮮明に覚えております。とても不安な毎日を送っていました。

今や総勢90名の仲間と共に仕事をすることができております。そして、その仲間は全て地域の絆の理念に対する共感者でもあるのです。

そんなことを今日の懇親会を通して感慨深く思い浸ることが出来ました。1年前までは出逢うことの無かったそんな仲間と、この様に酒を酌み交わし大声で笑い合える。この上ない幸せ、そして喜びです。

若い元気な職員さんが多いのが地域福祉センター鹿川です！



地域福祉センター鹿川最寄りのお寿司屋さん



大変お騒がせして申し訳ございません。開設の際の恩人にも再開することができました。

有難いことです。

[この記事にコメントする](#)

[コメント\(0\)](#)

「風評被害」という言葉

2011/06/22 12:00:00

[社会全般](#)



東京電力の原発事故で、福島県産や茨城県産の農作物や水産物が売れない被害が生じています。その際、必ずと言ってよいほどマスコミが使うのは「風評被害」という言葉。これは、原発推進メディアも反原発メディアでも同様に使われているようです。

「風評被害」とは一般的に、根拠のない噂によって受ける被害であると言われています。もちろん基準値を下回る作物が売れないのは、根拠のない噂のせいかも知れません。しかし、その基準値が、「ただちに健康に影響が出るものではない」といった曖昧模糊としたものであったり、完全に危険ではないもしくは安全であると断言できない不確定な根拠に基づくものであった場合、それは全て根拠のない噂として処理されるべきなのでしょうか。

例えば、予防原則に則れば、安全が証明されなければ危険であると認識されますが、日本の安全基準は危険が証明されなければ安全であるという基準に依拠しているのではないのでしょうか。であれば、そのような甘い安全基準に依拠した基準値をどこまで信用したらよいのか不安は尽きません。

そう考えればこれは本当に「風評被害」なのか？と私は思うのです。そして、仮にこれを「風評被害」と言い張った際、誰が損をし誰が得をするのでしょうか。

基準値を下回っていても売れないのは、国民の認識不足であって、情報提供の不正確さにある。だから、その責任の全ては東京電力であったり、政府が担う必要はない。これは「風評」による被害であって、原発事故による直接的な被害ではないからだ。このような理論がまかり通ってしまう可能性があります。

基準値を下回っていれば、本当に安全なのでしょうか。そこに明確な根拠が示せない以上、これは「風評被害」ではなく、真なる原発事故被害と言えるのではないのでしょうか。つまり、全ての被害は東京電力と政府が補償すべき産物なのです。

安全が証明されていない作物を誰も購入などしたくはありません。それを国民が購入しないのは、国民の認識不足であり、それが「風評被害」であるという理論。あまりにも無責任で、厚顔無恥としか言いようがありません。

今更敢えて言うまでもありませんが、福島県産や茨城県産の作物を購入することがいけないと言っているのでは断じてありません。これは「風評被害」などではなく、原発事故被害であり、この政府やマスコミが喧伝する「風評被害」に対しても、政府と東京電力が全てを補償しなければならぬ対象であると強く言いたいのです。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

多様な価値を尊重できる実践を

2011/06/19 12:00:00 [社会福祉](#)



社会福祉援助技術のテキストでは、専門職実践は4つの価値にある種「翻弄」されながら存在している旨の記載が目立ちます。4つの価値には、①専門職の価値、②専門職個人が持つ価値、③社会の価値、④所属機関の価値がよく挙げられています。そして、最も重要視しなければならないのは①であると。

当法人では、理念を創設した私自身が①を重要視していますので、①と④には理念的には整合性が存在します。もちろん実践レベルにおいて、様々な齟齬が生じることはあるものの当法人の職員さんは、4つの価値に板挟みになるのではなく、3つの価値に「翻弄」さ

れることになります。その意味においては、専門職として若干恵まれた環境にあると思われますし、そのような環境を法人としても作っていきたいと思っております。

しかしながら、ここでお伝えしておきたいことは、更にひとり一人に応じた多様な価値があるという認識です。過日から書いている原発の問題も、教育現場における偏差値システムも然り、電磁波の問題もそうでしょうが、まるで一つの価値しかそこに存在しない社会は実は脆弱であることはもはや自明の理ではないでしょうか。多数派の意見が実は必ずしも正しくはないことを原発の問題は顕著に示していますし、それは資本主義社会の力学的必然の帰結としての自明であると自身は考えています。

であれば、これからの社会構築は少数派の多様な意見を尊重するものでなければならぬと自身は思います。それが社会福祉専門職の取り組むべき実践であるとも日々考えております。

因みに、冒頭の価値には一つ大事な価値が抜け落ちています。クライアント個人が持つ価値です。多様な価値を尊重する中に、この価値の尊重は欠かせません。自身の価値を尊重せぬ専門職にクライアントは信頼感を抱くことは無いからです。

しかし、これが意外に難しいのではないのでしょうか。地域の絆の職員さんの実践を見てもそのように思います。私たちは、専門職として「こうあるべきだ」「○○しなければならない」という思い込みや先入観を強く持ってしまうのではないのでしょうか。例えば、クライアント同士が喧嘩をするのは止めて頂いた方が良く、糖尿病の方は甘いものを食べてはいけない、日中は離床を促進し座位を保たなければならない等々。どれも専門職として尤もらしいご意見として聞こえてきますが、そこには個別性が必ず存在するはずですし、これは専門職の思い込みに過ぎないことの自覚も不可欠です。

私たちは親子喧嘩や夫婦喧嘩をよくするものです。喧嘩を忌み嫌う方もいれば、それはコミュニケーションの一環だと思ってする人間も存在します。実は私は後者の人間です。糖尿病のクライアントは、甘いものが大好きだからこそその病気に罹ったのだとすれば、紋切り型に甘いものを食事から排すればそれはその人らしさの喪失にも繋がる実践にもなってしまいます。日中の離床はリハビリテーションの観点からは重要かも知れませんが、その日は一日一人で横になってボーッとしておきたい日もあるでしょう。私にはあります。

毎日外出に行かれるクライアントは、「徘徊」という BPSD ではなく、それを自身の日課として行動されているのかも知れません。「徘徊」は良くないというのは、専門職の傲慢な思い込みに過ぎず、クライアントにとっては自身の思いの一つの表出方法を実践している

に過ぎぬこともあるでしょう。

何が正しくて、何が間違っているかは非常に難しい。であればこそ、その困難と向き合いながらも私たちは日々悩み・苦しみながらクライアントと向き合い、実践するしかありません。そこから逃げて、私たちの価値観でクライアントを押し量り、対応した方が、分かりやすく簡潔であるかも知れません。しかし、そこで悩むからこそ、私たちは発展し、専門職として大成していくのではないのでしょうか。少なくとも自身はそうありたいと日々思っております。

『淋しい人ね』老若男女を問わず、判でおしたようにこう言う。それを聞いているうちに、私は大きな違和感を覚えていた。確かにあの男は奇妙だった。だが、彼が淋しいかどうかは他人にはわからない。

人は人を『淋しい』と断定したがる。たとえば孤独死した人を、子供のいない夫婦を、孫のいない人を、過去の栄華とは遠い暮らしの人を、等々だ。つまり、ステレオタイプの『幸せ尺度』から外れている人を、『淋しい人』と鼻高々に断じたがる。

確かに、本人が望む生活と現在が違っていれば『淋しい』もあろうが、世の『幸せ尺度』に外れていても、本人は幸せという場合も多かろう」※。

※内館 牧子氏「あすへの話題」『日本経済新聞』（夕刊）2011年6月18日

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

人文無き科学の膨張

2011/06/14 12:00:00 [社会全般](#)



昨日「ディープピープル」※というNHKの番組を拝見しました。気が付けば、NHKの

番組はよく見えています。ニュースは別として、ドキュメントや企画物ではジャーナリズムの視点が存分に盛り込まれた優れたものが多い様です。

人型ロボット開発者の第一人者のお三方の議論をお伺いし、人文無き科学の不毛さを痛感致しました。高西氏はロボット技術の発展とともに、人類がそれに依存することの危険性を指摘しましたが、他のお二人はあまりその脅威に思いを馳せることは無い様相でした。

お掃除ロボットがあれば、掃除をする必要はありません。介護ロボットが普及すれば、高齢者の介護は人間が行わなくても良いのかも知れません。“臭い”ものに蓋をし、“無駄”な営みを省くことが出来るのでしょうか。しかし、そのことを通して、人類が成熟するとは到底私には思えません。人が生きるということ、社会生活を送るということは、非効率で、一見無駄な活動の繰り返しであり、そこに人生の尊さがあると私は考えています。

お一人の研究者は、(我々の)技術革新を社会がどのように捉えるかは、社会に任せればよい旨の発言がありました。本当にそうなのでしょうか？科学者は黙々と技術革新を図り、それを社会に提示すればそれだけで良いのでしょうか？

我が国、我が郷土の広島と、長崎に投下された原子力爆弾を開発した研究者は、この結果に対して無責任でいられるのでしょうか？ただ単に私は技術開発をしたに過ぎないと…。私はそうは思いません。

科学者は、その科学技術が社会の中でどのように用いられるのか、その功罪を想像した上で、技術開発を行う責務があるのではないのでしょうか？その様な使命感を鑑みず、単なる目先の技術革新を無責任に実践するだけであれば、科学者としては存在し得るのかも知れませんが、少なくとも知識人としては失格であると私は認識しています。

真の知識人とは、社会構造を捉えた上で、全ての人々が幸せになる行動を、勇気をもって行動することのできる人間であると私は理解しています。つまり、無用な犠牲を人類に生じさせない勇気ある行動を取ることが出来るのが知識人であり、その実践によって自身の生活に困難が及ぼうともそれを克服する勇気を持つ人がそれであると私は認識しています。

社会的使命や責任を全うすることに依拠した実践を成すことが出来ることが、知識人の必要条件となると思うのです。

※石黒 浩氏・高西 淳夫氏・小菅 一弘氏「ディープピープル」NHK 総合 2011 年 6 月

13 日（月） 22:00～

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 26 / 57

NHK の番組収録

2011/06/12 12:00:00 [社会全般](#)



本日は NHK の収録に参加させて頂きました。6 月 3 日は広島ホームテレビ『J ステーション』で、地域の絆の実践を取り上げて頂きましたし、取材を受ける形では幾度とテレビには出演させて頂いたことはあるのですが、スタジオ収録は生まれて初めての試みでした。

エネルギーに関する討論番組でしたが、多くの参加者がいらっしゃる中、毎回挙手をしても発言の機会はずっと回って来ませんでした。仕方がないですね。

それでも、以下の考えを吐露することが出来ました。

①原子力発電の推進には、反対である。なぜなら、一部の犠牲の中で“発展”する社会構造に依拠したものだからである。東京という大都市の電力の供給を行うために、福島の住民の危険を冒し、現在事故の収束作業を最前線で行っている労働者の犠牲の上に、福島原発は何とか安定している。この様に、多少の犠牲はやむを得ない社会から、多少の犠牲も許さない社会構築へと舵を切るべきである。

②研究職によって、非常に大きく見解が分かれている。今日の両先生も同様に。研究職によっては、今すぐに原発を停止しても国民の生活基盤に影響を与えない電力量の確保が出来るという方もいらっしゃる。つまり、計画停電そのものが不要だったのではないかと

も言われている。政府や電力会社にとって都合の良い情報が流れ、情報操作を受けていることも十分に考えられるので、我々は猜疑心をもって情報を吟味する必要がある。

③太陽光発電はなぜ普及しないのか？原子力推進ありきの政策の中で、売電料が低く設定されているのではないのか？だから設備投資費用が容易に回収できない構造になっている。政策的に太陽光発電を促進するのであれば、売電価格を高く設定する必要がある。

④選択肢としては、自然エネルギーの技術開発を促進して脱原発を図るのか、自然エネルギーの開発が促進される政策に切り替えることで脱原発を目指すのかにある。私はもちろん後者に依拠する。現在、電力の開発費用の 9 割以上が原子力発電に費やされており、自然エネルギーの開発には数%の費用しか投入されていない。普通に競争すれば、原子力の推進力の方が強いに決まっている。そのバランスをまずは、政策的に変革するべきではないだろうか。その意味において、原子力政策と自然エネルギー促進の関係は表裏一体の関係と見るべきである。

⑤推進派と反対派の両立した第三者機関で今後の方向性を決めるのは良いことのように見えるが、バランスの良い配置であれば、結局は現状維持で終わってしまうのではないだろうか？現に原発を維持しているわけだから、原発を維持した状況のまま収まってしまうのではないのか。つまり、この問題は原発をやるのか、やめるのかを明確にしなければ解決しないのだと思っている。それは、政治的リーダーシップの中で行うべきことである。

⑥私は学生の頃から反原発の立場であった。震災前までは、反原発を唱えるだけで村八分になりそうな社会情勢があったが、今では NHK の番組でこの様な自由闊達な議論が出来るようになってきている。正しい情報をもとに、この様な民主的な議論が担保されれば、この国は正しい方向に動いていくはずだ。期待を寄せている。

思い出すことが出来るのは如上の発言でした。収録番組ですから、状況に応じて発言はカットされることでしょう。さて、どれとどれがカットされるのやら。

放映は 6 月 17 日（金）19:30～20:43 に行われる予定です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

創造性を発達させない学び

2011/06/11 12:00:00 [社会全般](#)



6月8日（水）の22時25分～22時50分放送のNHK『仕事学のすすめ』（出演：川口淳一郎氏（「はやぶさ」プロジェクトマネージャー）・聞き手：勝間和代氏）を拝見しました。

ビールを片手にほろ酔い状態で、テレビのチャンネルをクルクル回していた際、終盤を拝見したのですが、そこではオリジナリティについての議論が展開されていました。

川口氏によれば、オリジナリティは文献等の他者からの情報からは生まれないのだそうです。オリジナリティを発揮させるためには、最低3ヵ月間他者の文献等に目を通さずに、他者の意見を聞かずに、自分の内にある思考を絞り出して構築する作業が必要なのとか。入社したての若者にもそのことをまずは求めるのだそうです。

そこで一つの疑問が湧き上がってきました。では、文部科学省のカリキュラムに則った大学までの勉強は一体何だったのでしょうか？そもそも学びとは、社会をより良くするために、あらゆる人々が幸せになるために、そのための方策や理論を学ぶべきものでしょう。そこには一つの答えなどなく、創造性と独創性がその過程において、必要不可欠なのは自明の理です。つまり、創造性や独創性の無い学びなど、全く不毛なものだと私は認識しています。

であるにも拘らず、大学を卒業したての新卒者に創造性や独創性を改めて教育せねばならぬとは全く解せません。私が受けたニュアンスとしては、むしろ大学までに受けてきた教育の在り方を改めさせるため、そこから脱却させるために、川口氏はその様な指導を行っているのではないのでしょうか。

であれば、文部科学省の教育下では、真に「有能」な人材は育成されないことになります。創造性や独創性こそが国際競争社会で生き残れる重要な指標であると私は考えています。ゼロから物事を生み出すことのできる力、既存の選択肢を時に全て却下し、新たな選択肢を構築する力、この様な力が組織や社会を動かすためには必要不可欠となるはずです。独創性や創造性とは、「普通」や「常識」、「公理」から脱却した新たな考えや理論を構築す

ることだと私は認識しています。その為には、「普通」や「常識」に捉われない自身の考えや思いに真摯に耳を傾ける時間と機会が不可欠であることは言うまでもありません。少なくとも大学においては、そのような真なる勉強が行われるべきだと私は考えます。

もちろん偏差値教育下では、独創性や創造性が培われないことは常識的に言われていることだと認識しています。記憶をインプットし、アウトプットする能力を高める学習方法でしか、好成績を修めることができない代物ではないでしょうか。しかし、その似非勉強は大学入学時に終焉するものだと私は思っていました。

この度問題だと強く感じたことは、川口氏のお話をお伺いするに、その似非勉強がどうも大学のカリキュラムにまで浸透しているかも知れぬという事実でした。

自民族の誇りを持ち、国際社会での立ち位置を確立するべく人材は、記憶のインプットとアウトプットではまず育成出来ません。その意味において、今後現在の偏差値教育の在り方は変革を強く求められることになるでしょう。少なくとも、大学での教育は、自身の考えや思いに耳を傾け、そのことを確立するためのものでなければなりませんし、自分の考えや思いを他者に吐露し、その理論に一定の責任を持つことまで出来て始めて最低限の学びが成されたことになります。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

こうなったのは一体誰のせい！？

2011/06/07 12:00:00 [社会全般](#)



今になって菅直人首相の退陣論が激しく表出している世論。東日本大震災への対応の不備や、政治的リーダーシップの不足において、マスコミからも退陣論一色の報道がなされています。この重要な局面で、またもやトップの交代、そして、ここ数年短期間でコロコロ

とトップが交代する国際的信用度の凋落。官僚が悪い。政治家が悪い。そして、政府が、首相の能力が不足している。全く好き勝手な議論が取り沙汰されています。

政治家、官僚、政府の要職についている人間と私たち一般市民の人権は異なります。これは民主主義の基本的な考え方に則れば、彼らに人権は狭く私たちに広いの「常識」的な見解でしょう。つまり、現在の社会における閉塞感を生み出した直接の張本人は彼らであることは間違いありません。

そのことを大前提としながら、私は思うのです。この社会を構成しているのは彼らだけであって、私たちは全くそこに参画していないのか、と。官僚がいけない。政治家がいけない。政府がいけない。それは誰もが共感する事かも知れません。しかし、その社会を私たちひとり一人が構築していることを考えると、市民の責任も皆無では断じてないはずです。ましてや、政治家は選挙によって私たちが選択することができるのです。誰がこの政治家を選択したのでしょうか。そして、非常に低い投票率の中、組織票で出来レースのように決まってしまう選挙に誰がしたのか。民主主義社会において、選挙に行かないことはその否定に繋がることは明らかなですが、多くの国民は投票活動を拒否しています。

マザーテレサは言います。愛の反対は憎しみではなく無関心であると。そう鑑みれば、市民の無関心が、この国のトップの無能さを誘発しているとも言えるのではないのでしょうか。

菅総理を挿げ替えれば、多くが上手くいくとは到底思えません。なぜなら、本質的な課題は、私たち市民自身が背負っていると私は考えるからです。その国の国民は、自らの民度を超える政府を持たないことは、もはや自明の理なのです。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

他者の実践と思考から教えを乞う

2011/06/06 12:00:00 [社会福祉](#)

第19回日本社会福祉士会全国大会・社会福祉士学会（京都大会）の二日目は、分科会から始まりました。私はD分科会「地域支援」に参加をさせて頂き、多くの実践事例に触れる中、気づきや学びを何点か頂くことができました。この様な場は自身の学びの場で、極力質問をさせて頂く中で、学びを深めるように心がけております。

まず一つの視点として、小規模多機能型居宅介護の現状と課題についてのご発表がありました。利用者にとって、慣れ親しんだ環境がつかれるか否かが、その運営の成否であることを認識することができました。また制度上の課題も浮き彫りになっており、この辺りも再認識させて頂いた次第です。

私の方と致しましては、昨日の湯浅氏の言葉にならって、「制度の守り手」に甘んじるのではなく、行政と利用者と事業所でローカルルールを作っていく実践が求められているのだと認識し、そのような事例が無いかご質問させていただきました。小規模多機能型居宅介護の良いところは、厚生労働省令に細やかな守るべき基準が明示されていないことにあります。つまり、保険者と利用者、事業所が、市民にとって有益なシステムに変えていくことができる素地があるわけです。なので、既存のルールに縛られることで不満を表出するのではなく、ルールを守ることによって機能不全に陥るのではなく、それを逆手にとって、ルールを変えていく、システムを変革する実践が求められていると思っております。それこそが、ソーシャルワークに基づいた組織運営に繋がるのではないのでしょうか。質問させて頂いたからには、自らの実践の戒めとさせて頂きたく存じます。

また、社会資源の創出の実践についてもご教示いただきました。多様なニーズに多様な社会資源を創出した実践で、その実践内容に触れ感服致しました。これは、地域の絆でももがいていることであり、中々一筋縄ではいかない現状があります。

社会資源の創出をするためには、まず、クライアントや地域住民のニーズをもとに行わなければなりません。そこで、一つの課題は、地域住民のニーズをどのように把握するのか。その方法論が難しい点にあります。そして、もう一つの課題として、色んなニーズが抽出されていく中で、どのニーズを仮説的・暫定的に、ニーズと定めるのか、という問題があるのです。もちろん、やってみないと分からないところがあるのですが、仮説的に暫定的にニーズを特定しなければ、社会資源の発掘・開発・創出には繋がらないと考えております。この辺りの実践のヒントを頂けたと感謝しております。

地域福祉計画に基づいた個別支援と地域支援の実践研究では、個別支援と地域支援の実践の中から、地域福祉計画では挙げられていない地域課題を認識することができたとご報告がありました。素晴らしい実践であると感銘を受けました。

そのことについて、市町村全域の地域性と、その圏域内であっても管轄地域の地域性は異なるものだと認識していますので、地域福祉計画におけるニーズと、担当地域におけるニーズに齟齬があるのを前提として、その理由を質問させていただきました。①行政がより深くニーズを捉えることができていなかったのか？②行政と発表者の捉えている地域性

に齟齬があったのか？

そのご回答は、地域福祉計画の策定委員の専門性によって、抽出されるニーズが異なっているのではないかとのことでした。なるほどまさに、ニーズは捉え方によって変化するということなのだと認識した次第です。捉える専門性によって、捉えるニーズは変わってくる。捉え方によって、ニーズの抽出精度は変化するということなのでしょう。やはり、実践の中においては意識化や意図した実践を展開しなければ、私たちの知りたい情報や思いは捉えることができないのだと認識致しました。

午後の基調講演では、大阪大学総長の鷲田 清一氏をご登壇されました。最も感銘を受けたのは、出来ることと出来ないことの関係性についてのお話しでした。

鷲田氏によれば———今の社会では、何かが出来ないということは、マイナス点ではない。出来る方から見たら、出来ないことはマイナスかも知れないが。出来ない方から、出来る方を見た場合。出来ない仕組みの方が見えてくるのではないか？出来ないことを出来ない方から考えることで、その仕組みの方が見えてくる。

援助は、出来ないことを出来るようにすることはもちろん重要なのだが、さらに重要なのは、出来ないことを出来ないことにさせないことではないか。出来ないことを出来ないこととなくすることではないか———とのことでした。

クライアントが生活課題を抱えている際、それはなぜできないのかをクライアントの側から見ることで、出来ている側（社会）の課題が見えてくるということでしょう。そして、出来ないことを出来ないことにさせないとは、そのように社会が条件整備をおこなうことで解消することが第一義であると自身は認識したところです。要するに、「出来る」「出来ない」は飽く迄「出来る」側の視点で分別されているので、「出来ない」側からの点検も必要であるとのこと指摘ではないでしょうか。

また、———出来ないことを出来ることに変える道と、出来なくなることで初めて出来るようになることのシーンが開けてくる道もあるのではないか？「出来る」を基準に考えると、出来ないことを欠損と捉えてしまう傾向がある。すると援助者は、出来ないことに対してしてあげるという視点になってしまう。“欠損”のある方に対して、援助者は、してあげる立場なのだろうか？出来る人が出来ない人を、強い人が弱い人を支援する立場で考えられがちだが、そのような一方的な関係は殆どない。ケアの反転が現実では沢山おこっているのではないか？———ともおっしゃられます。

分刻みで多忙な職務の中で、グループホームの玄関でご利用者と顔を合わせる時間があ

ります。何気ない一声を掛けられ、そして、その緩やかな時間の流れの中で、自身が癒されているのを感じるが多々あります。ケアをする立場の者が、実は、ケアをされている現象がここにあるのです。その様な多様な関係性が存在する社会こそが、健全な社会と言えるのでしょう。

多くの志高い実践者の実践内容に触れ、古参の研究職の教えに触れる中で、また一つ二つの大きなヒントを得ることができたと感謝しております。本ブログは、時にはこのように自身のためのメモ書きとしても機能しております。今日感じたことをありのままに、吐露しておいて、少し時間を空けて再読する。同じ文脈を捉えていても、その文脈から取り出せる内容は、もちろん私の成長度に応じて異なります。ですので、数年たって本文を読んだ時、きっとまた違った内容を取り出すことができるのです。

もちろん、私が成長していればの話ですが…。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

ソーシャルワークの条件

2011/06/05 12:00:00 [社会福祉](#)



本日から第 19 回日本社会福祉士会全国大会が京都で開かれています。全国大会へは久しぶりの参加をさせて頂きましたが、その参加者数の多さに驚かされました。流石全国大会です。

多様な講師陣が登壇されましたが、最も印象に残ったのはやはり、湯浅誠氏の講演でした。湯浅氏の思想や立ち位置自体に元来共感を覚えている若輩ですので、お話の内容は全て腑に落ちるものでしたが、中でも以下の 2 点はなるほどと再認識をさせて頂くことがで

き、深く感謝しているところです。

一つ目は、夢を見るためには、頑張るためにはそのための条件の整備が必要であるというお話です。夢を見るためには、誰もが総じて、努力すれば夢や目標に到達できる可能性を担保する条件が必要なのだと言うことです。社会がそれをせずして、夢を見なさい、頑張らなさいと子どもに言うのは酷であるとおっしゃられていました。

いわゆる自己責任論に対する反論です。「女性が差別されるのは、女性の努力が足りないからだ。女性はもっと努力すべきだ」という理論をテレビで展開していた評論家が、厚生労働大臣になったことのある国です。自己責任論は、我が国の社会構造に根深く存在しているのではないのでしょうか。障害者の生活の質が高まらないのは、障害者の努力が足りないからだ。母子家庭が生活苦なのは、簡単に離婚してしまったからだ。この様な少し頭を働かせば、その欺瞞性を見抜けることのできる理論が蔓延っているのではないのでしょうか。

障害者や女性に圧倒的に不利な、社会構造を作っておいて、その生活の質が低いのは自らの努力が足りないからだと喝破する論理。そして、当事者及び社会全体がそのこと信じ、当事者のパワーレス状態が生じているのが社会福祉の現場なのだと私は認識しております。

もう一つは、制度の狭間にいる人たちの支援が出来ない現状に対して、その様な課題を解決していくことが社会福祉士の役割であること。制度の守り手だけになるのではなく、外を見て、ソーシャルワークの力を強め、社会に働きかけ、個人にも働きかける。ひとり一人の頑張れる条件をつくっていく役割が求められているのだとおっしゃられます。

そうです。私たちは、制度の守り手の立場を享受するのみがその使命ではないはずです。クライアントの側に立ち、その制度がクライアントの利益に繋がるよう適宜点検を行い、状況に応じて変更への提言を行うことがその仕事となるはずです。現実的には、基礎自治体等でなされているローカルルール程度のものは随時変更するよう提言することがその仕事となるのではないのでしょうか。

法令遵守はもちろん重要ですが、そこに必要以上に縛られて硬直化した実践をするのではなく、時に制度やルールを変える提言を行っていくことが私たちにしか出来ぬ実践なのでしょう。その意味において、湯浅氏の実践はまさにソーシャルワークそのものでした。社会福祉士ではない、またその専門教育を受けていない湯浅氏がソーシャルワークの実践を行い、社会福祉士で、専門教育を受けている私たちがその実践を怠っているとすれば、これほど恥ずかしいことはありません。

問題なのは、その彼の話を聞いて、恥ずかしいと思えた参加者が何人いたのか、また、自らの実践とは少し違った分野の実践であると他人事に捉えてはいないか、にあるようです。話を聞いて、恥ずかしいと感じ、ソーシャルワークの役割に危機感を抱くことができれば、私たちの実践に明日はありません。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 27 / 57

『まちづくりとしての小規模多機能ケア』

2011/06/04 12:00:00

[地域密着型サービス](#)

『小規模多機能ケアに求められる人材マネジメント②』

小規模多機能型居宅介護（以下「小規模」）経営の要諦は人材マネジメントであり、その中核を成すのが人材育成である旨前回ではお伝えしました。今回は「地域の絆」における人材育成の取り組みについて叙述してみたいと思います。

当法人では、内部研修を定期・不定期に開催しています。事業所ごとに週1回30分の開催と法人で不定期に研修会を開催します。現在は不定期開催の法人研修ですが、12月からは法人本部に職員研修室を設けましたので、来年度から年間20回以上の研修を計画的に実施する予定です。事例検討や、職員個々のスキルに応じた個別具体的な学習は事業所ごとの研修に委ね、法人職員として専門職として必要不可欠な一般的スキルの向上を法人研修の目的としています。開催時間については、事業所ごとの研修は平日のお昼に時間を取り、なるべく多くの職員が勤務時間内に参加ができるよう配慮しています。その間利用者への対応が手薄になることは否めませんが、利用者に対する良質なケアを実践するために必要な時間であるとの認識で取り組んでおります。利用者に対するレクリエーションやアクティビティ同様に大切な時間であると私どもは認識しているのです。週に1回30分はそのような時間を頂いております。一方法人研修では、平日の夜間行うことが多く勤務の時間内における参加が難しいのが現状です。今後はDVDによる聴講や、日中時間における開催等の調整を検討しているところです。

研修内容は、組織性と専門性の双方の指標を持って検討します。組織性とは、組織人と

して社会人として必要なスキルを指し、専門性とは、福祉専門職として介護職として介護支援専門員として不可欠なスキルを指します。組織性では、社会人としてのマナーやルール（ハウレンソウ・挨拶・メモ・電話・名刺交換等）の履行から、組織内における業務改善の実施や、経営者の立場に立った判断や処理に至るスキルが具体的には求められます。専門性においては、利用者の尊厳保持の理解から、基本的な介護技術の習得や、BPSDへの対応方法、地域における専門職教育の担い手に至るスキルを求めています。従来の専門職教育においては、専らこの専門性だけが注目を集めてきましたが、チームケアや家族支援の視点が重視されている昨今では、組織性の向上も欠かせません。「地域の絆」では双方の研修をバランスよく実施することを心がけています。ただし、専門性の方がどうしても手間と時間を要しますので、専門性 8 に対して組織性 2 の割合でバランスを取っているところです。

また、私たちは人材育成の有効性を発揮させるため次の 3 つの視点を大切にしています。

①採用が育成の肝要であること、②モチベーションを高めるのはビジョンであること、③評価は、育成のためのものであり、処遇のためのものではないこと。

①については、理念に共感し、意欲があり、思いやりのある方の採用に時間を要します。面接時間を 1 時間と筆記試験（一般常識と事例問題、心理テスト、理念の黙読）を 30 分、計 1 時間 30 分から 2 時間程度のお時間を頂き、時間をかけて選考させていただきます。またその場での即答は避け、最短でも 3 日後に採否の通知を出すようにしています。これは、理念に共感を示さず、意欲や思いやりもない人材を当法人では育て上げることが出来ないとの判断に拠った実践でもあります。しかし、考えてみてください、皆様方の職場でそのような人材を育成される自信がおありでしょうか？介護の職場は人手不足です。ですから、率先して採用したいと思えない人材を採用せざるを得ない状況があるわけです。そこで、選球眼を凝らして、ぐっと我慢して選別できるかが、後の人材育成における成否を分けることに繋がるのではないのでしょうか。私は、法人の理念に共感することも、意欲も、思いやりもなさそうな人材を採用することは致しません。それは、私自身のみならず、誇りを持って懸命に働いている職員に対して失礼な行為にあたっているからです。

採否の通知についても、選考期間を敢えて設ける理由は、①選ばれて法人職員になったという矜持の醸成、②入職応募者に逃げ道を用意することにあります。採否の判断を即答されると、嬉しくないわけではありませんが、誰でも良かったのかな？と思われませんか。そうではなく、一定の選考期間が設けられそこで喧々諤々の議論がなされた結果選考された方が、モチベーション高く入職をすることが出来るのではないのでしょうか。また、ハローワークや求人票に明示されている法人情報は極僅かです。実際の採用面接場面で改めて理解することが殆どでしょう。その中で、人によっては考えが甘かったので辞退

したいと思う人もいるのではないのでしょうか。そのような方には、辞退を考える期間を設けて差し上げることも大切であると考えています。入職時のミスマッチを防ぐことが、後の人材育成の効率化に繋がるのではないのでしょうか。

②と③は、介護報酬と介護職の給与体系の問題から派生している観点です。一般企業においても、バブル期と異なり、賃金を倍増させて職員のモチベーションを高めることが不可能になっています。ましてや、報酬が決まった介護職の場合、一部の職員に対する賃金の飛躍的上昇は可能であっても、全ての職員の報酬を飛躍的に高めることは不可能でしょう。そこでは、賃金以外にモチベーションを高める何かが不可欠となるのです。それが福祉専門職としてのビジョンであると認識しております。如何にこの仕事が、社会的使命や責任に則り、社会性の高い仕事であるのか。目の前の高齢者のケアをすることによってどのような社会的意義があるのか、如何に家族や地域住民が喜んでくださっているのか、そのようなビジョンを明確に示すことが職員のモチベーション向上に繋がるものと認識しております。

キャリアパスが声高に叫ばれているのですが、賃金のための評価や育成ではあまり機能しないのではないかと自身は考えております。介護職は賃金のためだけに勉強し、評価を受けているのでしょうか。無論、そのようなケースも皆無だとは言いません。しかし、それが前面に押し出されることによって却ってモチベーションを下げる結果を招くのではないかと危惧しているところです。

先ほど申し上げた通り、賃金の向上は全面的には望めない業界です。であるからこそ、法人独自に効率的な経営を図り、それを職員に還元していく視点は欠かせません。しかし、マクロ的には限界があるのも事実です。その時、賃金以外の評価軸を用いて如何に職員のモチベーションを高めていくのが各法人に求められているのではないのでしょうか。

等級制を用いたとしても一等級上がったところで精々5,000円～10,000円程度の昇給ではないのでしょうか。金額だけを基準に鑑みれば、それに見合った仕組みを作ることは不可能でしょう。つまり、等級を一つ上げるためにこれだけ頑張らなければならないのに、賃金はたったこれだけしか昇給しないという関係性が生じてしまうのです。であれば、評価は処遇のためにあるのではなく、専門職としての人材育成のための評価であると位置づけられるべきでしょう。法人としては、あくまで個々人の人材育成を後方支援するための評価でしかないと思えるべきではないのでしょうか。職員ひとり一人の自己実現のために育成や評価はあるのです。

『まちづくりとしての小規模多機能ケア』

2011/05/30 12:00:00

[地域密着型サービス](#)

『小規模多機能ケアに求められる人材マネジメント①』



小規模多機能型居宅介護（以下「小規模」）の課題を集約すれば 3 つの視点で叙述することができると考えます。①利用者の利用頻度の調整、②中・重度の障害をお持ちの利用者への対応、③人件費高騰の問題。

①は 25 名の登録者に対する通い・宿泊サービスの定員調整の困難さを指し、それを成すためには利用者・家族に対する説明力と調整力を兼ね備えた計画作成担当者の存在が不可欠となります。②では、医療依存度の高い利用者と認知症の利用者への対応ができる専門性の高い介護職の存在が求められます。そして③においては、①②の専門性が低ければ低いほど、人手を投入しなければ対応ができなくなる現状があるわけです。

如上の課題を鑑みると、「小規模」運営の要諦は人材マネジメントにあることに気づかされます。そもそも福祉業界そのものが、商品・製品を殆ど介さずサービスを提供する業態です。すなわち、職員の皮膚の内にある専門性と組織性が、“商品・製品”であり、サービスとなるのです。この様な業態で人材育成が最重要視されるのは自明の理と言えます。その中でも、「小規模」は、それが最も強く求められている事業であると私は考えています。

そのことあって「地域の絆」では、人材マネジメント方針を掲げています※HP 参照。すなわち肝要となる育成にだけ目を奪われるのではなく、育成を中心に据えながら、求人・採用・配置・評価・処遇の方針と実践内容を掲げているのです※HP 参照。

また、人材育成の実践に当たっては、何を目的に実践するのかを明確化しながら進めることにしています。福祉業界における人材育成の目的は大きく 2 つあるはずです。一つは福祉専門職として、もう一つは法人職員としてそれぞれのあるべき姿に到達するためのものです。福祉専門職のあるべき姿としては、厚労省の示す「求められる介護福祉士像」やそれぞれの専門職の掲げる価値や倫理を実践できる専門職の育成が考えられますし、法人

職員のあるべき姿としては法人理念遂行のために必要な職員の育成が求められているはずです。しかしながら、それではまだ曖昧です。そこで、「地域の絆」においては「求められる職員像」を掲げています。法人として、どのような人材を育成すべきかを、より具体化・明確化しているのです※HP 参照。法人職員共通の像のみならず、介護職員・指導的職員・計画作成担当者・管理者・組織像といったカテゴリー毎に状態像を明記することで職員も自身の目標設定がしやすくなると考えています。

私は人材育成は組織立って行うべきものであると認識しております。利用者のケア同様、人を育てることには非常に重い責任があります。それを一人の職員に任せておいては、必ずやその職員は潰れてしまうことでしょう。個人の責任で対応できるものでは決してありません。そのことをまず組織として明示することがトップには求められるのでしょうか。本ブログではまずそのための方針例をお示ししました。

実はもう一つ重要なことがあります。「小規模」単独の法人が何処まで人材マネジメントに取り組めるのかについては大きな課題があるわけです。「地域の絆」においても県内 5 拠点の運営の中から、研修・研究センターを立ち上げ法人独自の人材マネジメントを実践する準備が整ったところです。「小規模」単独の法人であれば、法人独自の実践は決して容易なものではありません。その際に必要な 2 つの視点をここではご披露しておきます。一つは、前号でお伝えしたネットワークの構築を通しての研修が考えられます。また、事業所間での連携が取れるようになれば、相互における実習の派遣・受入も可能となります。「地域の絆」では、現在もそのような取り組みを行っているところです。

もう一つは、日々の業務を活用して育成する視点です。いわゆる OJT ですが、業務やケア場面を活用して育成に当たるのが本来の OJT です。しかしここでお伝えしたいのは、OJT のための業務を設けることにあります。私たちの実践で申し上げれば、直ぐに解決できる一つの課題について解決策を話し合うミーティングを毎日行っています。挙がってきた解決すべき課題に優先順位を付け、チームで一つに絞った課題について解決策を論じます。ミーティングの時間は毎日 15 分ですが、それを毎日繰り返すことで「考える」「問題意識を持つ」職員の育成を狙っているのです。その他、インシデント報告や苦情処理報告の書類は代表者が全てに目を通し、要因分析における不明な点や、対応策の甘さについて毎回指導を行っています。事業規模の大きくない法人では、このように日々の業務の中で人材を育てる視点が効力を発揮するものと考えます。



本日は京都に来ていましたので、地元紙の京都新聞を早朝読んでいました。ジャーナリストを志していた折、入社試験の二次選考で落ちた会社です。

「天眼」というコラムにて、大阪大学総長の鷲田清一氏の文章が掲載されていました。原発に関する記述です。「(原発の脅威を) ほんとうはすでに知っていたはずだったのだ。チェルノブイリでの爆発のとき、東海村での臨界事故のとき。いまは亡き高木仁三郎らによる再三の警告、不屈の警告にもふれていた。が、焦らなかった。それらをきちんと受けとめず、それらにしかと耳を貸すこともなく、『豊かな』電力供給に浴してきた私たち...

見えているのにだれも見えていないことがあること、そのことを有無を言わず見せつけたのが、今回の事故だった」※。

「ほんとうはすでに知っていた」「見えているのにだれも見えていない」。本当でしょうか？ 原発の脅威やその危うさを多くの市民は知っていたのですか？ では、高木仁三郎なる科学者を皆様ご存知でしたか？ ジャーナリストを志していた私は、もちろん存じていますが (私と同じく離婚歴がありであるということも知っています)、多くの国民はご存じなかったのではないのでしょうか？ それでいて、知っていたことを前提に、国民の普遍的な責任にされては少し困惑しませんか？ それは、私だけでしょうか？

申し上げたいことは、真実は、多面的な視点から捉えて初めてその把握に近づけることが出来るということです。原発の問題に関しては、CO2 を出さない、化石燃料を使わない環境に優しいという一側しか、多くの市民は知らされていませんでした。社会構造上、原発推進に優位な情報ばかりが、流されていたことが大きな側面としてあります。

物事の真実を突き止めることは、おおむね不可能な作業であると私は認識しています。ただ、それに近づく努力を人類は惜しむべきではないとも考えます。その作業に必要な視点は、社会が普遍的に「普通」や「常識」と捉えている視点から全く異なる視点へと見方を移して、社会を捉え直すことにあると自身は考えています。1億8千万人の普遍的な価値

など世の中には存在しません。その様な定義は、物理的にあり得ない代物です。「普通」や「常識」は、社会の優位的な価値規範として存在し、しかしながらそれは障害者や認知症高齢者のそれでは断じてありません。おそらく多数派のそれではないでしょう。しかし、それは真実ではないのです。真実は、その真逆の視点からも、多様な角度から見てみて、初めて理解されるものだと言輩は信じています。その視点において、「普通」や「常識」はそもそもが偏向した存在なのです。

この度の原発においては、原発ありきの多数派の情報が優先されて流された結果、原発に偏った電力設備の投資が推奨されました。その意味において、これはジャーナリズムの敗北であったと私は考えます。

私はジャーナリストとソーシャルワーカーはその実践に多くの共通項があると認識してきました。また、そのような視点で、ソーシャルワークの実践を行っています。社会が普遍的に持っている「普通」や「常識」、「公理」といったものとは、全く異なる見方や考え方があつたことを世の中に提示することがその共通項であると認識しています。社会の「常識」や「普通」は、多数派のものであつて、私たちが支援の対象としているクライアントのものではないことが殆どです。そう考えると、ジャーナリストの仕事は、多数派ではなく、少数派の声を拾い上げて世の中に伝えて行き、結果として、そのバランスの中でより真実に対する認識を社会に広めることにあると言えます。一方、ソーシャルワーカーは、生活課題を抱えていらっしゃるクライアントの視点に立ち、クライアントが自己決定を担保されながら自分らしい生活を送れるよう社会環境に対する働きかけを行う専門職です。クライアントの権利擁護を突き詰めて考える以上、社会変革へのアプローチは避けては通れぬ実践となるはずだ。

双方共に、社会の主流として扱われない人々の声を代弁し、社会変革を促進するという点において大いに共通項があると信じてやみません。100人いれば、100通りの「普通」や「常識」がある。これが唯一の正答でしょう。であればこそ、1つしかないかの如き「普通」や「常識」に揺さぶりをかけることが、真実に近づく第一歩であり、クライアントの権利擁護にも繋がるはずだ。

ソーシャルワーカーの仕事は、社会的弱者の側に立ち社会と対峙すること、変革を促進することにあります。ジャーナリストの仕事も、少数派の声を拾い上げ、それを社会に提示し、社会変革を促進することにあります。その営みを通じて、実は、多数派も自分らしく安心して生活できる社会の構築が望めるのです。

残念なのは、ジャーナリズムも、ソーシャルワークも、社会環境と対峙し、変革を促進

する視点を失いつつある点にあります。ジャーナリズムは、批判的視点を欠落させ、大衆迎合的な報道が主流になりつつありますし、ソーシャルワークにおいても、70年代の障害者運動のような社会変革に繋がる実践が減退しつつあります。「普通」や「常識」とは異なった視点や小さな声を世の中に伝えなければ、それは真実の報道にはなり得ませんし、利用者の権利擁護は、社会構造と対峙し、変革しなければその実践は完結しません。ソーシャルワーカーの仕事は、クライアントの視点から社会を点検し、改善していくことにありと自身は信じています。

真実とは何か？利用者の権利擁護を全うするためには何が必要であるのか？ジャーナリストもソーシャルワーカーも、これからの歴史の中に、名を残すことが出来るのか、それとも藻屑と消え去るのか、今その岐路に立たされているのです。

※鷲田清一氏「天眼」『京都新聞』2011年5月21日

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『まちづくりとしての小規模多機能ケア』

2011/05/15 12:00:00 [地域密着型サービス](#)

『事業所外連携の在り方～ネットワークとまちづくり～』

比較項目	A市	B市
人口規模	約47万人	約10万人
会長	介護老人保健施設 施設長	「小規模」代表者
事務局	「小規模」事業所	「小規模」事業所
ネットワークの対象	地域密着型サービス 地域包括支援センター	「小規模」事業所
会則の有無	無 設立趣意書と世話人名簿のみ	有
会員制の有無	無 研修及び交流会には対象事業所で あれば誰でも随時参加可能	有 全対象事業所が加入
会費	無	年会費事業所毎に10,000円
研修参加費	研修は1回につき1人1,000円	無料
研修に対する 行政の参加	時折有	時折有
会議の回数	年3回程度 世話人会を開催	年5回程度 管理者会を開催
研修の回数	年6回程度	年4回程度

「地域の絆」における共生ケアの実践はネットワークを拠り所としている旨前回ではお伝えしました。小規模多機能型居宅介護（以下「小規模」）が事業所外ネットワークを構築することによる利点としては以下の 5 点を挙げる事ができるでしょう。①運営内容・方法の情報共有②効果的で良質な利用者支援③職員のストレスマネジメント④圏域内におけるサービス・ケアの質の担保⑤地域課題の把握と対応。前号でお話ししたネットワークを駆使した共生ケアの営みは⑤を意図した実践であると言えます。

制度化されて 5 年に満たない「小規模」の実践は漸く大まかなイメージがつかめた段階ではないでしょうか。個別具体的な実践であったり、今後の長期に及ぶ展望についてはまだ議論の分かれているところです。そんな中、他の事業所がどのような実践を行っているのかは実に興味があるところで、良い取り組みはお互いに情報提供を行い、悩みについても互いに助言し合える関係が不可欠かと思われます。日常的なこれらの連携は、同じ行政指導監督下にある市町村内でなされれば不安の解消はさらに促進されるでしょう。また、事業所の特色を互いに認識することで、利用者の受入・紹介について利用者のニーズにより即した形での対応が可能となります。そのことが延いては、③④の成果を生み出すことに繋がります。

「地域の絆」では、広島県内 2 つの市内で小規模多機能ケアの実践を行っており、双方における「小規模」職員を対象にしたネットワークづくりに関わっています。1 つは事務局として、1 つは会長職を拝命して組織運営に係る活動をさせていただいております。また、広島県内にはこの他同様のネットワークが 2 つあると聞いています。以下、私たちが関わる 2 つのネットワークについて創設概要と運営状況について叙述します。

まず A 市での取り組みですが、こちらは当初より「小規模」のみのネットワークとしてではなく、地域密着型サービスと地域包括支援センターのネットワークとして創設されました。地域密着型サービスが創設されて約 1 年後に 2 名の発起人名にて、市内の全事業所に結成会議への参加を呼びかけたところ 80 名程の方の参加がありました。如上の①～⑤におけるネットワーク構築の重要性を訴えたものの、具体的な提案は敢えて行わず、皆さんで創り上げていきましょうという姿勢で臨んでいます。その場で事業種毎に 2 名ずつの世話人を選出してもらい 8 名の世話人会を結成しました。また、皆さんで選出したこの世話人を中心に組織運営を進めていく旨承認いただき、以後世話人会を中心とした組織運営が始まります。

このネットワークの特色は、非常に緩やかな繋がりであるという点です。設立趣意書と役員名簿があるのみで、組織の会則を設けていません。また事業所を対象とせず、そこに勤めている職員個人を対象としていることも特徴です。事業所を対象にしてしまうと、規模が大きく力のある事業所が中心となってしまう兼ねませんし、そうすると個別の事業所同士の関係性に会の運営が左右されることになってしまいます。その様なネットワークには多様性は生まれず、すそ野を広げた幅広い方々の参加が望めなくなります。それを避けるために、事業所単位ではなく個人単位で参加する体系を取っているのです。

よって会議・交流会・研修等の参加については、市内の全対象事業所に案内を発送しています。つまり、会員・非会員の区別もないのです。市内にある全ての対象事業所に呼び

かけを行い参加したいと思われた方は、どなたでも参加することが可能です。その様な民主的組織運営を大事にしているのがこの会の特徴と言えるでしょう。

年度によっても異なりますが、平均すると年 6 回の研修と年 2 回の交流会の場を設定しています。毎回の参加者数は、研修等のテーマにもよりますが、60 名前後の方に参加頂いております。テーマによっては、行政職員や民生委員に参加を呼び掛けることもあります。例えば「運営推進会議の進め方」と題したディスカッションでは、冒頭 30 分程度で市が望む「運営推進会議のあり方」について市職員よりご講義いただき、その後グループワークでディスカッションを行う際にも、各グループに市の職員に入っていたいただいたこともございます。この様に会の催しを通して、ネットワークがつくられて行くことを実感しています。

「小規模」運営の要諦は人材育成であると私は考えておりますが、単独型の「小規模」で人材育成を実践することは人手と時間、経費の関係上非常に困難を要します。そこでその様な事業所がネットワークを組んで相互研修を行う動きも全国的に広がりつつあり、私たちの実践はまさにそのことを狙った実践であると言えます。特に実地指導等で指摘を受けるであろう項目（「身体拘束廃止」「虐待防止」「良質な認知症ケア」「地域との連携」等）に係る研修を行うことは単独型事業所の負担となっているため、会の中で率先して研修を組むようにしているところです。この様な企画は、毎回の研修アンケートをもとに世話人会で年度毎に計画を立て運営を行います。因みに、一回の研修参加費は 1 人 1,000 円となっております。

B 市においては、現時点では「小規模」のみによるネットワークづくりを行っています。良心的で懐の広い事業所が事務局を担っており、会則を設け、全ての事業所に均等に役職が付くよう配慮した上で運営を行っています。また会員の定めはあるものの、事業所毎に入会し、市内の全ての事業所が入会していることに特色があります。会費は年会費 10,000 円を徴収し、これを運営費に充てています。ですので、研修毎に参加費の徴収は行っておりません。また、この会では、研修を行うのは A 市の取り組みと同様ですが、定期的に事業所管理者が集まる会議を設けています。そこで、管理者同士の悩みや問題の共有と助言が展開され、事業所毎の「空き」情報の共有も行われています。今後の課題としては、「小規模」に限定されないネットワークづくりを検討中です。

「小規模」がネットワークをつくる目的自体は、地域性によっても然程違いは無いでしょう。しかし、その実践は、保険者の規模や事業所間の関係性等により大きく地域性に左右されるものと思われます。従って、ネットワークの創設・運営においての要諦は、地域内の状況をまずはしっかりと見据えながら、次の一手を打って行くということになりそう

です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

方針転換の前に要因分析を！！

2011/05/04 12:00:00 [社会全般](#)



4月17日のブログで、原子力の研究開発に傾注してきた日本のエネルギー政策について以下のように触れました。

「素人が把握している限りでは、原子力開発には多大な開発コスト（10年前は全体の90%以上と聞いていました今は勉強不足です）がかけられていますが、その割合の半分もしくは、三分之一でも、波力発電や、風力発電、太陽光発電に投じるべきでしょう」。

本日目に留まった新聞では、米環境シンクタンク・アースポリシー研究所代表のレスター＝ブラウン博士のコメントとして、「日本政府は原子力の研究開発には年間23億ドルの投資をしているのに風力には同1千万ドル、地熱の研究開発への投資はほとんどゼロだ。原子力のための資金を再生可能エネルギーに回せば、多くのことができる」※と掲載されています。風力発電の研究開発費は、原子力のその0.43%に過ぎないという指摘です。ジャーナリストを志していた十数年前と比べて、殆ど代わり映えの無い偏向した状況に今もあるようですね。

そのことが理解されたのと同時に、自然・再生可能エネルギーの開発において我が国が大きな後れをとっていることを本紙は示しています。太陽光発電の設備容量は、ドイツが全世界の47%を占めており、次がスペインの16%、第3位に我が国が13%を占めています。第3位を喜んではいけません。かつて我が国は世界第1位の座にありました。風力発電においては、設備容量の日本のシェアは1.2%なのだそうです。

私の記憶の範疇において、20年ほど前から自然エネルギーが全世界的に着目を集めその

開発が熱心に進められてきたのだと認識しております。その折から、二酸化炭素を発生させない、石油や天然ガスに依存しないエネルギー開発の在り方は求められており、日本のエネルギー政策は原子力開発一辺倒に傾注してきたのでしょう。

私も組織の経営者ですから、問題が生じた際は、その要因を多面的に分析し、その対応策を講じることが第一義であることは身に染みて実践している身です。これは国家レベルにおいても同様の検証が求められているのでしょう。なぜこのような事態が生じたのか。是非とも多面的な要因分析を行い、未来のエネルギー政策の在り方に活かして頂きたいと考えます。でなければ、今福島県内で、原発の脅威にさらされている住民の思いは間違いなく反故にされることでしょう。

もう一つ注視する点があります。この度の震災で、風力発電装置の多くは無傷で、原発付近で放射線汚染の恐れのある地域にある発電所以外は、現在もフル稼働しているとのこと。自然・再生可能エネルギーの装置は、災害にも強いことが証明されているようです。

「地震と津波で原発や大型の火力発電所が大きな被害を受けたのに対し、風力発電装置は地震の被害をほとんど受けず、多くの風車が、直後から発電を再開した。風力発電最大手のユーラスエナジー（東京）は、大きな揺れに見舞われた青森、秋田、岩手、福島の東北4県に10カ所の風力発電基地を持つ。

地震直後にはすべてが停止したが、発電装置への損傷はなかった。

（中略）電源開発（Jパワー）が青森、秋田、福島の3県に持つ4カ所の風力発電所でも発電設備への影響はなし。

（中略）福井市の三谷商事が昨年、茨城県神栖市に建設した日本初の本格的な外洋洋上風力発電所も地震や津波の影響が心配されたが、被害はなく、フル稼働中（中略）。

また、太陽光発電協会によると、屋根に置く太陽光パネルなどは、送電線などが壊れても、装置自体に異常がなければ、ほとんどの機種で『自立運転』という形での利用が可能。自立運転用のコンセントを使って、停電や災害の時に、携帯電話の充電、冷蔵庫やテレビなど家電製品の利用が可能だ」※。

この様に社会構造の大局を見ながら、一つの事象を捉えなければ物事の本質は見えきません。ソーシャルワーカーに今最も必要な視点の一つではないでしょうか。

※『京都新聞』2011年5月4日

社会構造を睨んだ事故の要因分析を！

2011/04/28 12:00:00 [社会全般](#)



あの事故が起こって早6年が経つのですね。

「尼崎 JR 脱線事故 6 年に合わせ、一部の遺族会で作る『4・25 ネットワーク』と JR 西日本は 25 日、事故の真相解明と安全の再構築を目的に共同で議論した「課題検討会」の成果を報告した。（中略）大規模事故をめぐり当事者企業と遺族が直接向き合う異例の取り組み」※1。

事故の責任を真摯に受け止め、対応策を検討する企業の姿勢は評価に値しますし、大切な親族を失った遺族の前向きな姿勢にも胸を打たれます。

本報告では事故の要因として、「ミスを報告する環境の欠如や、表に出ていない危険を事前に洗い出す仕組みの不備、人的要因の理解不足などを挙げ」、「さらにペナルティ的な日勤教育、過密な運航ダイヤ、自動列車停止装置（ATS）の未設置にも言及している」※2 ようです。再発防止に向けた企業の体質改善は第一義的に取り組まなければならない事項であると自身も賛同できるところです。

しかし、要因はそれだけでしょうか？この事故に関する要因は、また違った視点でも説明できるのではないかと自身は感じています。もちろん、企業が売り上げ至上主義に陥ってしまうのは、資本主義社会における力学的必然であるとしても、企業の独自体質に大き

な問題があることは否めません。資本主義社会においても、経済至上主義の社会においても、社会的責任を全うしている企業は枚挙にいとまがないからです。それでも、私は次の部分に引っかかるのです。「(本報告書では、) 運行時間に余裕のないダイヤについては『運転士にあせりや動揺をもたらす可能性は否定できない』との見解を示した」※1。この運行時間に余裕のないダイヤを生み出したのは何処の誰かと。

永らく北欧で生活をされていた研究職のお話を数年前に伺いました。日本でおおよそ 30 分かけて運行するであろう距離を、北欧では 1 時間かけてバスを運行させるのだとか。理由は明白です。障害を持たれた方がバスの乗り降りをする際、“ロスタイム”が生じます。認知症の方で、お金の計算や乗車手続きの不明な方も、乗降車の際時間を要しますよね。それを時刻表の中に組み込んで運行をしているのだそうです。

もう一度問題提起へ。さて、運行時間に余裕のないダイヤを生み出しているのは誰でしょう。鉄道会社の一存でしょうか。最終的に決断を下したのはその通りですが、私はそれだけではないと考えるのです。経済至上主義の中、効率化と合理化を優先するあまり、社会全体が何か大切なものを見失ってしまったことにこの事故が起きているのではないかと認識しています。

北欧では、障害を持たれた方がバスの乗り降りをする際、20 分バスが止まります。その際、乗客は何も文句を言わずに、窓の外を眺めて待っているのだそうです。日本の場合はどうでしょうか。5 分バスが遅れたら、文句を言い始める乗客が沢山いるのではないのでしょうか。電車が 5 分遅れれば大問題です。その様な社会全体からかかるプレッシャーが、会社の社員教育・指導を通して、二十代後半の運転士にかかったことがこの事故のもう一つの要因なのではないのでしょうか。

予てより私は、加害者の被害者性に着目できない福祉専門職は失格であると認識してきました。つまり、ソーシャルワークの「ソーシャル」、社会福祉の「社会」の構造を理解しない対人援助は、ソーシャルワークでも社会福祉活動でもないと認識しているのです。事故を起こした運転士の、また一企業の社会的背景にまで目を向けて要因分析しなければ、真の問題解決策を見出すことは不可能です。これはジャーナリズムにおいても同様のことが言え、東日本大震災を受け社会的価値が変遷し始めているこの時期だからこそ、強く社会構造を捉えた分析が求められているのでしょう。

※1『中国新聞』2011 年 4 月 26 日

※2「社説」『中国新聞』2011 年 4 月 26 日

葬儀のあり方と原発の関係

2011/04/17 12:00:00 [社会全般](#)



お世話になった方々のご逝去の続く昨今です。時間の許す限りご葬儀に参列させて頂いておりますこんな折に、少し不謹慎な発言となるかも知れませんが、このような葬儀の場が人と人との絆を紡いでいるように見受けられました。葬儀を通して、久しぶりに再会した人々が故人を偲んで会話を交わす。組内の住民が通夜・葬儀のお手伝いを行う。会話は交わせずとも、お焼香の際に面々を互いに確認し合うことができる。特に近頃体調を崩されていると噂されている方をお見かけし、ホッとする場面もありました。

今や自宅での葬儀が激減しており、専ら民間企業の葬儀会社が会場やお食事から、香典返し、案内文書に至るまで執り行うことが普遍化しつつあります。確かに、家で葬儀を開催するのは大変です。家族・親戚総出でも対応は難しく、否が応でも地域住民やお勤め先の方々の協力が不可欠となりましょう。その点、多少の金銭的支出があろうとも、現在では葬儀会社が全ての手配をして下さるので、便利な世の中になりました。

一方で、葬儀がシステマチックに効率化されているのも事実でしょう。そこでは、如上で感じた非効率の中にある“幸福感”が減退しているのではないのでしょうか。効率化された社会の中では、非効率なものが忌避され軽視されて行くのですが、そこでは、他者に思いやる気持ちや、お互い様の思いが失われているのではないかと心配しております。

昨日「マイケル・サンデル 究極の選択」※1 というテレビ番組を見ました。そこで、原子力発電についての可否を問う設問で多くの参加者が議論を展開しています。もちろん「究極の選択」ですね。

中でも心に留めたのは歌手の高橋ジョージ氏が言われた一言です。——生活水準の高い低いの意味がよく分からない。東京では計画停電が行われていて確かに不便だが、夜はなるべく家族一緒に一つの部屋で固まって節電に努めている。しかし、それが返って豊かな生活だと自身は感じている…。

私自身の見解も、原子力反対の立場です。原爆資料館に訪れたオーストラリア人の驚きがノートに綴られていると昨日の『中国新聞』「天風録」に書かれています。「ヒロシマ・ナガサキの歴史がある日本にすら原発があったとは」※2。そうです、原子力の負の側面を嫌という程体験した我が国が、今度はまた原子力の恐怖に曝されているのです。温故知新がなされていないと私は感じます。

番組の議論の中にもあったように、危険な原発は地方に存在するが、その恩恵を受けているのは遠く離れた都市部であるとの不公平感にも大きな疑問を持っています。この様に、効率化された“便利な”世の中は、一部の人たちの犠牲によって成り立っているのではないかと私は考えます。

素人が把握している限りでは、原子力開発には多大な開発コスト（10年前は全体の90%以上と聞いていました今は勉強不足です）がかけられていますが、その割合の半分もしくは、三分之一でも、波力発電や、風力発電、太陽光発電に投じるべきでしょう。

それでも、停電に見舞われる生活が生じるというのであれば、私たちはそれを甘受すればよいのだと思っています。その様な、懐の広さが今社会には強く求められているのだと私は考えます。

昨今の葬式のあり方と、原発を推進してきた社会のあり方は恐らく何処かで繋がっているのだと考えます。何かが間違っている。そんなことを思うのは私だけでしょうか。

※1 「マイケル・サンデル 究極の選択 『大震災特別講義～私たちはどう生きるべきか～』 NHK 総合 2011 年 4 月 16 日 9:00～10:15

※2 「天風録」『中国新聞』 2011 年 4 月 16 日

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

思いを馳せて行動することの意味



いま、西日本は平穏そのものです。しかし一方で数百km離れた地では、大変な生活を強いられていらっしゃる方々が存在します。よく自粛ムードは良くない、西日本だけでも経済活動の活性化がなされなければ日本列島そのものが沈没してしまう旨のことが取り沙汰されます。だから、お金持ちはドンドン消費をした方が良く、テレビのコメンテーターは嘯きます。

確かにそうなのか…。いや、何かが違うような気がしています。私にも東北地方に知人がおります。彼らとメールのやり取りもさせて頂いております。私たちの想像を絶する生活をされている方が現在進行形で“そこ”にいらっしゃるのです。そのことを否応なく感じている毎日です。私は、そのことに思いを馳せて生きようと心に決めました。その生活こそが非常に尊いものであると。

平素より一日二食の生活を行っている若輩ですが、被災者の多くは一日一食の生活をされています。だからといって、それを一日一食に合わせた行動を行おうとは思いません。忙しい折には、一食になってしまうこともあります…。そうではなく、そういう人々がいらっしゃることを胸に馳せて、一日二食の生活をしております。夜、アルコールを飲みながら、被災地ではこの様な生活は中々できていないと思いを馳せます。と、思うと中々お酒も進みません。でもその行動が尊いと私は思うのです。

想像力、察する力を無くした人間ほど無力なものは無いと自身は考えます。一見同じ行動に見えても、その思いが異なれば、その行動からにじみ出る何かが違ってくるはずです。その何かの違いを若輩は大切にしています。

大学生の折、私はアルバイト三昧の毎日でした。深夜のバイトも厭わず行い、今思えば放蕩学生だったと記憶しています。好きな洋服と、食事と、勝手気ままな生活をしていた時期があります。しかし、周囲にたった一人だけ一カ月 5,000 円の小遣いで生活していた

友人がいました。私はそのことがいつも頭から離れず、毎日を過ごしていました。放蕩しながらも、彼に思いを馳せることで、恐らく多くの陥穽に嵌ることを避けることが出来たのではないかと振り返ります。彼は、私にとっての「意味ある他者」だったのです。

人間の素晴らしさは、想像力だと自身は考えます。これを否定するのであれば、読書も、映画も、政治も全て不毛の象徴と化してしまうでしょう。人の気持ちを100%理解することなど、到底不可能な営みですが、そのうち60%、70%を理解することが出来るのも人間の素晴らしさと認識しています。被災者の皆様の60%でもいい、思いを馳せて消費をしましょう。経済活動の活性化を図りましょう。思いを馳せることにより、その営みは、幾分か尊さを増すことでしょう。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『まちづくりとしての小規模多機能ケア』

2011/04/07 12:00:00

[地域密着型サービス](#)

まちづくりに繋がるコミュニティケアの実践⑦

ネットワークを基盤とした共生ケア



前回まで「地域の絆」における共生ケアの取り組みについて叙述しております。児童や高齢者が事業所・地域の中で社会的役割を担っている活動について紹介しました。共生ケアの視点でその他特筆すべきは、障害者の就労訓練としてのボランティア活動の受け入れと、その営みを通して当法人への入職が決まった事例ではないかと思われます。

ある事業所においては、近隣の精神・発達障害者の作業所と連携し、就労訓練のためのボランティア活動の受け入れを行ってきました。障害者の就労支援の問題はようやく社会問題として顕在化しているところですが、働きたくても仕事に就けない障害者は依然として多く、働く働けない以前に、働く機会を奪われていることによってどの様な仕事に向いて、どの様な仕事には向いていないのか、その判断が出来ない方も非常に多くいらっしゃ

います。そこで、まずは作業所以外の現場で就労訓練を目的としたボランティア活動の実践を行い、1カ月に1回定期的にモニタリング・再アセスメントを実施した上、仕事の適性判断や、介護の仕事に適性がある場合は当法人への就労も視野に入れた実践を近隣作業所と連携し試みました。

地域福祉の概念として、支えられる側は絶えず支えられる存在ではなく、環境や立場が変われば支える側に回ることがあることをしっかりと認識し、どんな方にも強みや能力があり、その強みと能力を生かして社会に役立てることを支援を私たちは大切にしています。ですから、障害を持たれた方の強みや能力を生かせる活動内容を検討していきました。発達障害を持たれた方の場合、青年期の後半になると症状が落ち着いてこれら且つ多弁になれる方もいらっしゃるそうです。そういった方には、お話し好きな高齢者の話し相手になって頂いたり、鉄道が趣味の方には、元国鉄職員だった高齢者のお話し相手になって頂きました。また、言われたことを一生懸命にされる能力を生かして、掃除をして頂くなど、その方が他者より優れた能力があることを認識し、その能力を出来る限り生かす活動を実践したのです。

1カ月に1度のカンファレンスでは、他分野の福祉専門職との意見交換が行われ、福祉専門職としての共通基盤の内私たちに欠けている部分も見えてきました。利用者が失敗することの大切さや、可能性への挑戦に制限をかけないことの重要性を他分野の実践を伺う中で改めて認識した次第です。共生ケアにはこのような副産物があることに気づかされました。

如上の実践では、活動を通して作業所職員とご本人がその後の就労先を決められ、活動を止められるケースが殆どで、当法人に就労された方はいらっしゃいませんが、他の事業所実践においては精神障害を持たれた方が就労に結びついた事例があります。ハローワークと相談支援センターの職員と連携し、ボランティア活動を経て就労に繋がったケースです。

「地域の絆」における共生ケアの特徴は、介護保険事業における利用者を主たる対象者とし、利用者に対するケアの質が担保できる範囲で、「他分野」の方々の支援を行うことにあります。よって、職員は高齢者ケアの研鑽に絶えず励む一方で、「他分野」における研鑽には敢えて手を出さずに、福祉専門職としての共通基盤の範囲で「他分野」に対応することとしています。最大の特徴は、共通基盤で対応できないケースには対応しないという姿勢ではなく、法人外部の専門機関としっかりと連携を取った上で受け入れを行うことにあります。例えば、障害を持たれた方が職員として就労した後、突然出勤しなくなった場合、事業所は深追いせずに、障害分野の専門機関に対応を委ねます。また、活動中に心身の症状が悪化した際も、事業所職員のみで対応することはありません。必ず連携先の専門機関

に対応を依頼することになっています。

同じ空間・居場所は提供させていただくものの、多様な人々に対する具体的支援は、多様な専門職が連携して実践することが私たちの目指す共生ケアのあり方かも知れません。一つの事業所が全てを抱え込んで対応するのではなく、地域には多様な専門職がいるわけで、スペシフィックな外部の専門職の力を借りて、多様な人々の支援にあたることで、地域の中に多様で有機的なネットワークが形成されます。これこそがコミュニティケアの実践に繋がるのではないかと考えているのです。餅は餅屋と言いますが、逆に私たちが専門とする高齢者ケアの専門性を「他分野」の方々に提供することもあるわけです。

時代の趨勢上、福祉専門職がジェネラリストとしての要請を受けていることは事実ですが、共通基盤で対応できる範囲には限界があります。その部分をスペシフィックな専門職が地域で連携を図り対応していくことこそが今強く求められているのではないのでしょうか。

また、外部との連携を基盤とした共生ケアを実践するためには、法人の理念や方針をしっかりと外部に示していく必要があります。今までご紹介してきた事例中の外部機関は、「地域の絆」の運営方針を理解された上で、連携を模索して来られました。つまり、「地域の絆」であれば、この話に乗ってくれるのではないかと予測して来られたのです。その意味では、私たちが実践する共生ケアの取り組みはネットワークを礎としています。

共生ケアが徐々に広がりを見せつつある昨今ですが、多くの事業所が実践し日常的な光景となるまでは定着していないのも事実です。その必要性は理解できるが、「敷居の高さ」や「不安」を抱えている事業所も多いようです。まずは、私たちのように、介護保険事業を運営しながら、高齢者ケアを中心に据え、利用者の生活の質を高めるもしくは低下させない範囲において、児童・障害者ケアに取り組むといったことから始めてもよいのではないのでしょうか。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

施設や送迎車の色彩から見える社会の障害者・高齢者観

2011/04/01 12:00:00 [社会福祉](#)



広島県江田島市能美町に地域福祉センター鹿川を本日開設させて頂きました。初日から職員の士気も高く、上々の滑り出しであったと認識しております。

地域福祉センター鹿川には様々な特色があるのですが、今回は施設と送迎車の色彩に焦点を当ててご紹介をさせて頂きます。まず施設の外壁色です。地域福祉センター鹿川の場合、白と黒を基調にしているところに特徴があります。特に黒をふんだんに使っており、ある一面は全面黒の配色となっています。これは地域福祉センター宮浦西の坂上さんの発案ですが、私のお気に入りの配色です。従来の福祉施設の色合いは専ら、優しく落ち着いた感じの色彩が中心ではなかったでしょうか。茶系やグレー系が中心で、時に明るい緑や、オレンジ系を使っていらっしゃる施設も多く見受けられます。その中で黒というのはあまり記憶にありませんでした。だからこそ、この色合いは私のお気に入りです。

過日 2 台の送迎車が揃いました。一台はグレーで、もう一方はグリーンです。当法人では、基本的に職員さんに色決めをしてもらうのですが、そこには一つだけルールが存在します。従来の常識を覆す色合いにしてもらいたい、これだけです。この度の地域福祉センター鹿川の車輛は時間の関係上、私が決めましたが、いつもこの様な視点で色決めを行っているのです。福祉用具や福祉車輛の市場化が顕著な昨今では、多様な選択肢の設定として色彩もバリエーションが増えています。従来は福祉車輛＝白色と言った時代もありましたが、現在では青やグレー、パールホワイト等の多様な色彩の車輛を見かけます。当法人の各センターにおける車輛の配色でも、オレンジ・ブルー等を積極的に使っているところ

私たち福祉専門職は、利用者のその人らしさを追求する専門職です。「その人らしさ」は、抽象的すぎる表現で用いるにはその点留意が必要ですが、私は端的に、利用者に生活や人生における様々な選択をしていただくこと、そのことを真摯に考え保障していく取り組みが、「その人らしさ」を支えることに繋がると考えています。

私たちはこのように、中島康晴という利用者のその人らしさは追及しますが、中島康晴が社会の中で位置づけられている「男らしさ」や「青年らしさ」からはむしろ脱却した実践が求められているのだと考えます。「認知症高齢者」や「高齢者」を十把一絡げにした実践は忌避されるべきものでしょう。であるからこそ、私たちは、「年寄らしさ」「障害者らしさ」といった社会が構築してきた価値観を一旦覆す必要があると考えています。もちろん、高齢者や障害者が自ら定義した「らしさ」であればそれは尊重すべきかもしれませんが、そうではない現状を鑑みると社会の優位的価値が生み出したこれらの「らしさ」を突き崩していく必要性を感じずにはいられません。

高齢者施設の外壁にシックで渋めの黒を使ってもいいじゃありませんか。若者が好む色彩の送迎車輛で、高齢者を乗せてドライブしても何ら問題ないはずです。「高齢者はこうあるべきだ」、「障害者はこう生きるべきだ」といった社会的価値は、偏見以外の何ものでもありません。その呪縛から解放されたところで、職員さんには真なるパーソン・センタード・ケアの実践を志して頂きたいと願う毎日です。

高齢者施設には見えないと地域住民はおっしゃられます。



国道に面しているため、「何ができたのか？」興味の眼差しで車中から見られることも多々あります。

レストランと間違われることもあります。

地域福祉センター鹿川の送迎車輛



施設の配色を決めた坂上さんも大満足の色彩でした。施設の外観ともマッチしています。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 29 / 57

人との出逢いこそ最良の勉強

2011/03/28 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



地域福祉センター鹿川の懇親会が昨日開催されました。振り返ってみると、地域福祉センター鹿川を開設する契機となった江田島市への人生初訪問は今から二年前の夏でした。そこから現在までの約 2 年間で多くの住民と接することが出来ました。また江田島の文化や風土についても多くを学ぶことが出来ました。

昨日の懇親会の席には、その多くの住民が参加して下さいました。皆さんは、私がここ 2 年以内に知り合いになった方々です。土地と一緒に探して下さった地元の不動産を営む住民、住民説明会を開催する際ご尽力いただいた自治会長・副会長、民生委員の皆様。開設に当って何かとご相談に乗って下さった社会福祉協議会の会長及び事務局長。懇親会の数日前に開催した見学会の初日、紅白餅をつくために餅つき大会を行いました。その中心的役割としてご尽力いただいた老人クラブ会長。江田島では知名度の全くない私どもに、

快く土地をお貸し下さいました住民。江田島市の福祉担当課のみならず、まちづくり担当課の職員からも多大なご支援を頂きました。筆舌に尽くし難い程多くの地域住民に支えられ今日を迎えることが出来ました。

懇親会においては、多くの住民から叱咤激励を受けましたが、どれも鋭い視点のものが多く、感慨深く思う場面も多かったようです。それぞれの地域で、その土地に誇りを持って、懸命に考えておられる住民がいらっしゃいます。その考えに触れる度に、その思いを感じる度に、自身の不甲斐なさを感じさせられます。自身はまだまだ若輩だと…。これらの話は、理屈や理論ばかりではありません。その諸先輩方の経験と実績、思いから滲み出ている重たい何かを感じるのです。その何かに触れ、慮って考えると、感慨深さと、温かさ、そして前向きさを頂くことが出来ます。

一つの学びは、簡単には言語化できない年長者の体験・実績・能力の測り知れなさと、どこの地域にも多くの偉大な住民がいらっしゃるという事実です。ある特定のある住民だけが偉大だと考えるのは、傲慢以外何ものでもないという理論です。

如上の様に、生まれて 37 年の歳月の中で、私は多くの方々と出逢う中で、貴重な学びをさせて頂きました。この 2 年間でもちろん江田島以外の方々からも叱咤を頂戴する中で、少しずつ成長をしているのかも知れません。

多くの出逢いに感謝をし、そして、明日からもまた多くの出逢いを大切に生きて行きたいと思えた懇親会でした。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(1\)](#)

お金や経済的価値では測れない価値の萌芽

2011/03/19 12:00:00 [社会全般](#)



全国の社会福祉協議会では、ボランティア志願者が殺到しているようです。同じ民族や国民としての意識、決して他人事ではない思い、何よりも現に生活に窮する人々の姿をメ

ディア等で見ると見かねての行動かと存じます。

中国等のアジア諸国では、被災した日本人のその様な「冷静」な対応を称賛していると聞いています。東日本大震災は、私たちに甚大なダメージを与えていますが、一方でその中から僅かでも光を見い出すとすれば、この様な他人に対する思いやりや、助け合いの意識が、私たち国民の中に依然根強く残っている事実ではないでしょうか。

冒頭の行動は、お金や経済的価値に則ったものではありません。そこに私は大いなる価値を見い出しています。金銭的・経済的価値を至上とし、我が国は社会構築を行ってきました。そこで、如上の様な価値、共に生きるという価値であったり、助け助け合えるという価値、お互い様の価値、何人たりとも排除・排他・排斥をしない価値等が希薄化してきたことは否めない事実であります。

経済状況が良くなっても、自殺者は増え続けた現実を目を向けると、そこで失われてきた価値こそが、実は、持続・安定可能な社会構築に必要・不可欠なのかも知れません。その様に考えつつある人々が増えている昨今、冒頭の活動が促進されていると私は分析しているところです。

「僕らが手にしている 富は見えないよ」「何故なら価値は生命に従って付いている」※椎名林檎氏も歌います。

新たな価値が芽吹いている。今、私はそれを感じています。

※椎名林檎氏「あまりある富」

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

「予防原則」への原点回帰を！

2011/03/15 12:00:00 [社会全般](#)



東日本大震災における福島第一原発の事故で情報が錯綜しています。住民の方々の心中をご察しすると、心痛に耐えないところです。人々の権利擁護を業とする専門職としては、住民の安全・安心を最優先した対応が不可欠であると切に思います。

しかしながら、政府や電力会社の対応からは、科学分野における「予防原則」に則った対応が見られません。今最も重要なことは、原子力発電の面子ではなく、住民の安全であるはずです。このようなことを書いてしまわなければならない程の体たらくではないでしょうか。

「三宅島の場合、結局、火山がいつ、どんな規模で爆発するのかわからず、科学的なリスクの予測には限界があるので、とりかえしがつかない被害を受ける前に、とりあえず島外避難する、すなわち『予防原則』が適用された。世界的に話題の遺伝子組み換え食品や携帯電話の電磁波の問題でも、欧州を中心に、この『予防原則』に基づいて、たとえば携帯電話をやめないまでも、賛否両論あるが、イヤホンで聞くなどの対応が始まっている」※。10年以上前の新聞記事からの抜粋ですが、『予防原則』とは安全が証明されていないモノは、危険である、もしくは危険の可能性を認識して行動することだと素人ながらに理解しております。

日本の科学の安全基準では、危険が証明されなければ安全であるとの価値が専らであったと認識しておりますし、現在進行形の福島原発での対応を見る限りその潮流の真ただ中にあると言えます。しかし欧州では既に、安全が証明されていなければそれは危険であるという「予防原則」が主流となっているのです。これは非常に大きな違いで、危険を証明することよりも、安全を証明することの方が非常に困難であることから、欧州の方がより安全基準が厳しいことが自明の如く理解されます。

今こそ「予防原則」に則って、住民の生命及び安全を第一義に、早め早めの対応をお願いしたいと思います。原子力開発には、政・官・財・学の日本の技術力におけるプライドがあるのかも知れませんが、とにかく今は、住民の生命・安

全を最優先にした行動を政府や電力会社に強く求めます。

福島には知人が数名住んでいます。しっかりと生きていらっしゃることだけは間接的な情報で確認が取れております。被災した方々をこれ以上傷つけないで欲しい。今心中は非常に苛立っています。

※ 黒田 洋一郎氏「科学をよむ」『朝日新聞』2000年9月13日

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

東北地方太平洋沖地震について思うこと

2011/03/14 12:00:00 [社会全般](#)



2011年3月11日14時46分頃、三陸沖を震源に国内観測史上最大のM9.0の地震が発生しました。震災で亡くなられた方は数万人に及ぶ可能性があるとの報道されています。

ソーシャルキャピタルの概念には、限られた地域の中での連携（結合型【bonding】）と平素の活動地域を越えた広域な連携（橋渡し型【bridging】）があると教わりました。双方の連携があつてこそ、平素の活動地域の地域力も高まるのだと。

私はここ数年、市や県を越えた広域な範囲の方々との連携を模索して参りました。この度震災に遭われた地域は、私にとって非常になじみ深い地域といえます。そしてそこにお住まいでいらっしゃるお一人お一人の顔が頭に浮かんできます。無事でいて欲しい。

テレビをつけると気になって、画面から目が離せなくなります。そんなこともあつて、今日は自宅作業をしようと思っていたのですが、法人本部に出勤しています。

今こそ、平素よりお世話になっている方々に何らかのご支援をさせて頂きたい。そう思

ってはいのですが、今は何もできないのがもどかしい。いみじくも、ソーシャルキャピタルについてご指導・ご鞭撻いただいている先生も仙台にお住まいです。

皆さんのご無事を心よりお祈り申し上げます。そして祈るしかできない現状に、焦燥感を抱いています。被災地に知人のある方は、皆さん、同じ思いではないですか。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

カンニング出来ない試験問題考

2011/03/07 12:00:00 [社会全般](#)



同志社・早稲田・立教・京都大学の入試問題を試験中に「質問サイト」に投稿した問題で、19歳の予備校生が偽計業務妨害容疑という聞き慣れない罪名で逮捕されました。若輩もちょうど忙しい最中ですが、連日連夜の報道番組で否応無くその要旨は理解しているところです。福祉専門職として、社会学を若干かじった者として、思うところが少しあって今これを打っています。

「偽計業務妨害が法律論的に成立するのは分かるが、大学側の落ち度が問われないのは違和感がある。逮捕された男子予備校生が言うように本当に1人でやったのであれば、入試の監督者は相当怠慢で、気付かないのが異様だ。京都大もほかの大学も、全面的に自分たちが被害者という意識で警察に相談しているが、監督責任者らの処分がないのはバランスを極めて欠いている」※1 や、「(石原慎太郎知事は4日の定例会見で)『世の中はものごとがすすんだ。携帯の持ち込みを制限するなどの措置を講じなかった大学当事者の方が時代に遅れている』と試験監督のあり方に対する大学側の認識の低さを批判した」※2 といったものは尤もな言い分であると認識しています。つまり著しくバランスを欠いていると。端的に申しますと、19歳の未成年者に対して少し懐が狭すぎやしないかと認識しています。少し特異なものを見つけると、それを際立たせて取り上げるマスコミの陋習の様なものも感じてしまいます。以前私と同世代のIT企業家が、時代の寵児と扱われていたのが、一変手のひらを返したように集中攻撃を受けていた光景と相通ずるものを感じてしまうの

です。私としましては、19歳の若者にもう一度チャンスを与えることのできる懐の広い社会のあり方を切望します。

そして、もう一つ感慨深く思う点は、私たちは一体何のために勉強をしているのかという問題意識にあります。今回の不正によって、真摯に入試に臨んだ受験生からは激しい憤りのメッセージも寄せられています。それも尤もな感情だと認識しています。しかしながら、誰かを蹴落とし、蹴落とされる為に勉強があるとすれば、それは何か違うのではないかと私は思うのです。

なぜなら、本来の勉強とは、人々を幸せにするための叡智を培うものだとは認識しているからです。人々とはあらゆる全ての人々を指すと私は理解しています。あらゆる人々が幸せになるための叡智を培い、その実践を通してあらゆる人々を幸せへと導くものが勉強であるはずです。その実践は絵空事の様で難しい。しかし、それを勇気を持って諦めずに探し求めるのが勉強であり、学問であると私は強く思います。

そう考えると、大学受験に至るまでの勉強は、本来の勉強とは一線を画したものとなっているのではないかと心配になってしまいます。記憶を頼りに、知識を詰め込むだけの“勉強”になっているのではないのでしょうか。その様な“勉強”の果てに真の知識人が創造されないことは自明の理と言えます。

「私は本来的には『物知り』『情報通』であることと、『知性』とは別物だと思います。『know』と『think』は違うのです。『information』と『intelligence』は同じではないのです。（中略）人間の知性というのは、本来、学識、教養といった要素に加えて、協調性や道德観といった要素を併せ持った総合的なものを指すのでしょう」※3。

自身のことを振り返って考えます。中学校時私は歴史という教科が大好きでした。当時、多弁で、多動な私は、授業中に積極的に発言し、授業“妨害”を繰り返す常習犯でした。特に国語と歴史の授業にはいつも熱が入ってしまい、発言の多い私に対して、「お前、代わりに授業するか？」とよく先生からお叱りを受けたものでした。

その様な私も試験になると、中々思うように点数が取れません。歴史は年表を覚えるのが専ら嫌いでしたし、国語では、筆者はもっと異なることを私たちに伝えたいのではないかと彼此想像することで時間以内に解答をすることが殆ど出来ませんでした。先生もなぜ点数が取れないのか、不思議がっていたようです。

しかし今は、その理由を自分なりに説明することが出来ます。つまり、大学までの勉強

は記憶をインプットしてアウトプットする能力が問われていたのだと。本来は、歴史の年表を覚える能力と、歴史の勉強に必要な能力は別なところにあるはずです。真なる歴史の能力とは、どの様な社会的背景をもとにどの様な人々がどの様な行動を起こしたのかを分析し、延いては、同じ過ちを現在・未来で起こさぬためにはどのような社会構築と行動選択が求められるのかを明示していく力を指すのだと認識しています。私はその様なことを想像することが大好きな学生でした。その折は、ワクワクして夜も眠れなくなるのです。しかし、歴史の年表を覚える能力は、如上の能力と別のところにあることは容易に理解されます。

以上を考えると、真なる勉強とは、自ら考え想像すること、そしてやがて創造することにあることが理解されます。適切な選択肢を選ぶ能力ではなく、新たな選択肢を自身で創り出す能力が求められているのだと認識しています。その能力を培うことでこそ、国際競争社会で対等に渡り合える強靱な社会人を創出することが出来るのではないのでしょうか。

もちろん初期の勉強にはインプットとアウトプットが不可欠な側面があります。しかしそこに傾注しては、真に強靱な社会人を養成することは出来ないと考えます。であれば、大学受験の段階においては、逸早く記憶を試す問題と決別し、絶えず問い続けてきた自分の考えをまとめて話す面接の機会や、自身の考えを文章で表現する小論文の機会を多分に増加させるべきではないのでしょうか。

若輩も非常勤ではありますが、大学生に試験問題を作成する機会を頂いております。私の問題は、全て論述であり、しかも自身の現時点での考えや思いを吐露させるものです。あくまで自身の言葉で表現させることに重きを置いています。ですので、カンニングのしようがありません。

真の勉強とは、本来カンニングの出来ないものです。なぜなら、正解の無い問題を解くのが勉強だからです。そこで大事になってくることは、自身の思いや考えを、他者に伝える能力ではないのでしょうか。そのためには、画一化されつつある自身の思いや考えにしっかりと耳を傾けて聴いてやれる機会を教育過程の中で担保する必要があるのでしょうか。数年に及ぶ非常勤講師活動の中であって、学生の自身の考えや思いの表出力が減退傾向にあることを毎年実感しているところです。

真に強靱な社会人を養成するためにも、大学入試では、カンニングの出来ない問題の出題を願うところです。因みに私が入学した花園大学。当時は小論文が高配点の入試形態をとっていました。これがなければ、私は確実に大学には行けなかったと“自負”しております。

※1 尾木直樹氏「識者談話」『中国新聞』2011年3月4日

※2 『産経新聞』3月4日(金)

※3 姜尚中氏『悩む力』集英社新書 P67-69 2008年7月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

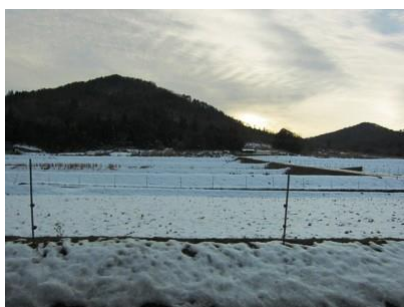
[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 30 / 57

社会構築の中心的な役割へ！

2011/02/27 12:00:00 [社会福祉](#)



民主主義社会においては多様な価値観が尊重されているはずです。社会構造の捉え方も当然様々ですが、私は以下の論理に共感を持つ者です。

「歴史家 A・トインビーは『歴史の教訓』と題する論考で、英国人が歴史の中で学んだことは『君主制と共和制の血なまぐさい闘いを通じた節度を重んじる穏健な態度の重要性』と『米国の独立戦争などを通じた植民地主義の限界についての認識と自治容認の大切さ』の二つであり、全人類が歴史の教訓として学んだことは『一人の人間が他人を支配し所有する奴隷制はよくない』ということだと言及していた。

21 世紀に入り、歴史はさらに進化している。混迷しているかに見えるが、大国や特定の権力が支配し秩序を維持する時代から、多くの参加主体が自己実現を図る『全員参加型構造』へ静かに移行しつつあるということだ。つまり、この 10 年で世界が学んだことは『力の理論の限界』ということである。力の理論で自国の利害を実現しようとしても、結局は反発と消耗を招き、孤立するということである。

(中略) 全員参加型秩序においては道筋の通った理念性が重要になる。参加者が限定され

た先進国主導の合意形成と異なり、多くの参加者が丸テーブルを囲む会議においては、参加者の納得を得られる『中心となる価値』の発言力が求められる。

（中略）本来、グローバル化とは特定の国の覇権による均質化ではなく、多様な参加主体による多次元な交流を志向するものであろう」※1。

このことは、一国内における社会構造についても同様のことが言えるでしょう。今まさに全員参加型の社会構築が求められているのです。特定の企業や機関、政治家や官僚が中心となって社会構築を行うのではなく、老若男女問わず、健常者、障害者を問わず、国籍を問わず、生活歴を問わず、全ての市民がその多様性を認め合い、それぞれが社会構築の主体性を発揮していく、そんな社会の在り方が求められているでしょう。これはおそらく全世界的な潮流であると私は認識しております。

我が国においても、過去の高度経済成長では、正の側面のみならず、負の側面として特定の人々の犠牲を強いて“成長”してきた歴史があります。現在はどうでしょう？

全員参加型社会とは、そのような市井と決別した社会を指すのだと認識しています。「多少の犠牲はやむを得ない社会」から、「多少の犠牲も許さない社会」への変遷が求められているのです。それが全世界的な流れであり、人類が生きながらえるために取るべき道であると私は考えます。

そして、社会福祉専門職はまさに「多少の犠牲も許さない社会」構築を最前線で担っている専門職なのです。時代の潮流を読めば、今まさに社会福祉専門職こそがその中心的役割を担う時期に来ています。

その潮流の促進者と化してこそ、私たち社会福祉専門職は 100 年先に評価を受ける専門職となれるのです。以下は、中曽根康弘元首相の言葉だそうです。

「政治家の人生は歴史という法廷において裁かれることでのみ、評価される」※2。

※1 寺島 実郎氏「サンデーオピニオン」「今を、読む」『中国新聞』2011 年 1 月 16 日

※2 『毎日新聞』東京 2011 年 2 月 16 日

ネットワークを基盤とした共生ケア



前回より共生ケアとしてのコミュニティケア実践について叙述しておりますが、この度は、高齢者の居場所と役割づくりについてのお話です。高齢者と言っても、小規模多機能型居宅介護（以下「小規模」）の利用者のことではありません。「小規模」の利用者以外の地域に住んでいらっしゃる高齢者のことを指しています。「地域の絆」の各センターでは、非常に多くの地域高齢者が活動されています。

各センターで実施している地域交流事業と称した様々なイベントの運営に協力して下さっている方の半数は60代～70代の方々です。ペットボトルキャップ・プラスチックトレイの回収や、庭木の剪定・草取り、建具の修理などにおいても地域高齢者より多くのご支援をいただいております。如上の高齢者の殆どは、介護を必要としない元気な高齢者ですが、中には、要介護1・要支援2といった要介護認定を受けられている方や、軽度認知障害(MCI)のある地域高齢者の活動が見られるのも特徴です。

最初のきっかけは、地域住民Aさん（要支援2）の来所でした。人のお世話をするのが生き甲斐だとおっしゃられ、特に掃除が得意で、センターの掃除のお手伝いがしたいと突然言って来られました。初めは、単に協力的な地域住民と認識し、快く活動に取り組んでいたのですが、どうも認知症があるようだとの時職員より報告を受けたのです。掃除のお手伝いをしていただくのはよいが、何度も繰り返し同じ指示を出しても伝わらない。地域包括支援センターに連絡を入れると、要支援2の方で、近隣にある居宅介護支援

事業所のケアマネジャーが担当であることが分かりました。協議を重ねた後、当センターにおける週1・2回のお掃除ボランティアの活動が正式に始まりました。Aさんのケアプランの中に、介護保険以外のフォーマルな社会資源として位置付けられたのです。その後Aさんは認知症が進行し、他法人の介護サービスを受けると同時に当センターにおけるボランティア活動は終息しました。その後、Bさんという要支援高齢者が、当センター利用者を昔の歌を歌って勇気づけたいと、自ら定期的にボランティア活動に来られるようになったり、大正琴の元先生をされていた要介護1の高齢者が、大正琴の演奏をするため月に2回ほど来所されることもありました。

要介護・要支援高齢者が、利用者としてではなくボランティアとして来所している事実、外部の方は非常に驚かれるのですが、「小規模」の対象利用者像と、収入面を鑑みれば、要支援の方や要介護1の方に登録を促進することは困難を要する場合もあるわけです。また、見守り及び軽微な家事支援程度で在宅生活の継続が可能となる要支援高齢者に「小規模」の登録が必要かといったアセスメント上の問題もあります。現に、当センターに通って来られている方々は、その殆どが、押し車・歩行器・杖等を用いて自ら自由に屋外の移動が出来る方々です。以前お伝えしましたように、「地域の絆」では要支援の方の登録も受け付けておりますが、アセスメントの結果、登録した方が良い利用者には登録を進め、ボランティア活動のための通所で十分な方には、そちらを進めております。

登録者25名の内、要支援の方が多く含まれればその事業所は赤字になります。これは制度設計上の問題ですから、どうしようもない事実です。だからと言って、地域の要支援高齢者を寄せ付けない対応をとる必要はありません。利用者としてではなく、地域住民として、遊びに来ていただいたり、お手伝いをしていただければ良いのです。それこそが、地域の中で居場所や役割が担える活動として、真の介護予防の取り組みに繋がります。当法人では、まだ経験はありませんが、ボランティア活動をされている要支援高齢者が、やがて「小規模」の利用者として登録することも考えられますし、それはすなわち、利用者の継続的支援に繋がると言えます。

下記に紹介する事例も、如上の発想で取り組みを行ってきたことによる産物と言えます。Cさん（要支援2）が食事作りと掃除のボランティアに毎日通って来られたことがありました。近隣で一人暮らしをされており、一人で一日中家にいると良くないことを考えるようになるので、自分の居場所と生き甲斐を求めて当センターにやって来られたのです。食事作りと、掃除、利用者のお話し相手をして下さるなど、人手としても職員は非常に助けられました。

また、元学校教師のDさん。「何でも良いからボランティアをさせてもらいたい」と突然

やって来られました。厳格そうな方で、何をお願いして良いのか躊躇っていると、「草取りでもいいから、やらせて欲しい」とおっしゃられたので、有難く活動に参加していただくようになりました。この方も、毎日来られるようになり、やがてセンターの敷地には雑草一本生えていない状況に。問題となったのは、次にしていただく活動でした。管理者の提案で、元学校教師という能力を生かした活動として、地域の子どもたちを対象にした書道教室の先生役を担っていただけないかと D さんにお話をしたところ快く引き受けて下さいました。子どもたちに呼びかけを行った回覧板の文書には、D さんの顔写真と呼びかけのコメントを載せました。私は当初、参加者はゼロになるのではないかと推測していたのですが、当初より 5 名の子どもたちの参加があったので正直驚きました。その後、子どもの人数が増え、教室の回数も増えていきました。夕方になると、お母さま方が子どもを連れて当センターにやって来られます。なぜ、子どもを連れてこられるのかをお聞きしたところ、「お年寄りの考え方や、学ぶ時の姿勢を子どもたちに触れさせたいから」といったご意見を多くの方から聞かされました。つまり、そもそもが、私や、管理者にはない能力を D さんはお持ちだったということになります。

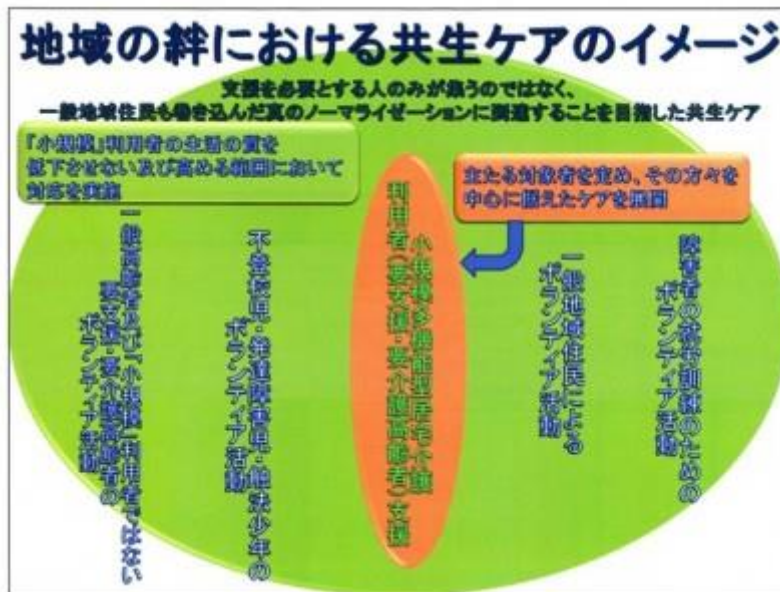
このように共生ケアの場面においては、多様な人間関係の中からその能力が引き出され、それが誰かを支える社会資源となり、やがて地域を活性化させることにも繋がっていくのではないのでしょうか。コミュニティケアの実践は、やはり、まちづくりに繋がっていると感じる毎日です。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

『まちづくりとしての小規模多機能ケア』

2011/02/09 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



「富山型」に代表される共生ケアや共生介護が謳われて久しい昨今です。これらの取り組みは、宅老所の取り組みに端を発していると言われていいますので、小規模多機能型居宅介護（以下「小規模」）が制度化される以前の礎も宅老所の実践であることを鑑みると、「小規模」と同じ系譜をたどる存在としても位置付けることができます。コミュニティケアの一概念として、対象者を限定しないケアという視点があると認識していますが、その意味において共生ケアはコミュニティケアであると言えます。

今回は、共生ケアとしてのコミュニティケア実践についてご報告します。平野隆之氏によれば共生ケアとは、「①地域のなかで当たり前に暮らすための小規模な居場所を提供し、②利用の求めに対しては、高齢者、子ども、障害者という対象上の制約を与えることなく、③その場で展開される多様な人間関係を、共に生きるという新たなコミュニティとして形づくる営み」※1とされています。

共生ケアについての「地域の絆」の取り組みは、全国の先駆的な実践には遠く及ばないものがあります。また、これを共生ケアと言えるのかどうか、微妙な点もあります。その要因は、やはり“度量の狭さ”にあるようです。高齢者ケアを中心に据えながら、どこまで児童や障害者のニーズに対応していくのか、不安を抱えながらの実践なので、思い切りの良さがありません。しかし、私たちはそのことを一概に忌避してはおりません。高齢者ケアや認知症ケアは、非常に奥行きが深く、実践するにあたり経験の積上げと自己研鑽が不可欠です。その上、児童・障害分野の経験と技能をどこまで積上げるのかを鑑みると、何でもありの対応は困難であると考えました。そこで、主たる対象としての高齢者（認知

症) ケアの質の低下を招かない範囲において、また、それらの質を向上させる範囲において、児童・障害分野のニーズにも対応していくという方針にまとめた次第です。ですので、職員はあくまで、高齢者ケアのプロフェッショナルを目指すことに傾注し、事業所に通所する児童・障害者に対しては、福祉専門職としての共通基盤の範囲で対応を行い、それでも対応困難な範囲においては、外部の児童・障害分野の専門職と連携を取って対応することが基本的な方針となります。であるならば、私たちの共生ケアの実践は、外部の専門機関との連携があってこそ成り立つ実践とも言えます。

そもそも私たちが行う共生ケアの目的は、地域住民の信頼を勝ち取ることにあります。高齢者のケアや相談にしか対応しない姿勢ではなく、「地域の絆」に相談すれば、あらゆる福祉分野の対応や相談を受けることができるといった関係性を結ぶための実践でもあるわけです。そこで生まれた信頼関係を用いて、利用者が安心して暮らせるまちづくりを実践することが最終的な目的となります。その意味において、共生ケアとしてはあまりインパクトのない実践かも知れませんが、実践例をいくつかご紹介します。

「地域の絆」の各事業所には、高齢者に限定しない福祉の総合相談窓口を設けています。高齢者分野以外の相談で圧倒的に多いのが、児童の発達障害に関する相談です。小児科医院の医師より、不登校の傾向にある発達障害児のボランティアの受け入れができないか相談を受け、医師からの情報提供と、本人・家族との面接を経て、受け入れを行いました。その後、そのお子さんの友人が活動するようになり、現在では 3 名のお子さんの受け入れを行っています。また、家庭裁判所と連携し、触法少年・少女のボランティアの受け入れについても同様に実施しています。共通した対応としては、①活動前に必ず本人・家族・関係者と面接を行い、活動内容に対する同意を得た上で活動を開始すること、②毎日、ボランティア日誌を書いて提出してもらうこと、③定期的に本人・家族とモニタリング面接を行うこととしています。①では、法人と受け入れる事業所の概要を説明し、法人・事業所として出来ることと出来ないことの説明と同意を得ることを要旨とします。また、家族にもボランティアとはいえ、事業所へ大切な子どもを預けても良いか否かの判断をいただきます。本人・家族の不安を払拭することも大切にしている視点です。②を行う意図は、児童なりの活動の振り返りを行ってもらうことや、事業所で活動した証を残してもらうことで、やがて事業所が本人の居場所になるのではないかと期待、自分の思いを文章にする練習等がありますが、一番のねらいは、学校の出席日数が足りない際の代替出席として、当事業所のボランティア活動を認定していただくために用意したものであります。いずれの児童も、ボランティア活動に来るようになって、学校の出席率が向上したため、そのような活用方法に至ったことはありませんが、そのような思いで日誌を書いてもらいました。③においては、やりっぱなしの活動ではなく、活動経過の確認と、課題の把握及び対応策について協議します。職員の業務負担軽減と本人・家族の緊張緩和に配慮して、

面接のためだけの日程調整は行わず、家族が送迎の際事業所に立ち寄った時などに、声をかけて面談を行います。そこで、活動が途絶えてしまいかねない事例のフォローや、事業所の負担が増えている際の調整を行っています。例えば、活動になかなか集中できない児童に対しては、自宅でお手伝いを行っている内容の聞き取りを通して、事業所での活動に取り入れるなどの調整を行うわけです。家でお風呂掃除と食器洗いを行っていると聞けば、それを事業所の活動に取り入れます。受け入れ日時の設定は、本人・家族の意向に沿って行っています。実績としましては、土日祝祭日、春夏冬休みの受け入れが多く、お子さんの状況にもよりますが、一日 2 名までの受け入れを基本としています。前述の通り、高齢者ケアの質が、低下しないもしくは、向上する範囲においての受け入れを原則としていますので、そこには職員の負担についての考慮も必要となるからです。

開設以来、課題を抱えた児童数名と関わりを持つ中、そこに共通の課題があることに気が付きました。①自分の居場所がないこと、②自己有用感が持てないこと。①は、学校や家庭、地域の中で、腹を割って話をするができる他者を持っていない子どもが多いこと。②は、他者から褒められた経験が圧倒的に少なく、自分は必要ない人間だと思う傾向が強い子どもが多いことを指します。

「小規模」の利用者（高齢者）を中心に据えたケアであったとしても、そこに共生ケアの視点を導入することで、地域の様子が見えてきます。その営みが、まちづくりへと繋がっていくのです。

※1 平野隆之氏 編著 『共生ケアの営みと支援 富山型「このゆびと一まれ」調査から』 全国コミュニティライフサポートセンター P.14 2005 年 10 月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

日本に合った代表監督？

2011/01/31 12:00:00 [社会全般](#)



サッカーアジア杯で 2 大会ぶり 4 度目の優勝を果たした日本代表。本日も朝からメディアはそれ一色です。久しぶりの平日休暇でテレビを見てみると、ザッケローニ監督の組織マネジメントを賞賛する声を多く耳にしました。中には、「これは程日本代表の監督に合った外国人監督はいない」「日本文化に合ったイタリア人」と評する声もあります。

スポーツ記事は時折しか読まない私ですが、この監督は大人しい監督だとの印象を持っていました。自身の色を前面に出さない方だと。事実、専門家も下記の様にコメントしています。

「チームとしてすり合わせをする時間の少なさから新しい戦術を植え付けるとか、新しい布陣を採用するとか、大きな変化をチームに持ち込むことをしなかったのも奏功した。

監督という人種は、自分の色をできるだけ早く出したがるものだ。代表チームなら選手を大幅に入れ替えたり、前任者との違いを強調したりするもの。イタリア人監督は就任してから半年近くたついま、まだ自分のスタイルをチームに当てはめるようなことはしていない。W杯でベスト 16 に入った流れを尊重して、その遺産をごく自然な形で受け入れている」※1。

現時点において彼の監督としての就任期間はわずか 2 年。その短い期間の中で結果を出すことが求められている状況下で、敢えて、彼は自分の色を出すのではなく、既存のチームの色を上手く活かすことを考えたのではないのでしょうか。この任された組織づくりが 20 年 30 年と続くのであればそこにはまた、違った手法も有効視されなければならないかも知れませんが、短期間で結果を出さなければならない組織づくりにおいては、特に既存の組織構造やメンバーの個性をしっかりと踏まえた上で、その特徴を最大限生かした組織づくりが求められるはずです。だから、そのことを徹底した。

つまり、メディアのコメンテーターが述べているように、「日本に合っている」のではなく、徹底して「日本に合わせた」のではないかと考えるのです。これは、ソーシャルキャピタルで著名な先生よりご教示いただいた内容にも通じるものですが、開発途上国の経済成長や復興を目指す ODA の活動などにおいても、その地域の文化や住民ニーズに即した援

助が最も効果を発揮すると言われているそうです。ザッケローニ監督はこのことの重要性を意図した実践をされているように思えてなりません。

と言うのも、彼は監督就任時下記の様に述べたと言われています。

「今、一番興味があるのは日本人と日本文化。『これほどまでよく働くとは思わなかった。選手も全員チームのために動く。イタリアでは考えられないからね』と話す。またイタリア時代には画家のゴッホに傾倒。日本で行われていた展覧会にも出かけたが今はゴッホよりも『武士道を勉強したい』という。一番の好物はすしだ。『刺し身も大丈夫。和食の方が、断然に私の口にあう。刺し身はイタリアでも食べていた』と笑う。

また昨年末の協会幹部との忘年会では『掘りごたつに入りたい。それがあつた店を探してほしい』と協会スタッフにリクエストして驚かせていた」※2。

明らかに意図して、日本文化に多く触れ学ぼうとする姿勢が読み取れます。その中で、日本の文化構造に合った強いチームを構築することを狙っているのではないのでしょうか。

また、チームの構成員ひとり一人に声をかけ、その個性を把握し、それを有効に活用する視点も見受けられます。であればこそ、控えの選手が本番で日の目を見るのでしょう。これは恐らく偶発的なものではありません。

「同監督はドーハ入り後毎朝、欠かせないことがある。朝食会場で、各テーブルを歩き回り、控え組の選手1人1人に必ず声を掛ける。『困ったことはないか？ ベンチスタートが続くけど、必ず出番が来るから。困ったことがあったら、いつでも相談においで』。カタルととの準々決勝で初先発した伊野波、韓国戦で途中出場した細貝と、控えだった選手が、得点を決めて日本を救っている。日替わりヒーロー出現の裏には、細心なところまで気を配る指揮官がいた」※3。

チームやその背景にある社会構造をしっかりと捉えた上で、その個性や特性を踏まえながら、組織マネジメントを行った帰結として、どうやらこのアジア杯の優勝はあるようです。

※1 潮智史氏 WEBRONZA「まじめなイタリア人の英断、選手も一人前になった」2011年1月31日

※2 『夕刊フジ』2011年1月26日

※3 『日刊スポーツ』2011年1月30日

古参者の教え

2011/01/26 12:00:00 [社会福祉](#)



近頃私の尊敬してやまない古参者との再会を果たしました。喜ばしい限りですし、まだその余韻に浸っている様な毎日です。また、示唆に富んだ様々なお話を伺うことができ、深く感謝もしているところです。

その中で記憶に清明として残っている事柄が幾つかあります。一つは滅私奉公のお話。元来滅私奉公とは封建的マイナスの意味合いが強い言葉ですが、自身を守るためにもこの発想が必要な時もあると彼は仰られました。組織人共通の悩みとして、縦軸と横軸のバランスを取りながら組織の歯車として働かなければならぬ現実があるわけです。「〇〇したいのに出来ない」「◎◎したくないのにしないといけない」様々な葛藤を抱えながら、職務を全うしなければならない。特に、優秀な人材ほど、様々な意見や気づきを持っているためその葛藤に駆られ易く、燃え尽きてしまう事があると。

そんな時、敢えて自分の意思や思いを黙殺し、目の前の仕事に没頭する。もしくは、大局の中の歯車として、自身の仕事を捉え直して、そのことに徹する。社会や組織の役に立っていることを実感しながら、目の前の仕事を、私心を捨てて潔く受け止める。そのような営みを通じて、実は自分を守ることが出来ると仰られるのです。

無論全ての組織、全ての過程において滅私奉公が必要でないことは自明の理でしょう。滅私奉公というマイナスイメージの凝着している考えも、状況や見方に応じてプラスに作用することがあるということです。ご多忙の極に達する中、自身を守られる術を、負のイメージの強いこの言葉から見出されたのだと、感慨に浸ってしまいました。

また、「専門職とは自身の限界を知っている人」であると言うのも古参者の口癖です。ジ

エネラリストソーシャルワークが謳われ出して久しい昨今ですが、社会福祉分野の専門性も今や従来の福祉分野から司法・教育分野まで多岐に渡っています。どの分野でも通用する共通の基盤を持ちつつも、「餅は餅屋」を自覚した実践が不可欠となるはずです。自身の得意分野と限界を理解すること、そしてその限界を補ってくれる他者・他機関と連携を図り利用者の支援を行うことが求められているわけですから、当然の発想と言えばそうですが、実践の中でつい忘れがちな原理原則かも知れません。そう言えば、ある先生から、自分の弱さを自覚しているからこそ、人は外部と連携を取ろうとする。ネットワークを作る第一歩は自分の弱さを自覚することから始まるとご教示いただいたことがあります。

私は元来コツコツと積み重ねることが苦手なタイプです。FFS 理論等のタイプ分析でも、顕著にそのことが表れています。「飽きっぽい傾向があり、コツコツと几帳面に取り組むことを苦手」とするのだそうです。もちろんこれに対して恥ずかしながら自覚があります。

だからこそ、私は多くの方と様々なお話をすることが大好きですし、それが私の生命線だと認識しているのです。如上の様な素晴らしい諸先輩が私の周りには沢山いらっしゃいます。時に何気ない話から、時に叱咤激励、指導を受けながら、多様な感化を頂戴します。その方の経験や生き様を肌で感じる事が出来るからです。

そして、それは私にとって、どのような本や教科書よりも優れた“教師”なのです。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 31 / 57

「悩む力」を培える仕事

2011/01/19 12:00:00 [社会福祉](#)



2008年にベストセラーとなった『悩む力』（姜尚中氏）を今再読しています。いつまでも記憶に残っている優れた著書は、最低でも2度は読むことにしています。優れた著書は、自身の成長及び置かれている状況によって、読み取れる内容が大きく異なると考えているからです。

「強制収容所に入れられた体験を持つことでも知られる精神医学者V・E・フランクルは、『Homo patiens（苦悩する人間）の、価値の序列は、Homo faber（道具人）のそれより高い』『苦悩する人間は、役に立つ人間よりも高いところにいる』と述べています」※1。

「いまでは『まじめ』という言葉はあまりいい意味で使われませんし、『まじめだね』と言われるとからかわれているような気分になります。でも、私はこの言葉が好きですし、とても漱石らしいと思います。すべてが表面的に浮動するような現代社会に楔を打ちこむような潔さがあると思います。

まじめに悩み、まじめに他者と向いあう。そこに何らかの突破口があるのではないでしょうか。とにかく自我の悩みの底を『まじめ』に掘って、掘って、掘り進んでいけば、その先にある、他者と出会える場所までたどり着けると思うのです」※2。

なぜ私が今この部分に引っかかるのかと言いますと、これは私たちの仕事と深く関係のある箇所だと思うからです。私たちの仕事は、目に見える「結果」や「成果」が日々得られるとは言い難い仕事かも知れません。目の前の認知症高齢者に懸命にアプローチを試みても、その「成果」が目に見えて分かりづらい仕事です。そもそもどのような「成果」を私たちは求めて利用者に関わっているのか。そのことすら問われる仕事です。利用者ご本人が求めていらっしゃる「成果」と私たち専門職が求めている「成果」が異なっているはいないか。迷い・悩みながら行う仕事です。

私たちは、利用者の生活に関わる仕事、利用者の人生に携わる仕事をしています。他者の生活や人生に携わることで、恐れや不安を抱くこともあるはずです。そして、他者のそれだからこそ「正解」は何処にもありません。あくまで、その時その時の「答え」を察して導き出し、これで良いのか不安を抱えながら、実践するしかないのです。それが私たちの仕事です。

しかしながら、不安や恐れ、迷いを抱かずしてこの仕事は行うべきものではありません。他者の人生に対する畏敬の念を抱きながら、ある意味恐る恐る携わるべき仕事なのだと思います。一見良い「成果」が見られたとしても、これで本当に良かったのか？一抹の不安を常に抱きながら実践するべきものでしょう。であるからこそ、「間違い」にもいち早く気づくことができ、「修正する」ことが可能になるのです。

予てから、私はこの仕事は悩まない人には向いていないと思っていました。他者の生活を、人生を、簡潔に決めつけてしまうような人には向いていないと。しかし、その実践は暗中模索の状況に陥りやすいことも事実です。如上の通り、不安と迷いからの脱却が困難であり、「成果」が見られないことから達成感が得られ難い傾向があるからです。私は、この辺りの支持体制を、組織や制度の中で支えていく仕組み作りが不可欠であると認識しています。このことは今後の課題としてあるわけです。

それでも敢えて、私たちの仕事は悩むことにこそ意義があると考えます。そして、そこから逃げ出すことなく、「まじめ」に向き合うことで、専門職として、一人の人間として成長できる気がしています。表層的・皮相的なものが蔓延る市井の中で、「まじめ」に悩むことは人類にとって今非常に大切なことだと認識しています。そんな中で、私たちの仕事は、その実践を通して、その大切な「悩む力」を培うことのできる素晴らしい仕事であると言えるのではないのでしょうか。

悩むことを通じはじめて、自分と向き合い、そして他者と向き合うことが出来ると本書は教えてくれているのです。

※1 姜尚中氏『悩む力』集英社新書 P.10 2008 年 7 月

※2 姜尚中氏『悩む力』集英社新書 P.42 2008 年 7 月

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

先人の叡智としてのとんど火祭り

2011/01/16 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



今朝の福山は氷点下 5 度。日中になっても然程気温が上がらぬ冷え込みでした。そんな中、朝 8 時前から仁伍町内会主催の「とんど火祭り及び新年互礼会」に参加させて頂きました。

熟達された大工さんが多くいらっしゃる仁伍町内のとんどは、煌びやかな佇まいで市内でも著名な存在です。しかし私は、煌びやかであることのみが仁伍とんど火祭りの誇りではないことをこの度の参加で再認識しました。

活動の中で、参加者ひとり一人に対して多様な居場所と役割が見られました。とんど火祭りという行事の中で、小さな集団がそれぞれの役割を担っているのです。とんどの準備をしている方、餅つきの準備をしている方、善哉・おつまみ・飲み物の準備をしている方、椅子やテーブルの設置をされている方、備品を借りに出ている方等、それぞれが思い思いに各小グループ活動に参加できる状況にあり、その小グループ活動がとんど火祭り全体を織りなしている様でした。高齢者には高齢者の、子どもには子どもの、女性には女性のそれぞれの役割があるのです。仁伍とんど火祭りは、全住民参加型のイベントであると言えます。

つまり、イベントの運営がまちづくりに繋がるという発想、イベントの運営そのものが目的ではなくその営みを通じて地域住民同士が交流促進を図るという実践がここには見られます。イベントの運営を経て、住民がそれぞれの役割を担い居場所を確保しています。日本の歴史の中で、行事がまちづくりの一翼を担っていたことは周知の事実です。それに整合する実践であると言えそうですね。

注視すべきは、これらの実践を意図的には行っていないことにあります。無論、一部のリーダー的存在の住民はそうではないかも知れませんが、大きく戦略的に意図してなされている実践ではないと認識しております。むしろ、ごく自然に、当たり前のように実践されているのです。これは、長らく続いた歴史・伝統・文化の中から育まれた姿勢ではないでしょうか。行事を開始した先人たちは、どの様な思いでこの活動を始めたのでしょうか。地域のリーダーの話によれば、古い資料の中には、とんど火祭りの目的として「地域住民の交流促進」が一つ挙げられているそうです。それなりに意図され始動したことが伺えます。しかしそれは何処まで緻密に戦略を持って、実践が始まったのかは定かではありません。これは私の勝手極まりない推測ですが、おそらく、そこまで強い意図や戦略を持って始められたのではないものと認識しております。住民が一致団結してとんどを運営すれば、住民同士が仲良くなるだろうと。その様な思いだったのではないのでしょうか。だからこそ、今至極自然に、住民に引き継がれた実践となっているのではないかと思うのです。その帰結として、リーダーが変遷しても久しく続いているのかも知れません。

斯くの如く、地域には奥行き深い財産と誇りがあります。おそらく皆様方の地域にも、誇り得るものがきっとあるはずです。そのことをしっかりと認識し、明日への実践に繋い

で頂ける事を切に願います。

数人がかりで設置するテーブル①



これは本当に優れた叡智だと認識しております。既製品の長机ですと、これは一人で運んで一人で設置が可能です。この場合、個人作業になってしまうのですが、仁伍町内会の机は違います。写真の通り、協働作業で机の設置がなされるのです。

物がなくても、いや、物が無いからこそ交流の促進が図れるのではないのでしょうか？
見事としか言いようがありません。

数人がかりで設置するテーブル②



善哉・おつまみ・飲み物の準備をされる方々



主に子ども会の方々と、元女性会の方々が活動されています。

子どもと高齢者は焚火の準備をされています。



備品の設営をされている方々



子どもたちは車に乗って、とんど火祭りのアナウンス①



立派に呼びかけをしていました。住民に何うと、読み文のたたき台は町内会で作成したが、実際の文章は子どもたちに考えてもらったとのこと。

子どもたちにも立派な役割があるのです。

子どもたちは車に乗って、とんど火祭りのアナウンス②



餅つきの準備をされる方々



それぞれに多様な役割があり、思い思いの場所で“仕事”をされていました。

短冊に願い事を...



地域の小学生が書いた短冊。毎年恒例の実践ですが、「お母さんの病気がよくなりますように...」の短冊に、ひとりの住民が「あの子のお母さん体調悪いんだなあ」と思わず反応していました。

地域交流の営みがここにもあります。

地域住民と職員の交流①



職員も朝早くから参加し、地域住民との談笑が絶えませんでした。

地域住民と職員の交流②



イノシシのお肉を切っているのが、地域福祉センター仁伍の管理者・名越さんです。

子どもの役割が豊富です①



とんどの点火に合わせた太鼓を子どもたちが演奏。

子どもの役割が豊富です②



とんどの感想を子どもたちが披露しました。堂々としていて、内容も立派なコメントでした。

とんどの点火です。来年も皆様にご多幸あれ！



緻密な計算に基づいて作られた竹酒の筒。



地域のリーダーにこれは知っといってもらいたいとお話をお伺いしました。

酒を注いだ際、ポンポンときれいな音が出るよう、竹の切り方と、穴の大きさを何度も試行錯誤し、現在の形に辿り着いたそうです。

その試行錯誤の際にも、住民同士が顔を合わせ、意見を出し合ったのでしょう。

これこそが、まさに日本の伝統文化としての行事の醍醐味なのです。

熊本の食文化

2011/01/11 12:00:00 [食べ歩き](#)

「駕町 どら家」(熊本市下通)
からしレンコン



からしレンコンの発祥の地が熊本であることを知りませんでした。また、からしレンコンを食べたのも実は今回が初めてかもしれません。食欲をそそるウコンの入ったカリカリの黄色い衣に、からしの効いた味噌の風味とレンコンの歯ごたえの調和がバランスよく絶品でした。

「駕町 どら家」(熊本市下通)
馬肉のヒレ



馬肉に対する印象も全く変わりました。牛肉よりも臭みがなく、甘みがあって非常に美味しいのです。馬刺しも、生レバーも甘みとうま味しか感じぬ代物です。

素材のみならず、調味料の配合等の調理方法が良いのでしょう。このお店に伺うためだけに、思わず熊本まで足を運んでしまいそうです。

店主の腕前に感謝！！

「桃源 銀杏通店」(熊本市花畑町)

太平燕



確か、タイビーエンと読むのだと思います。熊本は四川料理のお店が多く、そこで賄い食として作られ始めたのがこの太平燕。熊本の方は、この太平燕は全国にあるものだと信じている方が多いくらい熊本では著名な料理だとか。

残り野菜に春雨を入れて賄いで食べていたものが、庶民の料理となっているのです。

地域によって食文化が異なります。グローバル化し画一化した社会の中でも、このような多様性が残っていることを心より嬉しく思います。

「桃源 銀杏通店」(熊本市花畑町)

皿うどん



私たちが連想するのは、パリパリの揚げ麺に餡かけがあるものですが、熊本の皿うどんは全く違っていました。

甘辛い味で、お箸がどんどん進みます。

他の文化は画一化が進んでいるのに、食文化の多様性は残っています。それは美味しいものを食したいという人類の願望がそうさせているのかも知れません。



限られた時間の中で、熊本市内を昼夜散策させてもらっての些細な気づきを書き留めておきます。

熊本市の人口は 725, 466 人（2010 年 12 月 1 日現在）ですが、その割にお店や、道路・アーケードの幅が広く取られており、人口以上の賑わいを感じました。地元の方に伺えば、多くの方は車で 30 分～40 分圏内の市外に住んでいて、週に 3 回も 4 回も市内に出られるそうです。だから、人口の割に店舗数が多くても賑わいを見せているのかも知れません。

熊本城は圧巻でした。市街地のすぐ隣に広大な敷地を有しています。市民がこの城を大切にされていることを痛感しました。他の都市では、市街地活性化を優先し、城内の敷地を開発しているところも多く見受けられます。長期の視点に立てば、どちらが住民のため、まちのためになるのか、熊本市民の取った行動は正しかったと言えそうです。

広島市内と同様に、熊本でも路面電車が走っていました。タクシーの運転手さんは、「路面電車のおかげで、走りにくい」と言われる方もいらっしゃいましたが、まちづくりにはとっても最適な交通手段であると認識しております。地下鉄と比べると、上下移動が無いことから高齢者にも優しい乗り物と言えます。

滞在中のホテルでは、水道水を飲んで過ごしました。熊本県内は、水道水の殆どが地下水であり、ミネラルウォーターとして美味しく飲む事が出来るとのことでした。その土地土地に行ってみなければ、その土地の財産は認識できないものです。熊本県民にとっては当たり前のことであっても、よそ者から見れば、そこに重大な財産があることが分かります。これこそが、地域の持つ力なのでしょう。

食事や街並みを取っても、福岡や佐賀とは異なった独自の文化があることを認識し、感化されながら福山に帰ってきたところです。

開発中の熊本駅。高層マンションが建設中でした。福山と同じですね。



高齢者にも優しい路面電車が走る熊本市内。



賑わうアーケード。



店舗数はかなり多いと感じました。



相互関係にあるケアとまちづくり ～ライフサポートワークを通して学ぶ～

2011/01/09 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



幼年期私の記憶が定かでない折、伺ったことがあるようですが、私としましては生まれて初めて熊本に来ている感覚です。九州は暖かいという印象で来たのですが、駅に降り立った瞬間からその印象は覆されました。昨日は朝方氷点下 2 度まで下がったようです。地元の方によると、盆地であって、京都と気候が似ているとのこと。風邪をひかないよう戦々恐々としているところです。

全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会が主催するライフサポートワークの研修に参加させて頂くのが目的で熊本までやって来ました。現在殆ど行っていない大学院の修士論文で、小規模多機能型居宅介護のケアマネジメントを取り上げる予定ですので、このライフサポートワークの考え方及び実践方法の理解は避けて通れぬものと認識しておりますし、地域の絆における実践についても検討しなければならない課題であると考えてのことです。

二日間における講義の中で、最も重要なご指摘だと認識したことは、旧来の日本型ケアマネジメントではなく、ソーシャルワークに基づいたケアマネジメントを想定して、ライフサポートワークがつくられていることにあります。ケアワークとソーシャルワークを繋いだ言葉として、敢えてケアマネジメントという言葉を用いずにライフサポートワークという呼び方をしていると。

様々な定義がありますがソーシャルワークは、利用者の主体性を引き出しながら、その代弁機能を果たし、利用者のその時々「ニーズ」に対応する社会資源の発掘・創出・開発を行うことにあると認識しております。つまり、社会的弱者や少数派と言われる方々の立場に立って、社会と対峙し、時に変革を行うことがソーシャルワークそのものであると考えます。

元々ケアマネジメントはソーシャルワークの一部であると認識しておりますので、ソー

ソーシャルワークに基づいたケアマネジメントを実践することは「本来」自明の理であるはず
です。「本来」と書くのは、そのような認識がなされないまま、今までのケアマネジメント
が実践されていることを敢えて皮肉に表現しているわけです。つまり、従来のケアマネジ
メントは、社会資源の把握程度の実践しか行っておらず、その発掘や創出、開発、延いて
は利用者の代弁機能の有効化が殆ど見られないのが現状であるとの認識です。利用者の「ニ
ーズ」の充足化を第一義に考えているのではなく、今あるサービスの範囲内で如何にそれ
に対応していくのか、また今あるサービスで応えられない「ニーズ」に対しては「送致」
してしまう、と言った発想でなされているのが現状ではないでしょうか。

ソーシャルワークの視点で行うケアマネジメントでは、利用者「ニーズ」に応えること
を第一義と捉え、今ある社会資源では対応できないのであれば、利用者の立場に立って、
社会資源の発掘・創出・開発を行い対応を図ることになるはずです。また、家族や地域住
民の「ニーズ」と利用者の「ニーズ」に対立関係や乖離が見られる際は、あくまでも利用
者「ニーズ」への対応を第一義としながら、その実践を行うために家族や地域住民が協力
出来ることを共に探っていく必要があります。このような利用者中心主義の視点で、関係
者の思いを調整していくことが本来の調整機能なのでしょう。二日間の研修ではおおよそ
このような認識を得ることが出来ました。大先輩でいらっしゃる講師の先生方及び同じ受
講生の皆様方に深く感謝申し上げます。

利用者の生活支援をケアと捉えるのならば、ケアの行き着く先は、社会資源の発掘・開
発及び利用者の代弁機能にあります。利用者の「ニーズ」を最優先に考えれば、そこには
如上の取り組みが不可欠となるからです。つまり、ケアの実践を突き詰めて考えれば、そ
れはまちづくりへの実践に繋がるということが理解されます。そして、福祉専門職が行うまちづ
くりの実践は、利用者の「ニーズ」に応えることに繋がるはずです。まちづくりから、も
しくはケアから、別々の入り口から入ろうとも、その道程は何処かで必ずぶつかるはずで
す。

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[<< 前へ](#)

[次へ >>](#)

Page 32 / 57

地域交流のはじめ

2011/01/07 12:00:00

[地域密着型サービス](#)



1月7日（金）はコミュニティホーム仁伍開設以後の地域交流開始の日となりました。地域の絆では、地域交流は建物建設の1年前から始めるとの認識で実践しておりますが、この度の「はじめ」は開設した後の始動を意味するものです。

コミュニティホーム仁伍の所属する自治会、仁伍町内会では、住民が集うことのできる屋内空間として仁伍会館を有しています。しかし、仁伍会館は山の中腹にあり、長い階段を登らなければ館内に立ち入ることが不可能でした。特に高齢者の中にはこの階段を昇ることが困難な方もいらっしゃいました。そこで、懇親会の折老人クラブの会長に、そのような方のために、是非とも当ホームの法人研修室を活用していただきたいとお願いさせていただいたのです。法人研修室は3階にありますが、エレベーターがあるため階段の昇降が困難な方でも安心してお越しいただくことができ、また、当法人としても法人理念を鑑みると地域の方に積極的にご利用いただくことを地域支援の足掛かりとしたい旨、会長に打診させていただきました。すると早速、2・3日後に会長様より、次回の老人クラブの新年互礼会に使用させてもらいたいとご連絡をいただき、1月7日にご利用の運びとなりました。法人としては喜ばしい限りです。

地域の方が、このように日常的に施設を出入りしていただくことで、私たちは地域住民の人柄や思いに触れることができます。そのことを継続する中で、地域住民の「ニーズ」を把握することが出来るものと考えています。ここで、「ニーズ」と括弧付きで書いたのは、ニーズとは何か？ということに対する答えを自身は持ち合わせていないからです。ニーズは、地域の成熟度や発達段階、そしてその時々に変化するものであり、可変的で流動的なものであると解釈しています。だからこそ、日常的な関わりが必要不可欠であり、地域の

方が日常的に施設に訪れるという行為は、新たな「ニーズ」の把握に繋がり、それに応じて対応及び実践内容を変化させていくことが地域支援の要諦であると近頃は認識しているところです。ですので、この関わりの中で、私たちが地域のためにできることを更に深めて学び、それを実践に変えていくことが求められて行くのでしょうか。だからこそ、今日の実践はその「はじめ」に過ぎないのです。

会の中には、当ホームと併設の地域福祉センター仁伍の利用者も参加されています。施設は自治会に所属しているわけですから施設利用者も地域住民です。地域の中で、主体的に役割のある存在として関わりを持たせていただくことは、地域ケアの一環としても非常に大事な取り組みです。また合わせて、地域住民と職員との関わりも量・質ともに増えることとなります。今回は、法人本部の神原が祝辞を述べさせていただきました。

私たちに気を使われてか、多くの住民がエレベーターを活用して 3 階に来られました。帰りは、ほろ酔いの方もいらっしゃったためか、更に多くの方がエレベーターで玄関に降りられていました。また、帰り際 4 月の定例会のご予約もいただき職員一同大変喜んでおります。

このような日常的な繋がり不甘じることなく、それはそれで日々大切に紡いでいながらも、住民の思いや考えを肌で感じ、その時々ニーズに応じた実践へと繋いで行く、変化させて行くことがこれからは求められるのだと理解しているところです。焦る必要はありませんが、一歩ずつ確実に地域支援の在り方を熟成させていければと考えております。その営みこそが、利用者が安心して暮らせる地域づくりへと繋がるのです。

法人本部職員による祝辞



貴重な機会をいただけたこと、老人クラブの皆様にご挨拶申し上げます。

多くの方にご来所いただけたこと深くお礼申し上げます。



絨毯の上でできる全天候型カーリング 皆様ご熱心にされています。



利用者也参加されています。非常に集中された表情をしていますね。



私たちのまちづくりの中心には利用者がいらっしゃいます。



次回のご来所、心よりお待ちしております。ご利用有難うございました。



[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

[この記事にコメントする](#) [コメント\(0\)](#)

年賀のご挨拶

2011/01/01 12:00:00 [社会全般](#)



皆様、新年明けましておめでとうございます！！

ところで、物心付いた時より私は、なぜ年の始まりは1月1日なんだろう？なぜ1月1日は芽出度いのだろう？と考えていた人間です。そう思って色々と若輩ながら勉強してみると、これは国や民族、文化や個人によって多様な見解があることが分かりました。それ以来、価値の多様性を尊重する福祉専門職としては、何か複雑な心境で新年の挨拶をしている節があります。まあ、そんなことを思いながら今これを書いております。

本年はまた新たな挑戦の年となりそうです。一つは、3月に江田島市内において地域福祉センター鹿川が開設されます。そして、法人本部に研修・研究センターが稼働することも大いなる挑戦です。地域福祉センター鹿川では、島嶼部における地域ケアの実践を、そして研修・研究センターでは、法人職員皆様の人材育成を法人としてしっかりと後方支援していく体制づくりを担ってまいります。

当法人には、経営理念に共感し、志の高い多くの人材が揃っております。非常にありがたいことだと切に思う毎日です。本年からは特に、職員個人の自己実現と、法人としての

それを擦り合わせながら組織の団結力を高めていき、経営理念に勇往邁進できる組織形成のあり方を模索し、その実践に取り組んで参りたいと考えています。そのためにも、チームマネジメントの理論と方法について、私自身が率先垂範の姿勢で研鑽していくつもりです。

以上が誠に簡潔ながら、本年におきます私の決意と挨拶でございます。

本年におきましても、当法人に関わって頂いた多くの方々のご多幸と、そして何よりもその自己実現をお祈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。今年もご指導・ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

2011 年 1 月 1 日

特定非営利活動法人 地域の絆

代表理事 中島 康晴

年末 12 月 29 日 法人事務所から見た虹です。



今年も良い年になるそんな予感がしています。



今年から平素は、コミュニティホーム仁伍の 3 階にあります。お気軽にお越しください

く存じます。



[この記事にコメントする](#)

[コメント\(0\)](#)